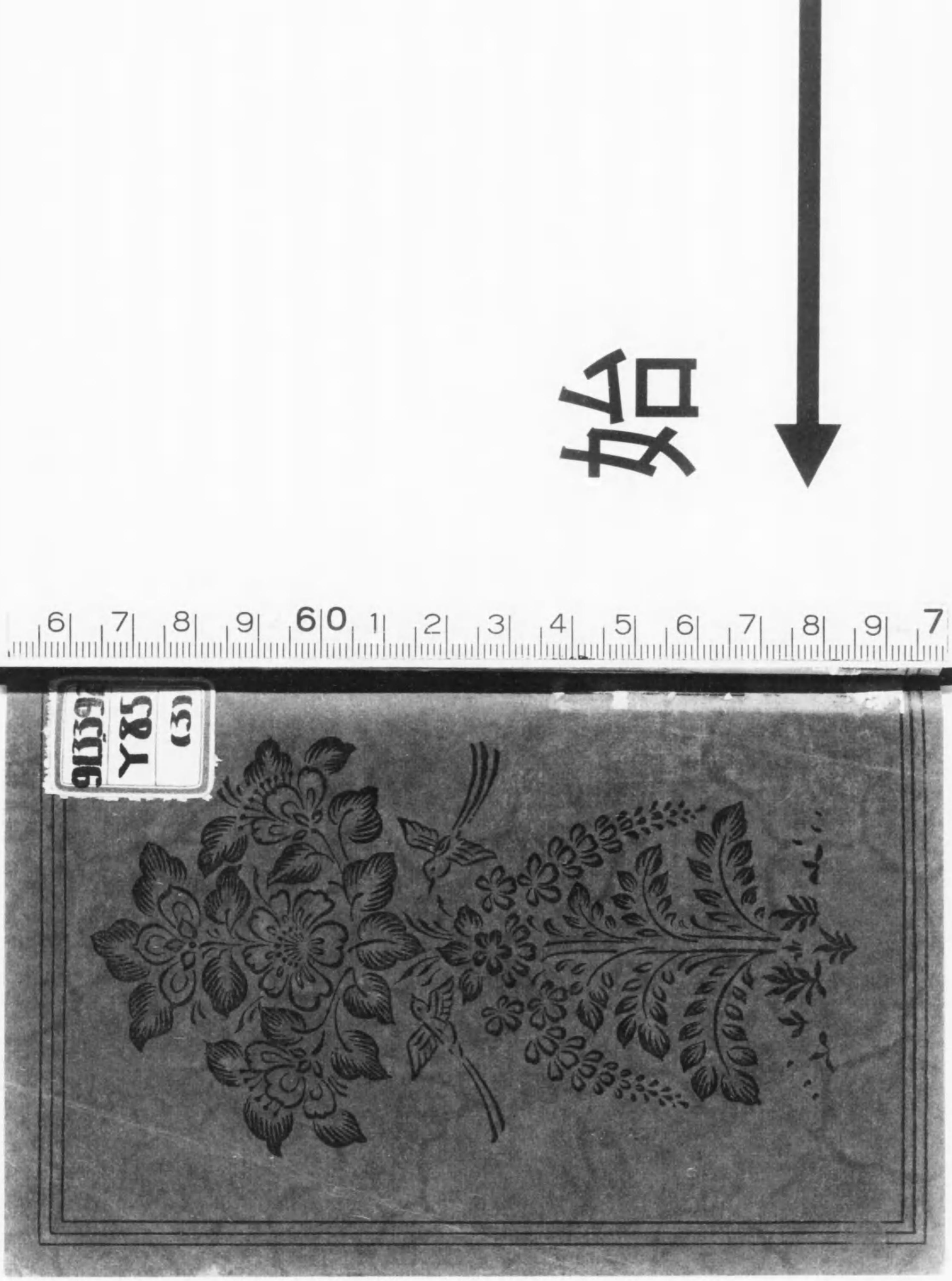


91559
Y85
(3)

91239
Y85
(3)

日本古典全集刊行會板

日本古典全集

榮華物語 下卷

附 赤染衛門歌集

與謝野寛 編纂
正宗敦夫 校訂
與謝野晶子

榮華物語下卷解題

一、此卷に載せたる「鶴林」までが「榮華物語」の「正編」と稱すべきもので、赤染衞門の作であると推定する事は、既に「上卷」の解題に於て述べた。初めは此「正編」だけが存在して廣く人に讀まれたので、鎌倉初期に追記された「大鏡」卷四の「世繼名」には「正編」のみの卷名を載せ、また和田英松博士が其力作たる「榮華物語詳解」（明治書院版）の解題に於て述べられた如く、平安末期の高倉天皇以後に書かれた「今鏡」が「榮華物語」の「續編」を參考してゐないのを見ると、「續編」はその最後の卷の「紫野」の示す寛治六年（一〇九二）以後に間も無く書かれて居ながら、鎌倉初期までは未だ多く世人の耳目に入らなかつた事が想はれる。

一、「續編」十卷が寛治六年以後に多く年月を經ずして書かれたと推定されるのは、和田博士が「本書の中、寛治以後なるべき人物及び官位等の混ぜしもの無く、また寛治以後に關る事がらの紛れつるものだに無ければ、其後程無く成りしものとせんに不可なきが如し。且つ上編〔「日本古典全集」編者等の謂ゆる「正編」〕は道長の薨去を以て結末としたるに、下篇〔編者等の謂ゆる續編〕の終には、中納言忠實が春日祭上卿を勤めし外には擧ぐべきもの無く、素より御代の末にても無く、攝關の代り目にても無く、甚だ無意味なるは、蓋し亦當時のものなる事の一證とするに足らん」と云はれ、また「鳥羽帝の始に書ける讃岐典侍日

記に下編〔續編〕を引きたるを見れば、寛治六年（一〇九二）より後、嘉承元年（一一〇六）まで十四五年の間に著作せしものなること明なり」と云はれたのに從ふのである。

一、「續編」の作者が婦人である事は、その觀察、嗜好、及び文章に由つて明白であるが、猶作者自身も「女の記るす事ならねば記るさず」（歌合）「女などの心及ばぬ事なれば止めつ」（布引の瀧）と書いてゐる。之に就きて、岡本保孝（一七八七「天明七年」――一八七八「明治十一年」）は「女の書ける物語のさまに取りなして女と云へるか、猶考ふべし」と云ひ、和田博士は之を作者自身の語とせず、その引用したる女房達の「日記の原文なるべし」と云つて「著者の何れなるかに就いては考ふべき材料見當らず、……著者の男子なりや否やは判定し難し」と云はれたが、我我は婦人の筆たる事に一點の疑惑を容るべき餘地を認めない。是れは當時の男子の筆に成つた同種の歴史小說たる「大鏡」を取つて少しく兩者の內容と文章とを比較するなら忽ちに首肯せられるであらう。苟も著作をしようとする男子は、如此き淺い教養と狹い眼界とを以て筆を執る事を敢てしない。

一、「續編」の作者を女子と定めて、さて早く之を出羽の辨一人の筆であらうとしたのは僧契沖（一六四〇「寛永十七年」――一七〇一「元祿十四年」）である。卽ち契沖は「百人一首改觀抄追考」に於て、「此卷〔殿上花見〕より出羽の辨歌初めて出でたれば、若くは以下十卷は出羽の辨の續け書けるにや」と云つてゐる。また土肥經平も「春湊浪話」に於て「此十帖の內に出羽の辨の歌多く出でたるにて思へば、此出羽の辨の筆作か」と述べてゐる。猶また之を二人の筆と見て、「殿上花見」より「根合」まで六卷を一人の作とし、「煙の後」より以下四卷を別人の作とする木下幸文の說があり、更に六卷までを一人、「煙の後」より「布引の瀧」まで三卷を一人、「紫野」を一人、合せて三人の作とする屋代弘賢、（一七五八「寶曆八年」――一八四一「天保十二年」）岡本保孝二家の說がある。和田博士は「下篇は上篇の如く統一する所無く、後より漸漸追加せしが如く見ゆれど、著者を數人なりとせんは、猶確かなる證無きことなり。先づは普通の說に從ひ、一人の著なりとせん事、穩當にして、難ずべきふしも無ければ、宜しく定說とすべきなり」と云はれてゐるが、既に諸家の異論を生ずる理由のあるだけに、「續編」の作者に關して定說を得る事は容易で無い。

一、さて茲に我我もまた「續編」の作者に就て臆說を附記して置く。我我は作者を二人とし、「殿上花見」より「煙の後」まで七卷は出羽の辨の筆、其後の三卷は逸名氏の筆であらうと推定する。出羽の辨は後宮の女房として、初め後一條天皇（一〇〇八「寛弘五年」――一〇三六「長元九年」）の中宮威子（九九九「長保元年」――一〇三六「長元九年」）に仕へ、威子の崩後、その所生の皇女である後冷泉天皇（一〇〇五「長治二年」）に仕へた。父平季信（ヒラノスエノブ）が出羽守であつたのに因んで此女房名を得た。「殿上花見」の卷に初めて出羽の辨の歌が出てゐるのは長元五年（一〇三二）の記事である。此時出羽の辨は廿歳ぐらゐで中宮威子に

仕へて居たと想はれるから、「煙の後」の卷に書かれた治暦三年（一〇六七）には六十歳になつて居た筈である。此人の歌集「出羽辨集」は自ら選んだものであり、其れに老年の作の多いのを見ると、六十四五歳頃までは確かに生きて居たと考へられる。即ち年代から云へば治暦三年以後、延久四年（一〇七二）から承保三年（一〇七六）までの五年間ぐらゐに六十四五歳の出羽の辨が右七卷の筆を執つたとする事には可能性が十分に有る。次に内容から云へば、既に契沖以來多くの學者と讀者とが氣付いてゐる通り、右七卷には出羽の辨の歌が多く載せられてゐる。當時には優れた女歌人に赤染衞門、和泉式部が年長者として生存し、外に相摸、大貳三位の如き名流が時を同じうしてゐる。出羽の辨の如き程度の女歌人に至つては、何れの宮、何れの家の女房階級にも多い事である。されば文學の鑑賞に一隻眼ある者ならば、決して權衡を失した歌の採り方をしないであらう。此七卷の中に出羽の辨の署名ある十八首を見るのは餘りに過度である。猶其外に署名せずして出羽の辨の作たる事の推定せられる歌も少なくない。「出羽辨集」に自作の褒められた事を書いて得意としてゐる出羽の辨である事を想ふと、從來の學者の中に「續編」を出羽の辨の作であると推定したのは當然である。さう思つて讀み返すと、出羽の辨が自己の歌を吹聽する爲めに、わざわざ筆を著けたと想はれる記事さへも幾處か有る。一體に出羽の辨が此七卷に顔を出し過ぎてゐる。之を書くに他人の見聞をも材料としたであらうが、女房階級の作者の狹隘な視野と淺薄な趣味とを超えた所が甚だ乏しい。「正編」が關白道長を中心として書いたのに倣ひ、是れは關白頼通を中心とする意圖を以て書きながら、實際の筆は權衡を失して作者の交友階級に私し、「根合」の卷に「女房の中らひにも、をかしき事多かり」と作者自身に云つてゐる範圍の記事が多い。從來の學者達は歌に於てのみ出羽の辨作者說を立てたが、我我は篇中の取材が出羽の辨の周圍に精にして他の重要なる記實に粗なる事を想ふと共に、作者出羽の辨の虛榮欲を特に最も露骨に示したものは「晩待星」の一卷である事を指摘したい。「この出羽の辨、いとをかしう風流者なるものから、有心なること、出羽の匂ひや、色の樣も殊になん有ると殿上の人人云ひけるを云云」と云ひたる如きは、他人の筆に擬して自讃を企てたる事の甚しいものである。また「其頃氷を扇の形にて、御硯の蓋に置きて、東宮の御方より此御方に奉らせ給へれば、敷きたる紙に葦手にて、出羽の辨、君が代に扇と見れば氷すら千代をかねてぞ結び貫く、と書き付けて參らせ給へり」とも書いてゐる。或は人あつて我我の所見を駁し、「若し作者が出羽の辨自身ならば、斯くまでの自讃を他人の筆に假託するに至らないであらう」と云ふであらう。併し如何に平安末期の文藝頽廢期に入らうとしてゐる時であつたとは云へ、男子にも女流にも猶其人に乏しとしないのであるから、出羽の辨ならぬ他の何人が、「續編」の中七卷に多くの墨を費して是れだけの讃美と優遇とを出羽の辨に捧げる者が有らうか。想ふに作者出羽の辨は清少納言の皮相を學んで、遠く其眞髓に達し得なかつた一閨秀作家であらう。

一、我我は前述の理由から姑く「續編」の作者の一人を出羽の辨と假定し、さて此作者の視野の狹く、想像

力と創作力との甚だ貧弱なる事を遺憾とする。之に比べて「正編」の作者赤染衞門の人格の高さと大きさとが今更の如く驚歎される。「正編」の作者は隨處に詩があり、精細な觀察、遒麗な妙文があつた。彼れを繼がうとした「續編」の作者は、せめて彼れの法成寺御堂供養の典雅華麗なる一章に對してだけでも、その御堂關白道長の榮華の結晶であつた法成寺の燒亡を叙するのに、渾身の力を揮つて悲壯哀婉の一章を示すべきであるのに、纔かに「二月廿三日の夜御堂燒けぬ。然ばかりめでたくおはします百體の釋迦、百體の觀音、阿彌陀、七佛、藥師など、丈六の御佛達、火の中に燃めきて火の中に立たせ給へる、あさましく悲し云云」の數行を以て平凡に叙し去つてゐるに過ぎない。また「續編」の作者の文章には精彩を缺くと共に、婦人の衣服を叙しては冗漫に流れ、想像と語彙とに乏しい爲めに空疎なる同語の重疊する所多く、且つ「斯かる事をまだ三島江の浪に打逢ふ事は有らじかし」(殿上花見)と云ふ如き、歌の掛詞を散文に用ひたる厭味なる技巧をも見るのである。如此きは「正編」の作者の假にも爲さなかつた所であつた。

大石千引(一七七〇「明和七年」——一八三五「天保六年」)が「是れまでの卅帖の文勢、文法、凡人のしわざと見えず。是れより下十帖は、作者他人なれば文章も劣れり」と云つたのは確評である。

一、我我の臆測する所では、出羽の辨は「煙の後」の終りに至つて筆を擱いた。此卷の最後に「後冷泉院の末の世には宇治殿(頼通)入り居させ給ひて世の沙汰も爲させ給はず、東宮と御中惡しうおはしましければ、其程の御事ども書きにくく煩はしくて、え作らざりけるなめりとぞ人申しし。東宮とは後三條院の御事なり」と書いてゐるのは、是れも此卷を評する他人の語に假托したる作者の自己辯護であつて、自家の女に皇子の降誕終に無きに失望して宇治に引退したる關白頼通と當時の曲折したる宮廷事情とに就いて書く事は、此作者の力を以てしては甚だ難しとしたのであらう。猶茲に「後三條院」と書いてゐるから、後三條天皇が太上天皇と成られた後、即ち延久四年以後に此七卷の書かれた事は明かである。

一、次に「松の下枝」より「紫野」まで三卷の作者は、同じく女房階級の婦人たる事は、其內容と筆致とに由つて十分に推定せられるが、何氏なるかは考へ得ない。其視野の狹く、想像力と創作力の乏しい事は前七卷の作者と同一であるが、作者自身が毫も顏を出さうとした形跡の無いのは、出羽の辨に比べて愼ましやかである。文才もまた出羽の辨以上に多く出て居ず、筆致もよく似てゐるが、唯だ聊か彼に比べて冗漫の病を免れてゐる。我我は初め、此三卷も出羽の辨の筆で無いか、出羽の辨の心境と文章とが是等を書く頃に少しく變化したので無いかと考へたのであるが、「紫野」の卷の寛治六年(一〇九二)以後には出羽の辨が八十一歲を越えて生存して居ねばならない。其れまで生き長らへて居たと想像する根據が無く、生きて居たにしても筆を執り得たであらうとは考へられない。三卷に出羽の辨の歌や彼れに關した記述が全く無いのも、出羽の辨の筆で無い事を推定せしめる。

一、我我は「正編」に比べて「續編」のすべてが續貂の譏を免れず、從つて其の文學的價値を低く評定する者であるが、然かも此「續編」の述作に由つて學問上に益する所の多い事を德とするのは勿論である。世

に多少の文才ある人人は必ずしも多く自ら擬るに及ばない、熱意を籠めてさへ書いて置けば、如何なる文獻と雖も後人を益する所の存するものである。

一、附錄として「赤染衞門集」を「群書類從本」に由つて添へた。是れは著者が老後に自撰して置いたものが傳寫されたのである。傳寫の誤と思はれる所を校訂し、また讀者の便宜の爲めに「　」此印の中に少しく人名の注をも加へた。假名書の所に漢字を當てたる所も多い。此題簽は「群書類從本」を撮影した。

一、ついでに云ふ。「出羽辨集」には此「榮華物語」の「續編」に出た歌が自撰されて居ない。作者は恐らく意識して「榮華物語」に讓つたのであらう。此事もまた「續編」の七卷が出羽の辨の作である旁證の一つとなるのでは無からうか。

一、最後に「上卷」の「解題」と本文とに生じた誤植其他を、次の如く訂正して置く。

一頁四行「太安萬侶」の傍訓はオホノヤスマロ。

一頁十二行「正編十卷」は「正編卅卷」。

一頁十二行「天曆元年（九四六）」は「天曆元年（九四七）」。

四頁七行「歌人歌學者であつた僧顯昭」は「歌人にして明憲上人の叔父であつた僧上學（或は覺）」。

七頁十二行「藤原妍子（一三三一——一四〇八）」は「藤原妍子（九九四——一〇二七）」。

十一頁八行「——一〇五七」は「一一九九」。

十二頁十行「大醫」は「大體」。

七十六頁一行「一の御腹」は「一つ御腹」。

七十八頁二行「御惱」は「御惱」。

七十八頁六行「御使」は「御使」。

八十五頁十一行「前司相如」は「前司相如」。

八十五頁十三行「相信」は「相信」。

九十三頁十一行「大元帥法」は「大元帥法」。

九十八頁十二行「御心地云云」は「御心地にも、また」。

百十一頁九行「然らめ事」は「然らぬ〔んノ衍カ〕事」。

百廿五頁十四行「此御方方」は「他御方方」。

百廿六頁十三行「我等云云」は「我等が交らひ」。

百卅七頁十二行「なさせん」は「まさせん」。

百四十一頁十行「勝れ」は「勝り」。

百六十六頁四行「一日」は「一日」。

栄花物語

下卷

昌平山房

榮華物語下卷目次

衣珠……一
萬壽二年（一〇二五）より萬壽三年（一〇二六）まで。
若水……二九
萬壽三年（一〇二六）より萬壽四年（一〇二七）まで。
玉の飾……四一
萬壽四年（一〇二七）。
鶴林……六〇
萬壽四年（一〇二七）より長元元年（一〇二八）まで。
〔以上にて正編を終り、次に長元二年（一〇二九）の記事を缺きて、續篇に接續す。〕
殿上花見……七六
長元三年（一〇三〇）より長元六年（一〇三三）まで。
歌合……九七
長元六年（一〇三三）より長元九年（一〇三六）まで。

著るは佗びしと歎く女房……一一三
長元九年（一〇三六）。
晩待星……一二五
長暦元年（一〇三七）より寛德元年（一〇四四）まで。
蜘蛛の振まひ……一四〇
寛德元年（一〇四四）。
根合……一四四
寛德二年（一〇四五）より康平三年（一〇六〇）まで。
煙の後……一七六
康平四年（一〇六一）より治暦三年（一〇六七）まで。以下治暦四年、延久元年、同二年の三年を缺く。
松の下枝……一八五
延久三年（一〇七一）より延久五年（一〇七三）まで。
布引の瀧……二〇三
承保元年（一〇七四）より永保三年（一〇八三）まで。
紫野……二二二
應德元年（一〇八四）より寛治六年（一〇九二）まで。
挿繪目次
住吉と天王寺　八四——八五
齋院の庭　九四——九五
住吉御幸　一九六——一九七
春日使　二三〇
赤染衞門集……二三三

榮華物語　下卷

衣珠

院の女御、尙侍の殿などの御事のあさましう哀れなれば、今年の秋は、嵯峨野の花も口惜しき匂ひなり。例は宮宮の前栽掘り、花見る人多かればこそ、自らをかしき事も有れ、哀れにて過ぎもて行けば、詠み人知らず、

人知れず心をのみぞ野べに遣る花見ん暇も無き秋なれば

返し、是れも覺束なし。

この秋は嵯峨野の花も甲斐無きに君獨りこそ心遣りけれ

などぞ、誰れも知らぬ事ども世には有べけれど、多くは書かず。中納言殿は、今は御心地も癒らせ給ひつれど、上の御有樣のいみじきに、我が平かに癒りにけん事も悔しう思さる。此の赤瘡は然るものにて、御物の怪のいみじければ、この御心地の名殘も怖ろしけれど、加持なども參らぬ程に、いとど御物の怪は强く成り增さりければ、弱り增さり給ふ。大納言殿も、中納言殿も、萬づ思し慌てたるに、いみじう心苦しう萬づよりも大北の方は、此年頃より、正月には、兒の御衣や何やと、準備事を爲集め給ふに、斯く尋常にも

おはせで、八月ばかりに成り給ひにければ、殘りの月日も心もとなく思す程に、斯くいみじき御有樣を、如何にと思し合はする程、理にいとほしげなり。御堂よりも御使頻りに有り。八月廿餘日の程なり。猶任せてのみ有べい事ならねば、御修法始めさせ給ひて、數多せさせ給ふ。樣樣の御讀經の聲聲さし合ひ喧騷れど、いと堪へ難げなる御有樣なれば、大納言殿、何事を爲殘さんと思す。唯だ我が御身に代へんと思し惑へど、其れに由るべき事ならばこそ有らめ。また佛師どもを二三十人召し集めて、絹ども取り出ださせ給ひて、等身の佛達を數知らず現はさせ給ふ。萬づの御願、祈りどもの料に、唯だ彼の御具どもを取り置かせ給ふ。「何に爲べきぞ」と御誦經に爲盡させ給ふ程、此御具ども皆爲させ給ふに、中納言殿の「是れなん我がいみじと思へる物ども」とて、御佩刀と御鞍とを取り出でて佛師に給ふ程など、佛師どもも、哀れに悲しく思ひて、惑ひ畫き奉る程に、廿六日の晝間に、いみじう惑はせ給へば、知る知らぬ多くの僧ども、鳴り掛かり加持參る程に、兒生れ給ひぬ。あな嬉しと思して、何時しか先づ見奉り給へば、眞の程にて生れ給へる兒のやうにて、いみじう大きに敵めしき男君の、やがて亡くなりて生れ給へるを、見付け給へる大北の方の御心地如何がは有る。大納言殿、中納言殿も、その御有樣いみじう思して、御心も恍れ惑ひて、いとど物も覺え給はず。子持の御心地、物も覺え給はねど、「兒は如何が」と述給へば、「いと美くしうおはす」と、在り顔に聞え成して、他方に率て奉りぬ。然て搔き臥せ奉りて、御湯を參るに、「兒を思へばなり」とて、露にても飲み入れ給ふに付けても見奉る事も樣樣涙こぼる。此兒の御有樣を、いみじく心憂しと思し惑ひて、大北の方物騷がしけれど、やがて尼に成らせ給ひぬ。此の上、猶更に賴み聞ゆべきやうも見え給はず、限り限りと見えさせ給ふに、いと哀れに心憂し。大納言殿、中納言殿も、俯ひ寄り俯ひ寄り、此の若君を打見打見泣き給ふ。「然て此の御心地いみじけれど、佛神を賴み奉りて過ぐし給ふ程に、廿九日、いとど今日にこそと見えさせ給ふ。日頃すべて物を述給はぬに、「殿、上に仕うまつらで止みぬることこそ心憂けれ。我れこそ後れ奉らましを、如何に思さんずらん」とばかり述給へば、「やや、如何に思さるるぞ」と、大納言も母北の方も、つと捉へ奉りて、物も覺え給はぬ程に、やがて限りに成り給ひぬ。「然は是れこそ限りの御事なりけれ」と、動響み泣き喧騷り、內にも外にも、許多滿ちたる人は出で入りもせず、大納言殿、云ひ續け泣き給ふ。御齋に有る限りの人、涙を流して立ち混みたり。中納言殿珍らかに泣き喧騷り給ふ。すべて心憂し。僧などの、前つ頃、尙侍の殿の御折に參りたりしなどは、是れを世にいみじき事に思ひしに、是れいとどいみじうあさまし。御堂よりも、高松殿よりも、中納言殿の御有樣の、いとほしく覺束なきままに、御使頻りなれど、聞き入るる人も無し。御堂には斯くと聞かせ給ひて、哀れに悲しく、我が御有樣を思し合せて、大納言殿如何に思ひ給ふらんと、いみじう思されて、御齋食參らせたれど聞し召さず。打泣きておはします。大納言殿には、また二つ取り代へ有る御有樣にもあらず、唯だ此の上一所こそおはしましつれ。斯かれば、殿も北の方も、如何でか物覺え給はん。日も暮れぬれば、世の響きも音もせず、大納言殿云ひ續け給ふ御聲に、隣の人も、つゆ睡眠まれず。「あはれ年頃我が君を、懷にて生し立てて、出つとては、

今なん出でて罷るとて、御邊りの塵をも打拂ひ、御衣を引き直し、入るとては、今なん罷り歸るとて、今日は世の中に何でふ事か侍りつる、何やかやと見聞く事をば、先づ聞かせ奉らんと思ひて、佛などを拜み奉らんやうに思ひ敬侍きて、懷離れ給ひて、この五年ばかりなり。この殿に奉りて後ぞ斯くておはしつるぞかし。子亡くなしたる類ひ多かれど、其れは取り代へも有り、殘りをも見て慰むらん。我がやうにあさましう、ゆゆしき事は有らじかし。如何なりけん前の世に、人の種を斷ち、思ふ人の中を避けけん。兒君をだに平らかに得させてぞ亡せ給はまし、何に付けてか暫しも思ひ慰めんとすらん。許多現はし奉りつる佛、我れを今宵の中に、彼のおはすらん方に率ておはせ」と惑ひ給ふ。母北の方も、すべて日頃いみじう泣かせ給へる人の、いとど物も覺えで消え入りてぞおはする。中納言殿、長き夜一夜思し殘す事無く、我が死ぬべかりける代りにこそ有めれと、思し遣らん方無きままに、我身一つぞ、と爲し斯く爲し、思し惑ふ。はかなく夜も明けぬれば、然りとてのみやはとて、陰陽師召して事ども問はせ給ふ。猶斯く世の常の樣に占ひ奉らん事は、いとほしく思されて、唯だ然るべく斂め奉らんとぞ思されける。然れば其儘に述給はすれば、九月十五日の夜ぞ法住寺に率て奉りて、其月の廿七日に斂め奉るべう聞ゆ。是れを聞し召すにも、すべて此世の事とも思されず。許多の日頃、睡も變で仕うまつり慌てつる人人の打休む氣色、はた恍けてのみ見ゆ。皆然るべき人人も退きて、御屏風などの立て樣例に變りて、哀れにあさましく、悲しう、ゆゆし。然れど、大方は變らぬ事どもなれば、「やや、此は如何に」とのみこそおぼめかせ給へ。やうやう日頃に成るまま

に、中納言殿哀れに戀しく悲しとも、世の常に思されて、文集の詩を思し合はせらる。李夫人の有樣も斯樣にこそはと思されて、「燈火を背け壁を隔てて語らふ事を得ず、何處ぞ、暫く來りて、早く相見る事をもて爲ん。心を傷ますること、獨り武帝のみにあらず、往時より今に及ぶまで、また多く此くの如し」と思し續けて、侍從大納言の姫君の御折いみじと思ひしかど、其れはいと若くて、なかなか物の覺えて、はかなき事にて慰めき。此は大方有べう思されず。由無し文打書き、内裏邊りの宿直の折など、はかなき事ありしを、いと快からぬ御氣色にて、「麻呂が死なんをば如何に嬉しと思されん」など述給ひしかば、「あなゆゆし、斯かることな述給ひそ。然らん折は、麻呂も世に在らばこそ有らめ、法師に成りなんものを。すべて更に今より後、斯からじ」など聞えしものを、世に在らば人の邊りにも寄りなんや。おはせぬ影にも疎かなる樣にや見え奉らん。猶聞えしやうに、法師にや成りなましなど、世の中を哀れに心細く思しつつ、夜、つゆ御殿籠らず、歎き明し給ふ。斯くて十五日に成りぬれば、此度の御有樣の例の樣に有りけれど、御車に物卷きなど爲て、また煩かしうて亡せ給へれば、御湯殿など爲て、やがて兒君も同じ物に入れ奉り、かき添へて、御懷に抱だきたる樣にし、臥せ奉る程、大方誰も賢しう見奉るべきにあらず。また參り寄る人も少なし。哀れに悲しくゆゆしとは、何事を云ふべきにもあらず。大北の方も、此殿ばらも、又押返し伏し轉ばせ給ふ。是れをだに悲しくゆゆしき事に云はでは、また何事をかはと見えたり。然て御車の後に、大納言殿、中納言殿、然るべき人人は歩ませ給ふ。云へば疎かにて、え摸ねび遣らず。北の方の御車や、女房達

の車など引き續けたり。　御供の人人など數知らず多かり。法住寺には、　常の御渡りにも似め御車などの樣に、僧都の君御目も昏れて、え見奉り給はず。然て御車舁き下ろして、次ぎて人人下りぬ。然て此の御忌の程は、誰も其處におはしますべきなりけり。　山の方を眺め遣らせ給ふに付けても、　わざとならず色色に少し移ろふ木末も悲しく、鹿の鳴く音に御目も覺めて、今少し心細さ增さり給ふ。宮宮よりも思し慰むべき御消息度度あれど、只今は夢を見たらんやうにのみ思されて過ぐし給ふ。月のいみじう明きにも思し殘させ給ふこと無し。內裏邊りの女房も、さまざま御消息聞ゆれども、宜しき程は「今自ら」とばかり書かせ給ふ。進の內侍と聞ゆる人聞えたり。

契りけん千代は淚の水底に枕ばかりや浮きて見ゆらん

中納言殿の御返し、

起き臥しの契りは絕えて盡きせね［ぬカ］は枕を浮くる淚なりけり

また春宮の若宮の御乳母の越後の辨、

悲しさを且つは思ひも慰めよ誰も終には留まるべき世か

御返し、中納言殿、

慰むる方し無ければ世の中の常無き事も知られざりけり

斯樣に思し述給はせても、　いでや物の覺ゆるにこそ有めれ、況して月頃年頃にも成らば、　思ひ忘るるやう

も有らんと、我ながら心憂く思さる。　何事にも、如何で斯くと目易くおはせしものを、　顏形より初め、心樣、手打書き、繪書きなど、御心に入り、前つ頃まで、俯伏し俯伏して書き給ひしものを。此度の繪を枇杷殿に持て參りたりしかば、　いみじう興じ愛でさせ給ひて、納め給ひし。　善くぞ持て參りにけるなど、思し殘す事無きままに、萬づに付けて戀しくのみ思ひ出で聞えさせ給ふ。年頃書き積めさせ給ひける繪物語など皆燒けにし後こそ、　今年の程に爲集めさせ給へるも、いみじくぞ多かりし。　里に出でなば取り出でつつ見て慰めんと思されけり。　月のいみじう明きに、　故里を思し出でて、

諸共に眺めし人も我れも無き宿には月や獨り住むらん

斯く云ふ程に、やうやう御法事の程も近く成りぬれば、彼の御裝束や、僧の法服など、樣樣他事無く、打泣き打泣き準備がせ給ふ。　御經、佛などにも、唯だ御具どもを爲入れさせ給ふ。御堂には尙侍の殿の御法事、九月廿一日に阿彌陀堂にて爲させ給ふ。　聞し召しける御器を、佛に造り奉らせ給へるなりけり。　其程の事ども思ひ遣り聞えさすべし。　色色の御衣ども爲重ねて御誦經に爲させ給ふ。御袂に結び附けさせ給ふ。　殿の御前、

裁ち重ね見すべき樣も知らせねば鐘の音にて濟つと知らなん

是れを皆分たす。山の座主賜はりて、

我し有れば確かに濟せん心ざしいろいろ深き花の袂は

東宮、殿ばらの御誦經皆有り。東宮は盡きもせず思し召さるるにも、今日いとど思し昏らませ給ふ。御正日は廿三日にぞ有りける。其れにもまた御經、佛、樣樣いみじき事ども有り。若宮の御五十日は廿二日にぞ當らせ給ひける。いとゆゆしき程の御事なれば、二十七日吉き日なりければ、其れにぞ聞し召させける。大宮萬づに取り扱ひ聞えさせ給へば、いみじき事どもを爲させ給ひて、內、春宮、宮宮などに持て參り騷がせ給ふ。東宮よりも、思し至らぬこと無く細かに爲させ給へるに付けても、殿の御前いとど忍び難く思さるべし。花籠〔籠物ノ略〕や、折櫃物など、殿上人などに述給はせたれば、皆書き付けを爲つつ參らせたり。有べい限りは、めでたきに付けても況してとぞ思されける。若宮五十日打過ぎさせ給へる程、云ふ方無く愛くしうおはしますに、大宮も言忌もえ爲させ給ふまじけれど、善く忍び敢へさせ給へり。彼の法住寺には、其の北の方の大門に其日の中に築土築き、檜皮葺の屋いとをかしげにて、其處にぞ歛め奉りける。萬づの御裝飾ども爲て、御車ながらに舁き下ろして歛め奉る。其程此殿ばらの御心地ども思ひ遣るべし。云はん方無く惑はせ給ふ。有べい限りの事ども爲て、今はと見奉らせ給ふ程も云ふ方無し。雲霧と見成し奉りつるは、暫しこそ有れ、さすがに爽やかなるに、是れは更に忘れもこそ爲奉れとて、大納言殿、法住寺の御歩りきにも、忘れじの御心なりけり。あさましうゆゆしく歛め奉りつ。大納言殿、返す返すも思し惑はれたり。四條大納言の姫君、一年失ひて歎き給ひしかど、內大臣の上に萬づ思ひ慰め給ひしに、また其上亡せ給ひにしは、いみじき事ぞかし。然れど其れは、彼の上の數多の君達、御代りにおはす。また左大辨の君あり。侍從大納言の嫡妻腹の姫君の御事いみじかりき。其れは大納言、女男數多持ち給へり。北の方ぞいみじう思すべけれど、少將の君持給へり。斯樣なれば慰め此上無し。此大納言は、此御中どもに、樣樣いと數多失ひ給ひて、唯だ此上一所選り留まり給ひて、萬づに勝れておはしつるを、少少にて數多おはしますとも何にかは爲んとのみ覺えつるに、あさましく心憂しとも疎かにぞ。神無月にも成りぬれば、大空の時雨も隙無く思されて、紅深き御涙も墨染に色增されば、いみじうのみ思さる。御法事は、やがて此月十八日とぞ思して、萬づ準備がせ給ふ。中納言殿斯くて居させ給へれば、遠き程なれども、世の人參り混む。徒然も無きまで、物騷がしう思さるるに付けても、大納言殿は、今暫しぞかし、外へ渡り給ひなば、如何に慰む方無く、いとど樣樣戀しき事多からんと、今より其れをさへぞ歎かしう思さるべき。中納言殿、憂き世なり思ひかけきや時の間も君に逢ひ見で過ぐすべしとは

此御事を、或人、外の袂も乾き難く覺えけれど、いといみじき頃過ぐして、斯くぞ聞えたる。

尋常にも有らぬ別れの悲しさは如何にとだにぞ問はれざりける

と聞えたりければ、母北の方、

今日までに有りとも人に知られじと涙に沈む身をば問ふらん

只今の左兵衛督と聞ゆるは、此大納言の、御弟を、やがて子に爲給へるなりけり。其の北の方には、堀河殿の大藏卿正光の君の御女をぞ年頃物し給へれど、月頃物の怪にて、ともすれば絕え入りつつ煩ひ給ひけれ

ば、靜心無くて、此方にもえ侍ひ給はず思し歎きけり。斯くて十八日に、やがて此御寺にて御法事あり。大納言殿の年頃の御物、唯だ此度振ひ給ふ。中納言思し至らぬこと無く、嚴めしう爲させ給ひて、御忌も果てぬれば、廿餘日京に出でさせ給ふ。此もいと心憂く、思ひ出で無き身やと思せど、然りとてやはと思して、彼のゆゆしかりし所所にては有らで、田中の僧都と云ふ人の車宿にぞおはしける。あはれ若君おはせましかば、此頃如何に愛くしうおはせましと、東宮の若宮の御事など傳へ聞かせ給ひても、大納言殿盡きせず思さる。中納言殿は、内、春宮、宮宮などに畏まりばかりに參らせ給ひて、つくづくと物を思し明し暮す。院の女御などの御事を、暫しこそ有りしか、今は萬づに戲れさせ給ふめるを、いともどかしう心憂しと、思ひ聞えさせ給ふなるべし。霜月に成りぬれば、世の中には五節の準備し喧騷る。中納言御服なる上に、立ち出でんとも思されず。五節にも成りぬれど、例の樣に童女、下仕なども召されず、物荒涼じげなり。斯かる程に、此頃聞けば、大宮に侍ひつる小式部の内侍と云ふ人、内大臣の御子など持たるが、此年頃滋の井の頭中將の子生みて亡せにけり。人のいとやんごと無からぬ方こそ有れ、死に樣の御事に似たる、大宮にも、いと哀れに聞し召して、世のはかなさ、いとど思し知らるるにも、如何で疾くと思し準備がせ給ふにも、御調度どもをぞ準備がせ給ふ。小式部の母和泉式部、子どもを見て、

留め置きて誰を哀れと思ふらん子は勝りけり子は勝るらん

と詠みけり。内大臣殿の若君をば、宮の僧都と云ふ人の坊におはしければ、和泉、「昔戀しければ見奉らん、渡し給へ」と、假初に有りければ、僧都、「唯だ此中河におはして見奉り給へ」と有りければ、和泉、

戀ひて泣く涙に影は見えぬるを中河までは何か渡らん

とぞ云ひ遣りける。はかなく師走にも成りぬれば、暦の軸本近う成りぬるを、哀れにも思ふ程に、十二月の朔日の日聞けば、右頭中將顯基の君北の方亡せ給ひぬと喧騷る。「あなあさまし、此は如何なる事ぞ」と聞けば、今の右衛門督の中の君なりけり。其れ日頃惱み給ひければ、何事も爲殘す事無かりつるも、あさましう成り給ひぬれば、中宮權太夫殿も、いといとほしう、萬づに扱はせ給ひつるに、斯く成り給ひぬれば、閑院の太政大臣を初め奉り、いみじう思し歎き給ふ。すべてあさましう、え去らぬ人人を置きて別れ給ふ人多かる年の有樣、云はん方無く心憂しや。誰も外外なればこそ疎かにも有れ、各御家には是れに似たる事無しとのみ思し惑ふぞ、げにいみじう哀れに見え給ひける。返す返す世語にも爲つべき年の有樣にこそ情無う心憂けれ。四條大納言殿は、内の大殿の上の御事の後は、萬づ倦んじ果て給ひて、つくづくと御行ひにて過ぐさせ給ふ。法師と同じ樣なる御有樣なれど、是れもいと合ひ無き事なり。一日にても出家の功德世に勝れ、めでたかんなるものを、今暫し有らば、御匣殿の御事など出で來て、いとど見捨て難く、理無き御羈絆にこそおはせめ、然らば此程こそいと好き程なれと思し取りて、人知れず、然るべき文ども見したため、御庄の司ども召して、有るべき事ども述給はせなど爲て、猶今年如何でと思し立つに、數知れず哀れに心細く思されて、人の心はいみじう云ふ甲斐無きものにこそ有りけれ、何ど斯く覺ゆべからん、いと我

ながらも口惜しう思さるべし。「何事かは有る」と思し廻しつつ、人知れず御心一つを思し惑はすも、いみじう哀れなり。此の御本意ありと云ふ事は、女御殿も知らせ給へれど、何時と云ふ事は知らせ給はず。斯かる程に、椎を人の持て參りたれば、女御殿の御方へ奉らせ給ひける。御箱の蓋を返し奉らせ給ふとて、女御殿、

有りながら別れんよりは中中に無くなりにたる此身ともがな

と聞え給ひければ、大納言殿の御返し、

奥山の椎が下をし尋ね來ば留まる此身を知らざらめやは

女御殿いと哀れと思さる。斯くて大納言殿は侍ふ人人などの、偏に頼み聞えたるをぞ、いと數多見捨て難く思さるるに付けても、哀れにのみ思されて、まだきに斯くと知らせじとや思しけん、述給ふやうは、「長谷に堂建てんと思ふに、北に當りたれば、いと怖ろしければ、彼の寺に、年の内に行きて、四十五日其處にて過ぐして、來年の二月ばかりになん京に出づべき」など云ふ事を述給はせつつ、萬づに有べい事を思し掟てければ、辨の君より初め奉りて、唯だ然のみ思したり。我が御乳母の、年いみじう老いて、然るべき人人にも後れて、唯だ偏に殿を頼み奉りたるぞ、有るが中にも哀れにいみじう思されける。其れにぞ、はかなき事ども此頃取り分きて哀れに爲させ給ふ。尼上も二條殿にぞ此頃はおはしましける。斯くて長谷の御出立を爲させ給ふとて、「彼處の僧の然るべきにも打取らせんと思ふなり」とて、わざとも有らぬ法師の裝束をぞ日頃せさせ給ひける。十二月の十六日の程なりけり。今日然るべき人人にも對面し、然るべき事をも聞え給はんと思して、二條殿におはす。然るべき睦まじき人人、二三人ばかり御供にて參らせ給へば、御門入らせ給ふより初めて、哀れに、「此度ばかりぞかし」と思すに、奇しう人惡ろき御心出で來ぬべきを思し紛らはして、西の對におはして、御厨殿を見奉り給へば、まだいと幼き程なれど、人のいとやんごとなくて、もてなし愛護き居ゑ奉り給へれば、小さながら家の君にておはする御有樣、いと哀れに愛くしう、悲しう見奉り給ふ。御手習をぞ爲させ給ふめる。中の君まだいと何心無げに打見て居給へり。御厨殿の御手習ひを申して見給へば、あはれに美くしう書かせ給へり。唯だ昔戀しき古歌どもを、返す返す書かせ給へるにも涙止め難くて、其れに言托けて、やがて泣かせ給へば、御厨殿もいみじう泣かせ給ふ。中姫君も悲しと思したれど、其れは物耻かしうて、面を赤めて見給へり。哀れにいみじう思されて、「此度ばかりぞかし、又は何時か頓に見奉らん」と思召すぞ、いみじう堪へ難きや。然て何や斯やと思し紛るる程に、殿參らせ給へば、物眞實やかなる世の中の御物語、來年の除目の事や、また大宮の御尼成りの事やなど、「唯だ御調度どもの出で來るを待たせ給ふなり」と聞えさせ給ふ程に、二郎君、三郎君轟めきておはして、「やや大父がおはしたりけるを知らで、今まで來ざりけるは、癡れたりけるわざかな。あはれ、我れは野に掛からん、我れは藤にこそ居め」など、競ひ爭ひ、騒ぎ合はせ給へば、「いであな物狂ほし、斯うな仕うまつりそ、仕うまつりそ」と制し聞え給ふに、何處かは、あやにくに睦び聞え給へば、忍び敢へ給はず、御面に御衣の袖を押し當

てて泣かせ給へば、内の大殿は、昔を思し出づると見えさせ給ふに、堪へ難くて、やがて、差し向ひ泣かせ給ふに、御前に侍ふ人人も皆泣きにたり。猶いと理無く思さるれど、賢う疇躇はせ給ひて、萬づに御物語ありて、歸らせ給ふとて、尼上の御方に差し覗かせ給へば、例の短き御几帳引き寄せて居させ給へり。「舊り難の御物耻ぢや」と、哀れに見奉らせ給ひて、「此君達の珍らしがりて、領じ給へるこそ、いみじう哀れに」とて、また打泣かせ給へば、尼上もやがて止めさせ給はめ程も、いみじう哀れなり。やや御物語ありて出でさせ給ひぬ。四條の宮に歸らせ給へれば、やがて女御殿の御方に差し入り給へれば、御行ひの折なりけり。何事も哀れに聞えさせ給ふ。「此屋に今針檜皮を葺き敢へず成り侍りぬる事の口惜しさ。板屋は雨の音の喧しさこそ、道理無く侍りけれ」など聞え給ひて、「御庄庄の絹などを清やかに奉り侍らぬ事の怪しさに、年返りてぞ御使遣はすべかめる」など聞え給ふ。哀れに頼もしう、おはせぬ世にも有らば如何に心細からんと、先づ知るものに思されけり。然て歸らせ給ひては、我が乳母の尼君の許差し覗かせ給へれば、「やや」と畏まりて、起き上がる氣はひも、いみじう哀れなれば、「何、唯だ然てを」と述給はす。「如何にぞ、寒くや物し給ふ」と述給はすれば、「寒き夜や有らん、時時亂り心地の過まり侍るは」と聞ゆれば、御衣を脱ぎ給ひて、「是れを着給へ、是れぞ綿厚き衣」と述給はすれば、「畏まりて」と聞ゆる氣はひ、いと哀れに古代なり。我事を如何に思はんと、哀れに思して歸り給ひぬ。然てつくづくと物を思し續くるに、あさましう心憂きものは人の心にこそ有りけれ。世に有る人の、或るは愛しき子に後れ、或るは女、男の哀れに思ふに後れ、或るは耻がましき事出で來、或るは幸ひ無くなど爲て、最も出家せんに適へめべき人の思ひ立ためは、唯だ斯くにこそ有りけれ。朧ろげに心好からん人の、有べい事にも有らざりけり。斯かれば、淨土にも生れ、佛にも成る人は少なかりけりと思し知らせ給ふ。然て明けぬれば、晦日の程の事どもなど、家司に仰せられなど爲るに、左大辨參り給へれば、然るべき事など聞え付け給ふに、辨の君、「彼處にいみじき鯉の侍ひつる、聞し召させばや」と申し給へば、「精進近く成るとて人の魚食ふ、いと本意無き事なり」と述給はすれば、いと口惜しくて止み給ひぬ。斯くて女房などにも、「來年二月十日の程には出でぬべし、其程心細しと思はで有るばかりぞ」など述給はせて、晦日の程の事どもなど思し捉て、十二月の十九日にぞ長谷へ入らせ給へば、女房など、「徒然に有るべき正月なめりかし」とて、「月日も過ぎて、歸らせ給ふべき程になん」など申し思へり。辨の君など、皆御送り仕うまつり給ひて、有るべき事ども聞え交はして退かで給ひぬ。其後度度參り給ふ。斯くて奥山の御住ひも本意あり、心長閑かに思されて、年も暮れぬれば、一夜が程に變りぬる峰の霞も哀れに御覽ぜられて、「山里如何で春を知らまし」など打眺めさせ給ふに、朔日の日も暮れて、二日辰の時ばかり、辨の君參り給へり。思ひ掛けぬ程の事かなと思さるるに、御裝束持たせ給へりける、隱れの方より麗はしうして、御前に出でて拜し奉り給ふなりけり。人中の折の御住ひだに、猶我が御心には勝れて見え思さるる御有樣の、況いて然る山の長谷の邊にては光るやうに見え給ふに、あないみじ、是れを人に見せばやと、見る甲斐あり、めでたの只今の有樣やと、人の子にて見んに、

羨ましくも足らまほしかるべき子なりや、眉目容貌、心ばせ、身の才など、如何で斯く有りけんと、哀れにいみじう思さるるにも、御涙浮びめ。然て山里の御主人、所に從ひ、をかしき樣にて、御供の人にも御酒賜ひて、歸り給ふ名殘戀しく眺め遣られ給ふ。斯くて正月四日の早旦、御堂に、三井寺別當僧都尋ねに、御消息物せさせ給へば、參り給へり。然て心長閑かに御物語など有りて、御本意の事も聞え給へば、僧都打泣きて、御髮下ろし給ひつ。戒など授け奉り給ひぬ。斯くて歸り給ひぬれば、世にやがて洩り聞えぬ。是れを聞し召して、御堂より御裝束一領して參らせ給ふとて、

往時は思ひ掛けきや取り交はし斯く着んものと法の衣を

御返し、長谷より、

後れじと契り交はして着るべきを君が衣に裁ち後れける

とぞ聞えさせ給ひける。斯くと聞し召して、內の大臣の急ぎおはしまして、「何ど斯うあさましく賴もしげ無かりける御心かな。他人どもの御事は聞えじ、御匣殿のとかうの御有樣を思し捨てつるなん、いみじう心憂く侍る」など、いみじう細やかに恨み申させ給へど、「然思ひ給へてこそ今まで侍りつれど、況いて然樣の御折に敢へて思ひ掛くべきにも有らねばなん、斯く思ひ給へ成りにし」など申し給へば、內の大臣、道理無く打泣きて、「今はいとど、如何でか疎かには思ひ聞えさせん、世に侍らん限りは何事も堪へんに從ひて」など、哀れに聞えて歸らせ給ひぬ。辨の君、童泣に泣き給へど甲斐無し。誰も皆聞き付けて、いみじう多く參り給ひ見奉り給ふ。尼上、女御殿、いみじう哀れに思し入り給ふ。女房達は、「兒計るやうに慰籍へ置かせ給ひしは、斯くにこそ有りけれ」と泣き惑ひ合へり。御乳母の尼君、沈み入りて臥しぬ。日頃ありて、辨の君、里より聞え給へり。

舊里の板間の風に夢覺めて谷の嵐を思ひこそ遣れ

長谷の御返し、

山里の谷の嵐の寒きには子の許〔木の下〕をこそ思ひ遣りつれ

雪のいみじう降る日、女御殿より。

思ひ遣る心ばかりは奥山の深き雪にも障らざりけり

斯かる程に、三井寺より、入道の中將の君、聞え給へりける。

まだ慣れぬ深山隱れに住み初むる谷の嵐は如何が吹くらん

と有れば、長谷の御返し、

谷風に慣れずと如何が思ふらん心は安く住みにしものを

少し心長閑かに思さるる程に、中宮大夫おはしたり。山の嶺、谷の底と、見上げ見下ろし給ふに、哀れに淒く、めでたく、面白し。嶺は梅などいと盛りに面白く、前前は常に見しかど、いとめでたくも有るかなと見給ふ程に、「此方に」と聞え給ひて、御對面ありて、萬づに御物語聞え給ひて、中宮大夫、先づいみじう

紋りも敢へず泣き給ふに、入道も御目に涙浮きぬ。大納言「如何に斯く思し立ちにしぞ、某こそ、あさましくは思ひ立たで、去年の八月の晦日より、胸は今に塞がりて、あさましくて侍れ」と聞え給へば、入道殿の御答へ、「此處にも斯く今までとは思ひ侍らざりしを、暫しいみじき程過ぐして、念佛、讀經をも心淨くてと、思ひ寛舒め侍りし程なり」と聞え給へば、大納言、「去年の有樣、あさましく、珍らかなる事ども多かり。京の中にも、某ばかりいみじき人は侍らず、斯かる事の類ひ、世に數多侍る中に、猶いと心憂き身になん侍る。入道殿の院の女御、尙侍と、月並びに失ひ奉り給へりし、いみじけれど、宮宮數多おはしまし、殿、內大臣殿を初め奉り、然るべき男君達も物し給ふ、すべて其御有樣聞ゆべきにあらず。右衞門督の頭中將の北の方いみじけれど、中宮權大夫の北の方物し給ふ、また頭中將いとめでたき子なり。侍從大納言の姫君の事こそ有りしかど、他女子も、男子も持給へり。斯う彼の御事こそ姫宮の御折に、いみじかりしを、また故上の御事、いみじと有れば疎かなり。然れども、其れは思しも慰めぬべし。內の大殿の君達七八人おはす。御厩殿など、今日明日の女御、后と思ひ聞えさせたり。また左大辨いと頼もしう物し給ふと云へば、萬づに思し慰めつべう頼もしきに、己れは、また二無き人の、唯だ明暮無きものと、愛護具に、是れ一人を思ひて、打見打見萬づを思ひ慰めて明し暮しし程に、やがて火を打消ちたるやうにて亡せ侍りにし後は、はかなき栗一つを食ふに付けても、易く入り侍らず、胸にのみなん侍る。如何がは爲ん、兒をだに留め置きて侍らましかば、命を掛け心を慰めても侍りなまし。其れさへあさましう侍りしかば、すべて然るべき昔の世の果報にこそはと思ひ給へれば、今まで世に斯くて侍る、いみじき事なり。然れど、仰せらるるやうに、暫し心を寛舒めんなど思ひて、月日を過ぐし侍る程に、先ぜられ奉り侍りぬれば、今は二の舞にて、人の御摸似を爲るに成りぬべきが、いと口惜しきなり。然れど中納言の物し給へば、其扱ひにて同じ樣なる心地して過ぐし侍れば、中納言も然てのみ有るべき事ならず、入道殿も、今まで有る事、見苦しき事なりと述給はすれば、此忌の程をだに同じ所に在らんなどぞ侍りし。其れさへ他所せられなば、況いて如何に如何に、何事に付けても、物思ひ慰め侍らんと思ふが悲しきこと」と云ひ續け給ふ。「げに、げに」と聞えて、誰もいみじう泣かせ給ふ。入道殿、「げに然侍る事どもなれど、人の心の憂かりける、許多ある君達を見て慰まん事は侍らず、愈哀れに戀しう、先づ見るにも涙溢れ、胸塞がる心地してなん、一向に思ひ離れんと思ひ侍りしなり。げにこそ人の心いと侘びしきものに侍りけれ。すべて朧ろげにて思ひ立つべき事にてなん侍らざりし」など、萬づ哀れに、打泣き打泣き聞え語らひ給ふ。大納言殿出で給ふ心も無く、「斯くてやがて留まるべき心地こそ爲侍れ」と泣き給ふ。入道殿も、いと哀れなる御事ども、いとど思し出でられて、生憎なるまで、「よよ」と泣き給ふ。大納言哀れに云ひ續け給へる事どもこそ、哀れに聞え侍れ。世の中の有樣こそ舊り難くいみじき事は有りけれと、いとど哀れに打行ひて過ぐし給ふ樣も、いみじうめでたし。此の大納言殿、入道殿とは、昔より今に斯く親しく睦まじき御中らひぞかし。雨の降る頃、長谷より、「鶯の雨に濡れて啼くを、御厩殿に御覽ぜさせばや」とて、

思ひ遣る人も有らじを鶯の何ど春雨に濡ちては啼く

とて、尼上の御方に聞え給へれば、尼上、御匣殿の御方に、是れを奉り給へれば、御匣殿、

見る人も思ひ捨てつつ鶯の入りし山邊に如何で啼くらん

斯くて御調度ども出で來ぬれば、大宮、此月の中に思し立たせ給ふ。御屏風どもには、黄なる唐綾を張らせ給へり。下繪して、然るべき心ばへある事どもを、耀大納言さまざまに書き給へり。　緣には唐の錦の地青きを爲させ給へり。襲ひには皆蒔繪したり。裏には香染の堅紋の織物なり。御几帳どもも皆香染にて、御帳などにも皆綾を香染にて、紫檀地なるに爲させ給へり。大方、御簾、御座の緣まで、皆香染なり。御厨子どもの蒔繪には皆法文を卷かせ給へり。云はん方無く見所あり、愈し。御持佛の有樣など、云ふも疎かなり。其日に成りて、殘る女房無く參り混みたり。源三位、伊勢の中將、中納言の君など皆參りたり。其日の女房の姿ども花を織りたり。月頃は我も我もと、後れ奉らじと申す人のみ多かりけれど、眞に成りぬれば空言なりけり。其事違へず、世を背き、同じ道に入る人人、少將の內侍、辨君、辨の內侍、染殿の中將、筑前の命婦などなり。此人人の姿ども、尋常なる折だに有り。別れを惜みたる、えならずめでたき中に、辨の內侍思ひ立ちぬるを、殿ばらなども、いみじう哀れがり述給ふ。宮の御有樣を見奉れば、紅梅の御衣を八つばかり奉りたる上に、浮紋を奉りて、えも云はず美くしげにて、御髮は身長に一尺餘ばかり餘らせ給ひて、御有樣、細小やかに豐肥らかに、美くしう愛敬づき、をかしげにおはします。只今の國王の御親と聞えさすべきにもあらず。をかしげに、女御など聞えさせんに好げなる御有樣なり。今年は萬壽三年正月十九日、御年三十九にぞ成らせ給ひける。いみじう若く、めでたくおはしますに、尼の御裝束いみじう爲させ給へり。御裝飾は皆今朝仕うまつりたれば、斯うておはしまさんも惡しからず見えたり。殿の御前を初め奉り、關白殿、內の大殿など、押凝りて見奉り給ふ。いと可惜しく、いみじく覺えさせ給ふ。日暮るる程に、御殿油參らすべしなど騷ぐ程に、內裏より、何の辨ぞや、御使にて、官の使部ばらなど捧げて絹持て參りたれば、御前の御階の下に、御使侍ふ。御文取り入れて御覽じて、御使に祿賜はせ、官の使部ばらに疋絹賜はする程のめでたさを、許多參り混み給へる上達部、山の座主、權僧正明尊、世にめでたき事に申し給ふ程に、また東宮より、同じやうにて持て參りたり。御使、前の樣にて歸させ給ふ。皇太后宮、中宮などより、皆裝束持て參り集まりたれど、物騷がしさに紛れて、御使逃げにけり。其物ども、明日御覽ずべし。斯くて今は成らせ給ふに、三井の僧都は御從兄にて、內外し給へれば、御髮下ろし奉らんとて有るに、關白殿御鋏刀奉らせ給ふに、御目も昏れ惑ひて、いみじう泣かせ給ふに、殿の御前、斯く成らせ給ふを、「此世の御幸ひは極めさせ給へり、後生如何にと思ひ聞えさせ給へりつるに、いと嬉しう心安き御事なり」と慰し聞えさせ給へれど、然ばかりめでたき御有樣の俄かに引き更へさせ給ふをば、殿の御前を初め奉り、殿ばら、上の御前、塞きも敢へず泣かせ給へば、宮の御前いと慌ただしげに思召したり。年頃の宮司の民部卿、御簾の下にて、いみじう泣き給ふ。あさましく哀れなる御事どもになん。辨の內侍、畫いみじう裝束きて、挿櫛に

物忌をさへ附けて、思ふ事無げなりつる程は、然云ふとも如何がと思召しつるに、局に行きて、打成りて、押し返して、細小やかにをかしげなる尼君の、數珠引き提げて出で來たるに、あさましう哀れにて、殿ばら、「猶魂ある者には先ぜられぬべきものかな」と、いみじう感じ述給はす。御前を初め奉り、皆戒受けさせ給ひて、僧達祿賜はりて退かでぬ。いみじう美くしげに尼剃ぎたる兒どもの樣にぞおはします。御髮上げさせ給へりし御有樣にも萬づ見えさせ給ふ。盡きも爲ずめでたき御幸ひ有樣の際限り無くおはしますを、いみじう見奉らせ給ふ。內裏より御使あり。下り居の帝と等しき御位にて、女院と聞えさすべき宣旨持て參りたり。御使祿賜はりて參る程、殿の御前歎獻も「よよ」と泣かせ給ふ。御前の火炬屋取り出でて、陣屋壞ちなどすれば、衞士火を燒きさして、心慌ただしげに思ひたり。陣の吉上涙を流したり。いみじうめでたき御有樣なるに、やんごとなき宮司どもは、やがて院司に成りたり。然も有るまじきは、離るるをいみじき事に思へり。民部卿はやがて院の別當に成り給ひぬ。判官代は、例の院は藏人などには有らぬ人の望み成る事なり、是れは此院の藏人の中にも、やんごとなきを撰り成させ給へり。樣樣めでたし。又の日少し心長閑かにおはしませば、昨夜の宮宮の御消息ども、取り出でて御覽ずれば、皇太后宮の御消息に、沈の御數珠に、黃金の裝束して、銀の御箱に入れさせ給ひて、梅の造り枝に附けさせ給へり。

斯かるらん衣の裏を思ひ遣る涙や袖の珠と成るらん

とぞ聞えさせ給ひける。中宮より同じ樣の御事ども有りけり。然れど其れは覺束なし。日頃過ぐさせ給ふまに、內裏にも、東宮にも、ゆかしき御有樣を、何時しかと心もとなく聞えさせ給ふ。齋院より斯く聞えさせ給へり。

君すらも眞の道に入りぬなり獨りや長き闇に惑はん

此御返し、殿の御前聞えさせ給ふ。

跡垂れて人導きに現はるるその宮仕へ惑ひしも爲じ

と申させ給へり。まこと枇杷殿の御返り、物騷がしくて、今までとて、

紛ふらん衣の珠の亂れつつ猶まだ覺めぬ心地のみして

とぞ聞えさせ給ひける。斯樣に此世、後の世まで、めでたき御有樣とぞ。故女院は御惱ありてこそ尼には成らせ給ひしか。是れは、我が御心と思し立ち成らせ給ふぞ、聞えさせん方無くめでたき。殿の御前返す返す忝く思召したり。斯くて此の御受戒あるべしとて、無量壽院の辰巳の方に、夜を晝に成して急がせ給へば、世界の尼ども喜びを成したり。まこと彼の左兵衞督の北の方、正月廿餘日の程に亡く成り給ひにければ、男君は少將實康の君、まだ童にて、然ては十四ばかりの姫君の、いと美くしきぞ持給へりける。萬づ哀れ哀れと思しつつ、左兵衞督扱ひ給ひけり。御忌の程、いと哀れにて過ぐし給ふに、此姫君の御夢に、此君を搔き撫でて詠み給ふと見えたり。

思ひきや夢の中なる夢にても斯く外外に成らんものとは

是れを傳へ聞きて、或人の聞えたりける。

夢と云へば分明なるだにはかなきを人傳に聞く程ぞ悲しき

と有れば、御返し、

傳に聞く程だに悲し思ひ遣れ微かに見えし夢の名殘を

此姫君、黑き御衣の綻びたるを見て、

形見とて染めたる色の衣さへ落つる涙に朽ちぬべきかな

哀れにて次次の御事ども爲果て給ひてけり。其後左兵衞督、物のみ心細く覺えて、心地も例ならず覺え給ひければ、風など云ひければ、有馬へと出で立ち給へど、此姫君の關心たさに、えおはせでぞ過ぐし給ひける。斯くて內の大殿には、三條院の姫宮を、院唯だ萬づに爲立てて、我が御子のやうに思し扱はせ給ひて、二月五日、山の井の向ひなる所にてぞ壻取り奉り給ひける。固より宮の人人多く侍ふ中に、若き人、童女など多く參り添ひたり。萬づいみじう今めかしうて、おはしまし初めさせ奉りつ。故宮の御果ても、二月に爲させ給ひてしを、猶宮は薄色に紅をぞ奉りたりける。いと甲斐有りて、めでたく通ひ聞えさせ給ふ。四月十日の程は小二條殿に渡らせ給ふべし。やがて其東の殿を一度にと思召せど、猶いと惡しければ、「斯かる旅歩りき見苦し」と殿の御前申させ給へば、先づ小二條殿におはしますべきなりけり。其後、院の御歩りきに、先づ誘ひ聞えさせ給ふ。萬づいと甲斐有る御中らひなり。斯くて四月に成りぬれば、賀茂の祭の準備にて世に喧騷る。四月十餘日の程にぞ小二條殿に渡らせ給ふべくて準備がせ給ふ。其夜に成りて、車十二してぞ渡らせ給ふ。院もおはしまさまほしげに宣はすれど、「有べい事ならず」とて、中務宮ぞおはします。院の殿上人ども御送りに奉らせ給へれば、樣樣の物被けさせ給ふ。中務宮の御方の侍士、御車副まで、皆其れに物被け、腰挿絹賜ふ。いとめでたく甲斐有る樣なり。舊の御方の女房達など、世の中を哀れに思し〔思ひノ誤カ〕たり。斯くて皇太后宮には、故三條院の御爲めに、御八講せさせ給はんとて、佛皆造り奉らせ給へるに、五月十九日よりと準備がせ給ふ。女房「何事を爲ん」と、あさましき事多かれど、「唯だ然憑にては有らで」と述給はすれば、とも斯くもえ思ひ立たず。世の常の姿を準備ぐ。御捧物の準備せさせ給ふ。所所に是れを準備ぐべし。彼の左兵衞督の此月立八日より、世の中心地煩ひ給ひし、同じ月の十五日の曉方に亡せ給ひにけり。哀れにいみじとも疎かなり。彼の有馬へだに關心たう思ひ給へる姫君を見捨て奉らん心地、思ひ遣る間無く悲しきなりけり。其夜の中に法住寺に渡し奉る。按察大納言の、「此君にさへ後れめる事」と、あさましう心憂き事を歎きて、萬づを捉て述給はす。「我こそ是れに斯くは云はれましか。心憂き事」と身を觀じ思すも道理にいみじ。姫君をぞ返す返す、誰も誰もいみじう思ひ遣り聞えさせ給ひける。斯くて枇杷殿の御八講は、請僧には山の座主、心譽僧都、講師十人が中に心譽僧都は入りたり。僧綱八人、凡僧二人あり。聽衆十人あり。斯くて廿一人の僧參れり。宮の御前は、一品の宮の御方におはしまして、宮のおはしまし所の母屋四間、南東の廂掛けて裝飾はせ給へりけり。殿の御前は、東の北の方に寄り

たる妻戸の下におはしまして、水の上の渡殿を、御休み所に爲させ給へり。殿の上おはしますべかりけれど、折しも、關白殿の若君甚う惱ませ給へば、いと口惜しく、え渡らせ給はず成りぬ。女房、初めの日、撫子を五つ着て、上に同じ色の羅、織物を着て、菖蒲の唐衣、摺裳なり。寢殿の西南面より、渡殿の西の對、東面、南とに皆居たり。御簾より初め、御几帳、菖蒲の末濃にて、皆繪ども書かせ給へり。上達部は寢殿の南の廂におはします。殿上人は上達部の後ろに勾欄に居たり。僧綱は母屋の東に寄りて、南を上にて西向きに侍ひ給ふ。凡僧は又東の廂に、同じ如、南を上にて北ざまに並びたり。斯くて五卷の日に成りて、女房、皆紅の匂ひ、同じ打ちたるを着て、上に二藍の織物、羅どもに、菖蒲の裳、撫子の唐衣どもなれば、朝日に當りて輝き亘れり。所所の御捧物持て集まれり。いみじう何時しかとゆかしきに、殿ばらゑり混み給ひて、未の時ばかりにぞ始まりて、捧物繞る。中務の宮の參らせ給へり。蓮の實を長く貫きたる樣にて持たせ給へり。其御次に關白殿、香の壺持たせ給へり。內大臣殿、銀の水瓶に孔雀の尾を挿させ給ひて持たせ給へり。女院より、瑠璃の壺に黃金五十兩入れさせ給へり。頭中將憲綱の君持たり。粟田殿の君なり。中宮同じ樣なる御捧物、中宮亮右中辨經賴の君持たり。小一條院、銀の琴を爲させ給へり。右馬頭兼房の君持たり。此宮のは、羅の綾の掛を、僧の數に爲させ給ひて、やんごとなき四位ども持たり。一品の宮の御捧物別盤、別匙ども、皆結び囊にて、造り枝に附けて、藏人二人持たり。殿の上の捧物、衲の袈裟、民部大輔實基の君持たり。殿の御捧物は、絹二十疋を群濃の絹に裹ませ給へり。僧の數なり。內大臣殿の宮の御捧物は、銀の盞の上に、鬘結ひて撫子を植ゑさせ給へり。春宮大夫殿、銀の法華經一部を爲させ給へり。中宮權大夫、提持たせ給へり。いと寬厚なり。中納言殿は團扇、是れより外は、さまざまの物、をかしけれど書き附けず。其日の講師、朝座定基僧都、夕座りうせう〔永昭カ〕僧都なり。然て事ども果てぬ。果ての日は、垣根の卯の花を女房達殘り無く折れり。裳は薄紫、上衣は菖蒲をぞ着たる。其れ又いとをかし。五卷の日は、中務の宮、猶人より殊なりし御氣はひを、東の對の女房達、佗びしう耻づかしげに思ひ聞えたりけり。其折は然て、後にぞ云ひ合はせ笑ひける。御八講過ぎぬれば、宮の中日頃戀しく人人思ひけり。女房里に出で、一部は侍ひけり。彼の法住寺には、兵衞督の御事ども、唯だ大納言扱ひ聞え給ふ。泣く泣く思し準備ぐも哀れなり。御法事の事などもと、萬づに思し準備ぐ。少將は今の別當右兵衞督の御壻なれば、其由緣に、兵衞督をも哀れに思ひ聞ゆべし。いみじう雨降り、徒然なるに、法住寺にて彼の姫君、

思ひきや藤の衣を程も無く二つ重ねて涙掛けんと

年の程よりは哀れにをかしう述給へり。此の六月廿八日、法事など爲給ひけり。七月一日正日、法住寺には、彼の中納言、非違の別當し給ひける折、人の申文、訴文など有りけるを、取り集めて紙に漉かせて、法華經書かんと思しける紙に經書き、また阿彌陀佛造り奉りて、其經に具して供養し奉らんと思し掟てたりけるを、其日は源信阿闍梨導師にて、說法せさせ給ひける、哀れにいみじう尊かりけり。講師もいみじうぞ泣

きける。斯くて其後、姫君をば大納言殿迎へ取り給ひてけり。童なる君は法師と思しけれど、其れも此殿冠せさせて、我れ爲立てんと思しける。いみじう哀れなる事ども多かり。中納言殿をも、「今は何どて」など、殿の御前申し思しけれど、大納言、「己が命を絶たせ給ふなり。斯かる事を聞かせ給へば、此中納言のおはせん方へ、今は己れも罷らん」と聞え給ひければ、「今は然は其殿述給はんばかり」とぞ聞えさせ給ひける。中納言〔兵衛督ノ誤カ〕の姫君さへ此處におはすればいみじう哀れなる事ども多かりける。斯かる程に、内裏の御惱の事ありて、いと世の中物騒がし。様様の御物の怪ども、いみじう強し。故關白殿、式部卿の宮さへ出で給ひて、いと恐ろしきこと多かる中に、春宮の御乳母などの、貴船に祈り申したるなど云ふ事さへ、御物の怪申すを、大宮、いと聞き憎く、片腹痛く思さるべし。「如何に如何に」と思し歎きつれど、いみじき御慎みどもにて、癒らせ給ひぬ。此春より、中宮も尋常にもおはしまさずとぞ、世には云ふめる。殿の御前は、いみじう思されながら、物恐ろしう、御胸潰れて、四方八方の佛神を尋ねつつ、祈りの師ども居ゑさせ給ふ。前前のよりも、此度の御祈り、世に似ぬまで思し爲させ給ふ。いと道理に見えさせ給ふ。七月には、院に女御の御法事準備がせ給ふ。御堂には、八月十五日には、尙侍の殿の御果て爲させ給ふ。御調度どもの銀して、多寶の塔三尺ばかりに造り磨きて、其れをぞ申し上げさせ給ふ。哀れなる御事、初め終りまで、思し怠むこと無く爲果てさせ給ひぬ。女院の内裏におはします折は、若宮をば、東宮哀れに愛くしう思し奉らせ給ひつつ、抱き奉らせ給ひて歩りかせ給ふ。上も、院の御方に渡らせ給ふ折は見奉らせ給ふべし。いと美くしうおはしますを、女院又無きものに聞えさせ給へり。今年は内大臣殿の御所殿の御裳着、御内裏參りなどぞ、世には聞えさすめる。人知り難し。八月晦日の頃、大納言の御許には、有りし御事ども、いみじう哀れにて過ぎぬ。中納言殿をば、我れも我れもと氣色だち聞ゆる所所おはすれど、只今はすべて、とも斯くも思し變らで、唯だ昔の「伏見の里」をのみ、荒れまく惜しげに思したれば、大納言殿いとど疎かならず、悲しげに思ひ聞え給へり。去年の名殘にて、今に哀れなる事ども多かる世の中をぞ、何處にも盡きせずのみ思さるべかめり。中宮は此頃里に出でさせ給ふべしとて、大殿、左衛門督の洞院の御家にぞ出でさせ給ふべければ、左衛門督は皇后の三條の宮へ渡り給ひて、此處をば造り喧騒らせ給ふとぞ。

若水

斯くて中宮、神無月に成りぬれば、左衛門督の家に出でさせ給ひておはします。殿の御前も晝ぞ御堂へはおはします。夜は此宮におはします。上の御前もやがておはします。前前の宮宮の御時の御祈りどものままに爲させ給ふに、此度は物の恐ろしさ忌忌しさ添ひて思さるれば、いとど事勝り、萬づに爲させ給ふ。侍ふ女房達の中にも、子などはかばかしからず死なしたる人をば尋ねさせ給ひて、此程は參るまじき仰言あり。

内裏よりの御使、夜夜中分かぬも、疎かならぬ御氣色著げなり。斯く云ふ程に、霜月に成りぬれば、内裏邊りの樣樣の事ども、若き人人は思ひ遣り云ふめり。萬づよりもおはします殿の狹ければ、許多侍ふ御祈りの僧なども、其の邊りの家どもの程廣きに、押し入る樣にて混み居たり。大方の御心に、ともすれば例ならず苦しげにのみおはしませば、殿ばらも、靜心無げに思したり。況いて此月に成りぬれば、待たせ給ふ事添ひて、恐ろしう思さるべし。御乳母に音なひ申す人多かり。此殿の中に、只今は此御事より外の事無し。女房達、人知れず白き物ども準備ぎ合へり。はかなくて月も立ちぬ。十二月に成りぬれば、立ちぬる月にだにおはしますべかりしに、怪しく心もとなさを思し騷ぎたり。朔日も過ぎ行けば、いと怪しく、如何にとのみ思召す程に、十日の晝つ方より例ならぬ御氣色なれど、わざとも見えさせ給はねば、心長閑かに思さるるに、日暮るるままにぞ、偖に苦しげにおはします。御兄人の殿ばらを初め奉りて、世の中の上達部何れか殘らんとする。露の暇無く參り混み給ふに、許多の僧ども聲合せたる程、すべて物も聞えず。殿の御前には、惱ましく思さるれど、護身參らせ給ふ。女院、皇太后宮、内裏、東宮などよりの御使續き立ちたり。近江の三位、宰相の乳母など皆參れり。戌の刻ばかりにぞ、いと平らかに爲させ給ひたるに、今一つの御事を喧騷りたり。萬づに其事どもを爲させ給ふ。其後有樣、音無きにて推し測られたり。殿の御前「平らかにおはしますより外の御事無し。物のみ恐ろしかりつるに、命延びぬる心地こそすれ」とて、いと嬉しげに思召したり。内裏にも聞し召して、同じうはとは如何でか思召さざらん。然れど平らかにおはしますを、返す返すも喜び聞えさせ給ひて、御刀持て參りたり。前前は女宮には御刀は持て參らざりけれど、三條院の御時、長和二年七月、今の皇太后宮の一品の宮の生れさせ給へりしよりぞ斯く有る。内裏の女房などの、「同じくは、あな口惜し」など申すを聞し召して、「此は何事ぞ、平らかに爲させ給へることこそ限り無き事なれ。女と云ふ事、迂愚の事ぞや。まことに同じくは男はめでたけれど、昔賢き帝に、女帝立て給へる例多くぞ有るや」と述給はするに、畏まり侍ふべし。次次の御產養疎かならんや。三日の夜關白殿、五日の夜女院、皇太后宮より、七日の夜は朝廷より、例の作法持て參れり。さまざま云ひ盡さん方無し。九日の夜、宮司、關白殿の政所よりなんど持て參り喧騷る。まことや、御乳母は數多申す中に、先づ殿の宣旨の女、また出雲の前司頼經が妻をぞ先づ召したる。八日は人人色色に事ども改まる。内裏の女房達參りたり。さまざまの事ども有らまほしく、心もとなからず爲させ給へり。女房參りて、宮のをかしげにおはします御有樣申すに、内裏にもいとどゆかしく思ひ聞えさせ給ふに、疾く入らせ給ふべき御消息隙無く參れど、宮暫し心安くてと思召しておはします。誰も同じくはと口惜しく思召ししかど、あさましきまで白う美くしき御樣、聞えさせん方無くおはしますに、誰も御心解けて、いと愛しう爲奉らせ給ふ。御乳母「我も我も」と申せど、「暫しは」とて聞し召しも入れず。はかなく日數過ぎて晦日に成りぬれば、世の中の人人、家家高き、短き、皆此暇無く忽ぎ立ちたり。若宮の御年の增さらせ給ふべき御準備もをかしう思召すに、夜の程萬づ變りたる空の氣色、世の中もをかしく、新玉の年よりも珍らしき若宮の御有樣こそ、いみじう美くしうお

はしませ。若水して何時しか御湯殿參る。萬づ皆春の心付きて、空の氣色も引き更へ、さまざまに物鮮明にめでたし。殿の拜禮に、大臣二所を初め聞えて、例の上達部、殿上人、殘り無く參り給へり。其れより、やがて引き續きて女院の拜禮、其れより朝拜に參り給ふ。五日は、また殿の臨時客、女房、皆紅十に「小掛着たるに、朋葱の織物の上衣、赤色の唐衣などをぞ爲出でたる。北の政所のおはします所に、紅梅の二重織物の御几帳ども、殊に折に合ひたる、心憎くをかし。御音樂なども例の事ながらをかし。また枇杷殿の宮の臨時客に、關白殿を初め奉りて、萬づの殿ばら、殘り無く參り給へり。御前の庭の砂子、火炬屋なども、常より殊に見ゆるは牽爾の目なるべし。東の對の御裝飾鮮明にめでたきに、寢殿を見れば、御簾いと青やかなるに、朽木形の青紫に匂へるより、女房の衣の端、袖口重なり、猶外よりは匂ひ勝りて見ゆるは、大方此宮の女房は、衣の數をいと多く着させ給へばなるべし。中門の邊り、東の廊の妻戸などの見通さるるに、然るべき上達部の參り給ふ隨身ども綾して、事有り顔なる面持、足元などの見遣らるる、いとをかしきに、此おはします程は、また今少し事事しく、御隨身の聲遣ひ、氣色も、殊に見なされたるに、いと若う華やかに艶めかしき御事がらにて、やんごとなしと見え給へる上達部どもの、もてなし、敬仕き聞え給はする程など、御簾の内の人人、心殊に思ひ聞えたり。殿ばらの饗に就き給ふ程などは、きたなげ無き四位、五位、六位などの、樣樣取り續き持て參る有樣、奥つ方の御屏風などまで見るにも、眞に繪に書きたる有樣、何處か違ひたるとぞ見ゆるに、内大臣殿の若宮の、御簾の内より出で給ふを見れば、紅梅の御衣の數多重なりたるに、同じ色の浮紋の御直衣着給ひて、御前の勾欄に押し掛かりておはすれば、關白殿見奉らせ給ひて「やや、此方」と申させ給へば、唯だ慣れに差し歩みて參り給ふ。御髮のいと總やかにて、御肩の邊り過ぎて、豐肥らかに愛敬づき、をかしげに、上達部皆翫び愛くしみ奉らせ給ふ。殿かき抱き奉らせ給ひて、御心の中には、我が御許に若君の御前一所ならでは、また斯かる事のおはしまさぬを、口惜しく思召すらんかし。宮の御前は御覽し遣らせ給ひて、「他兒どもは、耻おて甘えぬべき程なるを、能くも」と述給はす。因幡の乳母の、いと物耻かしう、初初しき心地して、目眩く扇放たぬに、君の御有樣見奉りてぞ、差し出でざらましかば如何に口惜しうと、見遣りたる眸、げに美くしと見奉りたるも道理に見ゆ。今年の宮の御陪膳は典侍の仕うまつり給へば、宮の大夫より初め奉り、下部に至るまで、準備に思ひて、やんごとなげに爲立て聞えたり。拜禮など、事無しびにて、上達部など皆退かで給ふ。女院の土御門殿行幸、行啓など有るべければ、其心慌ただしげなり。又の日の辰の剋ばかりに行幸有りと喧騒れば、是れは年の初めの事にて、世の人見騒ぐ。殿の内の有樣、裝飾、猶此は如何なりける勝地ならんと見えたり。斯くてやうやうおはしまし著きて、例の寢殿の南の階の間に、御輿寄せて下りさせ給ひぬ。聞けば四五町燒けにけり。京極大炊の御門と云ふ程に火出で來て喧騒れば、いと心慌ただしうて、何の儀式も無くておはしまし著きて、例の寢殿の南の階の間に、御輿寄せて下りさせ給ひぬ。聞けば四五町燒けにけり。例の法興院も燒けぬれば、殿の御前にも、あさましく思召すべし。此の物見る人人の中にも、家燒けぬるども有りて、急ぎ歸り騒ぐも、いとをかしげなり。院の内、いみじう慌ただし。とばかり有りて、東宮おは

します。其程の事ども、物騒がしき紛れにて細かなる事ども忘れにけり。内裏、春宮打續かせ給へる御樣の更なる事なれど、御容貌、御齡の程も、御心樣までに、とりどりにめでたくおはしまして、内裏の上廿にやおはしますらん、盛りに誇りかに愛敬づき、物物しく、なまめかしくおはします。東宮十九にや、いみじく樂み深く、清やかに、艶めきておはします御樣、更に聞えさせん方無し。皆色色しく華美におはしますしも、めでたげなり。女院の御幸ひ、度毎に猶珍らかに、聞えん方無し。殿の御前忍びて見奉らせ給ひて、ゆゆしきまで思さる。歸らせ給ふ程に、院司、殿の家司など、皆さまざま加階し喜び、さまざまめでたうて歸らせ給ひぬ。斯くて此月の晦日は若宮の御五十日なれば、例の樣樣めでたき事ども有り。内の殿上、東宮殿、枇杷殿などに皆持て參り分かたせ給ふ。めでたき事ども有りけり。今日明日は司召なれば、世の準備にて過ぎもて行く。二月にも成りぬれば、さまざま神事ども繁くて、何とも無くて過ぎもて行く。中宮の若宮五十日打過ぎて、いみじく愛くしうおはしますを、侍ふ人人、是れを「抱き奉らせばや」と思ふべし。白くおはします樣は、雪に光を添へたらんやうにぞおはします。斯くて二月ばかりに聞けば、皇太后宮の一品の宮の、春宮に參らせ給ふべしと云ふこと、世に出で來て、然るべき緣に付きて、人人「參らん」など申すれど、外は知らず、宮の内には、只今然る事無ければ、「物狂ほし、如何なる事にか」と聞し召しながら、人人はいと多く侍へば、今は「朧ろげならざらんは、上臈なりとも」とぞ思召したる人、其程に成りぬれば、御覽じて、御心ゆかぬも、いとほしうてこそは留めさせ給ふめれ。頻めては置かせ給へれど、

隙やかに召さず。斯くて「御參りは内にや東宮にや」と、萬づに申し喧騒るめれど、宮の内には、まだ然る事も見聞えぬ程に、三月にも成りぬるにぞ、宮の内に此事微聞ゆるに、女房達打群れ居て、豫想事を云ひ思へり。昨日今日、御堂より御消息繁かんめる關白殿、參らせ給ふ。中宮の大夫殿など、物細かに申させ給ふ事ども有べかめるは、此御事にこそと推し測らる。何時しかと心もとなく思ひつる程に、三月六日、「今日なん吉き日とて、關白殿參らせ給ひて、此御事ども定めさせ給ふべき」とて、宮司ども參り集まる程に、未の尅ばかりに關白殿參らせ給ひて、御硯召して、「今日は唯だ氣色ばかりなり」とて、事ども少し書き付けて出でさせ給ひぬ。酉の尅ばかりにぞ、御堂より、「今日吉き日なれば」とて、絹綾など何くれ數知れず持て參り、宮の内の人人に配らせ給へば、「あなかしこ、夜を晝に急がせ給へ。廿三日なれば殘りの日も侍らぬなり。人人の唐衣、上衣の織物どもは、綾織召して賜ばせ侍りぬ。唯だ此事どもを疾く疾く」と申させ給へば、然るべき人人に、皆配らせ給ひつ。「打物などを、如何で爲敢へんとすらん、織物も賜はせんをのみ着るべきにもあらず、如何にせまし、日の近く成りぬること」と、靜心無く各急ぎ思ふ。日頃「參らん、參らん」と案内申しつる人人も、一部をぞ召したる。故帥源中納言の女數多あるを、一人一人召すに、大夫の中將「更にえ知り侍らず」と啓し給へば、御堂に聞し召して、「然るべき樣の物を遣はせ」と申させ給へれど、猶え參るまじきよしを啓し給へれば、殿の聞し召して、「さては總べて宮の内に寄せさせ給ふな、此過りにも寄せ侍るまじ」とて、宮基の君畏まり給ひぬ。斯うて御堂よりは、樣樣の物を取りも入れ敢へず運

び參らせ給ふ。其の御消息には、「猶猶怠ませ給ふな、此亂り心地の、去年よりはいみじう苦しう侍へば、參りても申さぬが、いと口惜しく心もとなきと、唯だ此御事に由り、今まで生きて侍るなり。彼の日まで侍らんの心にてなん吾が君準備がせ給へ」と有る御消息頻りなるを、大宮の御前、ゆゆしく哀れなる事に聞し召せど、物の初めに忍ばせ給ふ。然れど御目に涙浮かせ給へり。承はる人人も、忍び敢へぬ氣色どもなり。斯かる程に、大宮の御前、怪しう惱ましう思されて、ともすれば打臥させ給ふ。御面赤み、苦しうて、御足叩かせて、起き臥させ給ふ。「心得ぬ心地かな」と述給はせつつ、起き臥させ給ひて、此御事を扱はせ給ふ。御風にやと、朴聞し召させなどすれど、同じ樣におはしまして、斯くて四五日に成らせ給ひぬ。關白殿參らせ給へるに、「何ど御氣色の苦しげにおはしますぞ」と申させ給へば、典侍、御前にて、「此四五日に成らせ給ひぬ、御風にやとて、朴など聞しめせど、癒らせ給はず」と申させ給へば、「いと不便なる御事にこそ」とて、侍士召して、守道召しに遣はすべき由仰せらる。然て參りたれば、斯う斯うおはします由を問はせ給へば、「御氏神の祟りにや、土の氣」など申せば、御前にて御祓仕うまつる。「總べて物をつゆ聞し召さぬなり、いと折惡しきわざかな」とて、御祓へ、日に二三度仕うまつるべき由述給はす。然て御堂に參らせ給ひて申させ給へば、「いと不便なる事なり、猶猶然るべき樣に思し掟てよ」と申させ給ふ。日頃一品の宮の御方の御修法、仁和寺の成典律師の仕うまつる、大宮の御方の御修法有べう、思し付け掟てさせ給ふ。宮の御前も「折しもこそ有れ」と思召せば、忍ばせ給へど、いと堪へ難げに思召したり。然りとて此御事の止まるべきにもあらず。御堂にも、去年より惱ましげに思召して、此御事どもを外外に聞し召すを思し歎かせ給ふ。成典律師、僧都に成りて、此御祈りの折節しも、喜び仕うまつりたる事、一山口著し」など喜び申し給ふ。宮の内、いと心慌ただしう準備ぎ立ちたり。常の御準備だに如何が有る。況いて是れは小さくおはしましより、「然有らばや」など、御前にも、御乳母達も述給はせ聞えさせし事なれば、堪へんに從はん事を、誰も云ひ準備くべし。然れど、怪しからず置口、螺鈿すべきにもあらず、唯だ例の裝束をめでたくすべきなり。三具を皆準備ぎたり。大人、童女、下仕の數、前前の御參りの如し。日の近う成るままに、宮の内鳴り滿ちたり。斯かる程に、十七日吉き日なりければ、「春宮の御使參るべし」とて、萬づの御用意殊なり。御前の遣り水さへ心ゆく樣に涼しげなり。關白殿、内の大臣殿など皆參り集まらせ給ひて、待ち迎へさせ給ふ。申の剋にぞ參りたる。侍從大納言の御子少將行經の朝臣、御使にて參り給へり。東の廊より寢殿へ參る程の氣色、用意殊なり。大納言善く教へ給へりと見えたり。御文、柳襲の紙にて、柳に附けさせ給へり。見るより心殊にめでたう見ゆるも、率爾の目なるべし。中の御心は知り難し。南面の東の二の間に茵敷きたり。關白殿などは少し西に寄りて、東向きにおはします。例の御簾際、目留まるまで見えたり。斯くて御乳母達は妻戸の方に、他女房達は南面に居給へば、例の作法の事どもにて、暗き程に御返り賜はりて參りぬ。其後は日日に御使參る。殿の上などは、此頃は此宮におはしまして、同じ御心に思し營ませ給ふ。尙侍殿の御事も、今更思ひ出だし聞えさせ給ふらんかし。春雨さへ長閑かに降れば、何事も心もとなし。

萬づは御堂に皆掟て仰せらるれば、唯だ此宮には、女房の事をのみ準備がせ給ふに、其れだに各準備げど、猶靜心無げに思召すに、御惱みさへ斯かれば、いとど靜心無し。「今日明日に成りぬる御準備を」と忍び思召せど、猶此御心地のいと理無くて、思し紛れぬ樣なり。御堂には、此御準備も宮の御惱みも、さまざまに外に承はること、安き心も無く思召すままにぞ、唯だ關白殿を、其事彼の事と、方方聞えさせ給へば、いと御心の隙も無く思すべし。殿は、かねての御定めにて、內裏にはやがて大宮も添ひ奉らせ給ふべく申させ給ひしかど、帝の御母后、妻后を放ちては、他后のおはしますやう無かりければ、いと口惜しう思召す。廿三日の早旦に成りぬれば、然るべき人人、御裝飾に皆分散れ參る。弘徽殿に御裝束具したれば、差し覗き見る人人も、目も耀き、めでたしと思へり。宮には女房達の化粧を磨き騷ぐ。御乳母達も此度の御準備を世の大事に思へり。晝つ方に成りて、關白殿參らせ給ひて、然るべき事ども掟て述給はす。他殿ばらも同じ心に立ち騷ぎ給ふ。御堂よりも御使頻りて參り交ふ。斯くいみじきに、女院、中宮よりの御使參りたりけれど、あさましく騷がしき紛れに、歸り參りにけり。口惜しく思召さるべし。女院よりの御裝束は、八重櫻をえも云はず匂はせ給へり。御扇、薰香など細かなり。御衣箱など、わざと本文を書かせ給へり。中宮よりは、藤をぞ紫に、濃く薄く織り重ねさせ給へる。小一條院、式部卿、中務の宮よりも、御扇數も知らず、めでたう爲させ給へり。關白殿より、童女四人の裝束めでたく爲させ給へり。紅の袍、萌葱の織物の袍、山吹、櫻の汗衫、三重襲の袴、扇まで、いみじく爲させ給へり。下仕四人、內大臣殿さまざまの絹ども、青色に、柳襲の唐衣、裳の有樣、例の斑摺よりも心殊なり。斯くて日暮るる程に、殿ばらの御出車ども率て參り集ひて喧騷る。一品の宮いみじう美くしげにおはします。御方違におはしますとぞ知らせ給へりける。大宮の御前のおはしまさぬを、「獨りは如何で」と勸かせ給はねば、萬づ聞えさせ慰め給ふ。御車、南面の御階の間に寄せておはします。大宮の哀れに愛くしう見奉らせ給ふ。上の御前も哀れに見奉らせ給ふ。御堂より、「如何に、如何に」と、御消息頻りに有り。女房車などの有樣思ひ遣るべし。參り着かせ給ひて、下りさせ給ふ程の儀式など、心殊におどろおどろし。御輦車や何やと有る程に、やや夜更くる程下りさせ給ひぬ。然て、何時しか、疾く上らせ給ふべき由、御使頻りなり。斯く云ふ程に無下に夜更けて、關白殿切に慫慂かし奉らせ給ふ程、我が御女などのやうに、哀れに見えさせ給ふ。御堂には、「我を哀れと思はん人人、我が代りに、細かに仕まつり給へ」と、泣く泣く聞え給へば、何れの殿ばらも、いと心殊に仕うまつり給へり。關白殿、御手捉へて、上り奉らせ給へり。上らせ給へど、動きも爲させ給はねば、東宮出でさせ給ひて、かき抱だき奉らせ給ひて、御帳の內へ入らせ給ひぬ。斜ならず美くしうをかしき御樣を、甲斐有りて思召さるべし。御供の人人、やがて然るべきどもは、皆上に侍ひ給ふ。殘りは下りぬ。鷄鳴ぬ時けば、御迎への女房、續き立ちて參りたれど、頓に下りさせ給はず。「明うもこそ成れ」と思ふ程に下りさせ給ひぬ。枇杷殿には、宮の御前、御心地さへ惡しうて、さまざま思し亂れて、御殿籠り入らせ給はで明けぬ。北の政所の御前も御物語長閑かに珍らしくし、明かさせ給ひてけり。參らせ給ひて後、

こよなう長閑かに成りめるも覺束なく萬づ覺え明かさせ給ふ。 內裏には日射し出づる程に御使あり。權亮良賴の朝臣參り給へり。御几帳ども、藤の織物三重にて立て並めたり。御帳も同じ色なりけり。何事もさまざま同じ如、めでたき御有樣なれど、猶此度は今少し氣高さ增さりてぞ見え給ひける。然るべきにや、萬づおどろおどろしき有樣にぞ。弘徽殿の東面なれば、御簾の際の女房の袖口ども、形容び遣るべき方無し。御乳母達、上臈達など、上衣は皆二重織物、色色樣樣なり。 すべて萬づいとめでたし。 帝の御女斯かる御有樣は、故朱雀院の御女の、冷泉院の東宮と申しし時に參らせ給ひしこそは、斯かる類ひなめれ。其れは甚う奧寄りたる中に、 帝も例におはしまさずなど有りしかば、いと思ふさまにも見えずぞ有りし。 此御有樣は、いといとめでたしや。 關白殿、他殿ばら、皆おはしまして、御使いみじく醉はさせ給ふ。 此御使の君も、固より酒飲む人なれば、いみじく强ひさせ給ふ程に、無下に醉ひたり。祿の程なども、殊に目留まりたり。甚う赤みて、しどけなげに亂れ參りぬ。 其事ども、御裝飾などを、大宮の御覽ぜめ事を、 殿ばらいみじく口惜しき事に思し申させ給ふ。頻りて上らせ給ふ御使隙無く奉らせ給ふ。勞はりたる事のやうなれど、御志深げに見えさせ給ふ。 是れを御堂にも宮にも、甲斐有り、嬉しと思召さるべし。 宮よりも御堂よりも、御裝束ども持て參る。斯くて後四五夜ありて、上らせ給はんとする程に、俄かに御心地苦しう爲させ給へば、關白殿、つと押へ奉らせ給ひて、いみじう思したり。 東宮よりも御使「如何に、 如何に」と頻りなり。 少し寬舒まらせ給へれば、猶猶とて上らせ給ひめれば、 東宮「如何に、如何に」と思し亂れて見奉らせ、いみじう思召したるに、宜しくおはしましつれど、またいと苦しう爲させ給へば、關白殿率て下ろし奉らせ給ひつ。いと苦しげにおはします事を、 御堂に聞し召して、御祈り樣樣なり。 御物の怪やとぞ見えさせ給ふ。東宮よりも御乳母達など、「如何に、如何に」とて參り集まる。 曉方にぞ宜しく成らせ給へる。枇杷殿には、我が御心地よりも、「如何に、如何に」と思召すに、 癒らせ給へるを、內にも外にも、嬉しき事に思し聞えさせ給ふ。夜頃斯く下り上り爲させ給へば、いと心苦しく思召して、今は此御方におはしまし御殿籠るべし。程も無き御衣更への御準備に、御堂にも枇杷殿にも準備がせ給ふ。四月二日は東宮の若宮御袴着の事、女院準備がせ給ふなれば、此御方よりも、御裝束ども爲て奉らせ給はんとて、準備がせ給ふ。四月九日にぞ東宮此御方へ渡り始めさせ給ふべかりける。御衣更への御几帳、皆卯の花の織物三重襲ねにて爲させ給へり。女房の局、細殿や、局の有樣なども、好み殊更めきたり。女房達、撫子をぞ織り重ねたる。其日ぞやがて乳母達の贈り物ども、 然るべき樣に爲させ給へる。常の御有樣に、 また絹綾などを添へさせ給へりける。 上の女房、女官、下仕などまで、皆前前の御有樣なるべし。 殿ばら此頃は、夜晝分かず侍ひ給ふ。

玉のかざり

今日は皆然べき樣の事ども、推し測り、細かに仕うまつらせ給ふ。然て渡らせ給ひて御覽ずれば、めでたさは目慣れさせ給へる御事なれど、何事もまた、其折の此處と爲立てたる、心殊なるわざなれば、いとめでたく御覽ぜらる。一品の宮は、短かき御几帳を身に添へさせ給へれば、顯露ならねど、また隱れ無し。美くしう細小やかにおはしまして、差し並ばせ給へる、繪に書かまほしく見えさせ給ふ。今年は十五にや成らせ給ひめらん。東宮は十九ばかりにやおはしますらん、いと有らまほしき程の御有樣なり。今宵より此御方に御殿籠れば、御前の御曉起も苦しげにおはします。女房も理無かりつるに、いとど思ふ事無き世の有樣なり。各我が儘に磨き立てて、辰の剋ばかりにこそは御前に出づめれ。御堂には斯かる御有樣を知らせ給ひつれば、萬づ細かに哀れに、心しらひ參らせ給ふも哀れになん。枇杷殿の御心地いと苦しげにおはします事いとどしければ、明尊僧都、御修法三七日仕うまつり給へれど、癒らせ給はねば、並べて然るべき人、二壇三壇仕まつるばかりに、力を盡し加持參るに、更に御欠伸をだに爲させ給はず。然るべき御祭、祓、數を盡させ給ふ。斯かる程に、祭など過ぎて、心長閑かに成りぬれば、枇杷殿には、內裏の御有樣の覺束なさをさへ苦しう思さる。宮の御裝束、女房の事など、繁う思し當てがふ。殿の御前も、例もおはしまさぬ中に、御堂の事や、十齋の佛の御事や、樣樣いみじう靜心無く思召さるべし。清涼殿の北面は、弘徽殿の南面なれば、上は常に此御方を御覽じ覗かせ給ふべし。昔の御心ばへも忘れさせ給はぬにこそ。若宮の御湯殿の事聞ゆる御聲も、いと近き程に隔て無きもをかし。枇杷殿には、內裏の女房の繁く參るにぞ、萬づ聞し召し慰めける。殿の上も屢參らせ給ひて、斯かる御心地を如何におはしますらんと、思し歎かせ給ふ。すべての御心地、月日の行くままに、いと長閑かに冷然き御有樣況いて恐ろし。「然ば又は何事をかは」とて、例の御讀經に、また上手ども召して始めさせ給ふ。壽命經、かのう〔觀音ノ音便カ〕經、藥師經などの御讀經、數を盡させ給ふ。東宮には、「折しも有れ」と思し歎かせ給ひて、わざとの御使常に參る。一品の宮は思召し歎きたる事限り無し。何事も物のみ耻かしう思さるるに添へて、此御心地を、いみじき事に思されたり。枇杷殿には、此頃の三井寺の心譽僧都、めいそう〔明尊ノ衍カ〕僧都、じやくせう〔寂昭カ〕など、御修法仕うまつる。斯かれど驗と云ふこと夢に見えさせ給はぬ事を、上の御前心細く思し歎きたり。五月四日には、御堂に阿彌陀堂よりは東、大御堂よりは西、細小やかなる御堂、十齋の佛、月頃磨き立てて渡し奉らせ給ふ。例の樣樣の御舞あり。僧達前前の如し。此宮の御心地、更に癒らせ給はず。世の中の聞えあり。驗ありと云はるる人人も、斯う打延へ御修法仕まつりたり。御祭、祓、數を盡せど、癒らせ給ふ氣色見えず。一品の宮、此御氣色に、「出でん、出でん」と述給はすれど、東宮「暫し、暫し」と聞えさせ給ふ程に、右馬の入道の君は、初めは無動寺におはせしかど、後は大原にて過ごし給へるを、月頃、物をつゆ參らざりければ、中堂に參らせ給ひて、二七日籠り給ひて、「唯だ生死を告げさせ給へ」と申させ給ひければ、何事とも無く、「唯だ死設けを爲よ」と夢に見給ひければ、無動寺におはしまして、權僧正慶命に、「斯う斯うの夢をなん見つる。然れば今は斯うなり」と述給はすれば、僧正、「何どか、夢はなかなか然見ゆれ

ば命長しとこそ申せ」と申し給ひければ、「命長からんを嬉し、長らへんを嬉しと思はばこそ有らめ。唯だ佛の告げさせ給ひつる嬉しきなり。然ても外に罷りなん」と聞えさせ給へれば、僧正、「何どて、斯くてこそおはしまさめ。げに昔より、茲に然る事侍らぬ所なれど、おはしまし着きて、また外へおはしますべきにあらず。唯だ御念佛を眞心に爲させ給へ」と勸め聞え給ふ。また懺法の聲絶えず仕うまつる。御堂には、此御事を聞かせ給へど、宮の御心地にだにえ參らせ給はず。況いて山までの御歩りき思し掛けぬに、樣樣に思し歎かるべし。斯く覺束なさを思しつる程に、五月十四日に亡せ給ひぬ。いとど哀れにいみじき御事なり。高松殿には聞し召して、唯だ思ひ遣るべし。御法師成りの時だにいみじかりしに、あさましう悲しとも世の常なり。院の女御の御事をだに、隙無く思し出づるに、「また此は如何に、世斯う成りぬるこそ」と、ゆゆしう思さる。御堂には、哀れに見ず成りぬる事、出家の折、辛し、心憂し、口惜しと思ひし、悪しう思ひけり。斯く久しう有るまじかりけるものをと、來し方、行く末、思し續けらるる事もゆゆしければ、唯だ御腮のみ塞がりて思さる。是れに付けても、宮の御事いと怖ろしうて、「今や今や」とのみ御心に掛かりて、堪へ難く思さる。殿ばらなども、いみじう哀れに思し歎かる。中宮の大夫、大納言など、御訪らひに、皆山へ上らせ給ひぬ。萬づ哀れなる世なり。女院なども、いみじう思召し歎く。枇杷殿には、「あなかしこ、御前に此事聞かせ奉るな」と有れど、氣色を御覽じて、いと哀れに心細げに思さるべし。唯だ常の御言には、「如何でか有らんと爲らん」と流給はせけるは、御乳母の典侍の事なりけり。其れを承はりて、典侍は物覺えず、有るべき樣にも有らぬ樣なり。枇杷殿には、御物の怪を人に假り移せど、其程御心地宜しうも成らせ給はず、唯だ同じ如冷然くおはしますに、いと怪しき事なり。御物の怪は、堀河の大臣の御氣はひに　女御差し續き出で給ひて、云ひ續け給ふ事ども、いと怖ろし。また尙侍の殿の御氣はひにやと見ゆるも、差し續き申させ給へれば、上の御前、哀れにいみじう泣かせ給ふ。其れは、とかく思ひ聞えさせ給ふに有らねど、道殊に成らせ給ひぬる人は、斯くのみ有るわざなるぞ、哀れに心憂きや。斯く云ふ程に、一品の宮覺束なさを思し歎かせ給ふ中にも、右馬の入道の御服にておはしますべければ、六月二日に出でさせ給ふべしとて、女房の服裝鮮麗に、枇杷殿の御裝飾などす。舊住ませ給ひし西の御方は、樣樣、方方の御讀經所なれば、此度は、東の廂に母屋の大床子立てたるをぞ、更へ裝飾はせ給へり。然て宮出でさせ給ひて、何時しかと見奉らせ給ふに、悲しくて泣かせ給ふ。何事も思いたれど、え聞えさせ給はず。殿の御前も「如何に、如何に」と、日日に出で立たせ給へど、え參らせ給はず。禪林寺の僧正も參らせ給へりしかど、其驗と見ゆる事も無きぞ、且つはいとあさましき御心地なるや。宮の中の事は然るものにて、四方の山山、寺寺、數を盡す御祈り驗見えず、いと心憂し。六月十六日の程の月明きにぞ、殿の御前參らせ給へる。御物の怪假り移して喧騒れば、「何どてか、許多の年頃頼み申したる佛、經、然りとも」など頼もしげに流給はせて、加持參らせ給ふ。哀れに悲しき事、互に思すべかめれど、宮いと苦しうおはしますと、いと惱ましき御心地にて、はかばかしう聞え交はさせ給ふ事無くて、「今宵は疾く疾く退かでて、今また參らん」とて、出でさせ給ひ

ぬ。此頃聞けば、民部卿、日頃いみじう煩ひて、出家し給ひめと聞ゆるも、殿の御前は、いと哀れに聞し召して、殿の御前、〔此句衍カ〕いみじう思召すべし。月頃百體の釋迦造り奉らせ給へる、急ぎ給へりとて、此廿一日にぞ渡し奉らせ給ふ。藥師堂よりは北の端、大御堂よりは東に、檜皮葺の御堂造らせ給へり。中三間は高く上げ、南東三間は廊造りにぞ造らせ給へる。其日の早旦に成りて、雨降り雷鳴りて、空の氣色煩かしげなり。辰の剋ばかりに成りぬれば、空晴れて、日いと晴朗過ぎて、暑く佗びしきにも障らず、世の人例の混み喧騒りたり。中尊は、皆金色にて丈六におはします。今九十九體は等身の佛にて、皆金色にぞおはします。然れば人の參る程におはしませど、廣き御堂の程は、五つ六つばかりの兒の居たる身長ばかりにぞ見えさせ給ふ。丈六は力車と云ふ物に、然るべき構を爲ておはします。請僧皆威儀美くしうして參りたる。九十九體は手輿と云ふ物に乘せ奉りて、青く裏瑩〔原文えう〕じたる絹袴着て、四人づつ持ち奉りたり。御堂の池の上に、佛の御影また現はれ給へると見ゆるに、限り無く尊し。殿の御前は、五大堂の辰巳の隅の方に、御簾掛けておはします。女院、殿の上は藥師堂の北の廂に西かけておはします。關白殿を初め此殿ばらは、藥師堂の東の勾欄の下の土に圓座敷きて、次第に並み居させ給へり。皆薄鈍の御直衣、指貫にておはします。右馬人道の御服と見えたり。他殿ばらは皆さし退きておはします。佛おはします程に、殿の御前下りさせ給ひて拜み奉らせ給へば、殿ばら同じ如參り寄りて、拜み奉らせ給ふ。斯くて、佛、中の間の高きに中尊おはします。その御傍に十弟子並みたり。二王など立ち給へり。傍の短き廊どもには、九十九體皆重なり並ばせ給へり。皆百體の御前に佛具居ゑて、花奉り、十弟子の樣樣の心地どもも、其折思ひ遣られて、笑ましくも尊くも有り。迦葉の口の中に笑みを含める程こそをかしけれ。舍利弗は、猶名に違はず瘦せ給へり。富樓那こそ若く清げに見え給ふめれ。堂莊嚴例のいとめでたし。斯くて供養は後の日と思し捉てたり。然て後にぞ枇杷殿に心長閑かに出で入らせ給ふ。殿おはします折は、御心地宜しくおはしませば、其れを嬉しき事にておはします。いと賴もしく常に護身參らせ給ふ。御修法、此頃は三四壇仕うまつり、雨の僧都なども參れり。蓮昭阿闍梨なども參るに、御物の怪平らぎたる樣なれば、常に召し騒ぐ。然て寂昭と云ふ人、物の怪など顯はしたりとて、殿の御前、「これは行いみじうすと聞きし者なれば、必ず驗あらん」とて、阿闍梨に成させ給ふ。「この御志は、寂昭の幸ひなりけり」と、世の人申すめる。若君の、宮斯くておはしませば、世の中いと賴り無げに思したるも、いと心苦しく思されて、常に呼び奉らせ給ひて、御菓子參り、搔き撫でさせ給ひて「哀れ」と打述給はするは、え見や果てざらんと思召すなるべし。若君も、いみじう濕め給へれば、いと心苦しうて、御乳母、殿に「此頃ばかり迎へ奉らせ給へ、御物の怪の散りたるも怖ろし」と聞えさせたれば、げに然もと思して、七月十餘日に、三條院に迎へ奉り給ふ。「癒らせ給はば參らせん」と申させ給へば、御前打點頭かせ給ふ。稻葉〔因幡〕の乳母、人笑はれにやと、人知れぬ心の中には顯ひ立つ。何れの君も、御乳母どもの、是れを是れをと思ひ申したりしに、此君の渡り給へりしかば、安からぬ事に云ひ思ひたりしものをと思ふに、理無かるべし。苦しうおはしませど、御衣などの事仰

せられて、詣せ奉らせ給ふ。上の御前も宮にのみおはします。唯だ御胸のみ塞がりて、萬づゆゆしうのみ思し續けさせ給へば、如何で斯う思はじと思し直せど、猶いと理無くのみ思さる。八月にも成りぬ。月日の往くも知らせ給はぬ御有樣なれど、哀れに過ぎもて行く。斯くてのみやはとて、御堂の五大堂に籠らせ給ひて、御修法せさせ給はんと思し述給はす。その御堂の北面に、おはしますべき樣に、萬づ造り喧騒らせ給ふに付けても、いと哀れなり。東宮よりは日日に御使參る。中宮、女院、いみじう思し歎かせ給ふ。この御心地は三月ばかりよりなれば、此月は六月に成らせ給ひにたり。つゆ物を聞し召さねば、今は唯だ影の樣におはします。御心地も少し爽やがせ給へば、御湯殿と有る折は、釜殿いみじう喜びを成して仕うまつるも哀れなり。女房達、侍士どもも安き睡も寢ず、我も我もと競ひ仕うまつりて、斯く有り有りて如何に「」と脫カ」、人知れず打語らひ、涙を拭ひつつ歩りき合へり。夜も御格子も參らねば、やがて簀子に並み居て、勾欄に背中を當てて、其れを休まりに眠り集まり給ふ程、眞に心苦しう堪へ難げなり。内の大殿は、年頃造らせ給へる新し殿に渡らせ給ひて、居籠り給へりと聞ゆ。八月十三日には御堂に籠らせ給はんとて、女房の服裝作ろはせ給ふ。この御惱癒らせ給はば、十月ばかりに御參り有るべしとぞ有る。其日に成りぬれば、然るべき御調度ども、持て運び裝飾ふ。夜さりに成りぬれば、女房鮮かに爲立てて參り集まれり。一品の宮、紫苑色に朽葉の御衣など奉れり。御前には白き御衣二つ三つ奉りたるに、御色も同じやうにて、唯だ直道に白うおはしまして、御髮は押し下して結はせ給へるままに、御結目の程は亂れて、其れより下は、つゆ亂れさせ給はず。此上無く長く見えさせ給へば、斯く苦しながらも、生ひさせ給ふなめりと、有り難く見えさせ給ふ。然て渡らせ給ひて、五大堂の東の廂、北面かけておはします。殿の御前は、この同じ御堂の戌亥の方の間におはします。宮の侍には、大御堂の北の廂に、平幔引きてぞ爲たる。御修法五壇始めさせ給へり。闕白殿、内の大殿の御前、上の御前、宮の大夫殿せさせ給ふなりけり。斯くておはしませど、二三日に成りぬるに、御物の怪つゆ聞えず、是れをいとあさましき事に、殿の御前も、僧達も申し給ふ。夜、ともすれば消え入らせ給へば、僧達集まりて加持參れど、御欠伸をだに爲させ給はず。御物の怪の皆去りにたるかと思ふべけれど、御心地は同じ樣なり。權僧正などは、水を掬びて石を打つらんやうに、人の見苦しうとて、同じうおはしますに、いと心憂きことを、各歎き申し聞え給ひけり。然るは、この廿三日渡り給へりし百體の釋迦供養せんとて、多くの法服を設けさせ給ふ。やがて御八講と思し掟てさせ給ひて、捧物をさへ例の樣に爲させ給へれど、この御惱に障らせ給ふべき事を、殿の歎かせ給へば、宮の御前「何どてか止めさせ給はん、心地は例の事に成りて侍れば、其れまでは、念じてこそは過し侍らめ」と申させ給へば、殿「哀れに嬉しうも仰せらるるかな、斯く述給はするに、佛、この御心地、今日明日の中に癒らせ奉り給へ」と、御數珠を押し揉ませ給ひて、念じ申させ給ふ。然て此事を思し準備がせ給ふ。所所の御捧物も「例の事事しからず麗はしき樣に」と思し述給はす。其曉に、女院渡らせ給ひて、藥師堂の北の廂にぞおはします。一品の宮、上の御前、辰巳の方へおはしますに、宮のおはします程五六間渡るを、宮の御前、能

く膝行り出でさせ給へれば、あさましう哀れに嬉しう見奉らせ給ふ。佛の御驗と見奉らせ給ふ。然て事始まりぬ。御堂の佛の供養、やがて御八講なれど、講師達他事無し。唯だ此宮の御惱の由を、返す返すも、心を唱へ祈り申し給ふ。例の皆百僧なり。法服せさせ給ふ。「百體の釋迦の一念の故に、御命を延べさせ給ふとも、百年は延びさせ給ふべし」など、哀れに尊く悲し。柱どもには、法華經の心を皆繪に書かせ給へり。

廿五日　五卷の日に當れば、法服など、皆確實しく爲させ給へれど、大方の僧達も、只今は此御事のみ心に掛かりて、靜心無げなり。はかなう日頃も過ぎて、僧どもの布施、いと殿めしう爲させ給へり。女院は、宮の近うおはしますを見奉らせ給はめ事を思召せど、事限り有りて、やんごとなき御中は術無し。斯くて此月過ぎぬ。九月に成りぬれば、夜長に成り增さりて、惱ましき御心地いとど增さりて、睡眠ろませ給ふこと難し。闕り仕うまつりたる人人も、猛く思へど、餘りに成りて、眠りがちなり。典侍は、無下に呆けて、晝さへ眠り侍ひ給ふ。殿の御前は、今は何事をかは爲べからんと思召しても、昔の鎌足の大臣のいみじう煩ひて、萬づ爲給ひけれど止まざりけるに、新羅より渡れる尼の、維摩經講じけるにこそ癒り給ひけれとて、奈良の僧ども、りうせい〔永昭ノ誤カ〕を初めとして、融碩、經救や、然るべき人人召して、維摩經講せさせ給へど癒らせ給はず成りぬ。猶今は然るべき月日を待たせ給ふなめりと、思し見奉らせ給ふに付けても、淚止め難く、我が御命も縮まるやうに思さる。「すべて今は何事も驗も無し、如何で枇杷殿に生てくとも死ぬとも」と述給へど、「如何でか御病の起りし所へはおはしまさん。御物の怪の思はせ奉るなめり」とて、九月七日の曉にぞ今南殿に渡らせ給ふ。御堂にては然りともと思召しつるに、癒らせ給はず成りぬるを、殿の御前も心憂き事に思し居たり。寢殿の東面に、御裝飾しておはします。此日頃、魚聞し召さでとて有れど、今日は惡しき日、明日八日なれば、九日の早旦、闕白殿より樣樣の魚ども持て參りたれど、すべて御衣を引き被きて、聞し召すべき御氣色無し。とかく萬づに試みさせ給へど、今は限りとのみ見えさせ給ふも、いみじう悲し。斯かる程に、九月十餘日に成りぬ。此處にも御修法、雨の僧都、心譽僧都仕まつり給ふ。日頃御堂にて、苦しう仕うまつりつる女房、十三日の夜さり里に退かでて、「明日の夜ばかり參らん」とて、出づるも多かり。萬づの陰陽師ども、十四日をぞ癒らせ給ふべき日に申したりける。其夜御前に人人侍ふを、ともすれば癒らせ給ひて物など仰せられなど爲させ給ふと思ふに、十四日の早旦、「如何で、湯少し浴みん」と仰せらるれば、侍士召して仰せ事賜ぶに、釜殿喜びを成して、準備ぎ仕うまつる。「少し微溫くとも、唯だ疾く疾く」と述給はすれば、進物所にかねやすに、「唯だ疾く疾く沸かさせて參らせよ」と、女房云ひたれば、急ぎたちて參らせたれば、膝行り下りさせ給ひて、いと善く浴みさせ給ひて、上らせ給ひぬ。日頃の御座、御衣、皆脫ぎ取り遣らせ給ひて、鮮かなる御衣、御座などに臥させ給ひて、「殿おはせよ」と有れば、斯くと人參りて申せば、「湯にまかり下りたり、只今參る」と申させ給へるに、限りと見えたるにぞ、急ぎ上らせ給ひて、御湯帷布ながらおはしましたるに、御氣色の例ならずおはしませば、「やや、參り侍る」と申させ給へば、御髮削ぐ摸似を爲させ給へば、「尼に成らせ給はんとや」と申

させ給へば、點頭かせ給ふを、泣く泣く成し奉らせ給ふ。御戒受けさせ給ふに、「持つ」と述給はする程、いと爽やかなり。上の御前も、今ぞ渡らせ給へれど、御目も昏れ惑ひて、何事も御覽じ分かず。心譽僧都、教圓已講など、然るべき僧ども集まりて加持參るに、御氣色の唯だ變りに變らせ給へば、中納言殿、大納言殿など侍はせ給へば、「阿彌陀佛と申させ給へ」と申させ給ふに、いと善く申させ給へば、此僧達、心慌ただしう加持參りて、承はるもいみじう悲し。内にも外にも搖すり合ひたる程に、殿ばらを初め、世の人人參り混み、搖すり滿ちたり。亡せもておはするままに、殿の御前、「あな悲しや、老いたる父母を置きて何地とておはしますぞや、御供に率ておはしませ」と、聲を立てて泣かせ給ふに、この里に退かでたりし人人も、何時の間にか參り集まりたりけん、いといみじう搖すり滿ちたり。三月八日より惱ませ給ひて、萬壽四年九月十四日の申の刻に亡せさせ給ひぬ。御衣のいと鮮かなる上に、殿の御衣、袈裟を、上取り覆はせ給ひて、鮮かなる御衣引き被きて臥させ給へり。御髮は居丈ばかりにや削がせ給へらんと見えさせ給ふ。結ひ際の髮より削がせ給へるなりけり。切れたる御髮を取らせ給ひて、殿の御前、三井寺の僧都に「是れ見給へ、斯くこそは長く生し奉りたりつれ」とて、引き立てさせ給へる程、六尺ばかりにぞ見えたる。いと目も昏れ、哀れと見奉りて泣き惑ひたるに、御戒の師も、やがて此僧都ぞ仕うまつり給ひける。「いと善く持つ」と述給はせつる程は斯くやは思ひ參らせつる。あさましう敢へ無き事を、一殿の中、搖すり滿ちたり。女房達惜みつつ、御年まで云ひ續け泣きたる聲、いとゆゆしう、凶凶しければ、取り分き心憂し。殿の御前、御衣を引き退けつつ見奉らせ給ひて、「虛事とこそ覺ゆれ、やや」と申させ給ひ、御數珠を押し揉ませ給ひて、「佛の心憂くもおはしますかな、今まで生けさせ給ひて、斯かる目を見せさせ給ふ事」と、云ひ續け泣かせ給ふ事も、世の道理なり。上の御前、消え入りて臥させ給へり。關白殿、御湯など參らせ給ひて、扱ひ聞えさせ給ふ。御殿油參らせ給ひても、いとどいみじき御聲なり。一品の宮は、殿ばら彼方に渡し奉り給へれば、細き御聲にて泣き惑はせ給ふも道理に、悲しとも世の常なり。上の御前を御片手取りて、關白殿率て奉らせ給ひぬ。殿ばら、「殿をも今は率て奉らせ給ひなん、いとど苦しげにおはします」と申させ給ふ。久しう成りぬる御心地に、いとどしく苦しげにおはします。いと怖ろしうて、率て奉らせ給ふに付けても、いと悲し。女房達、大納言殿、中納言殿などは、猶いと近く侍ひ給ふ。典侍不覺なるを、局にて湯など勸むれど、見も入れず、いといみじや。心譽僧都は御修法果てて、今朝ぞ結願仕まつれど、「猶唯だにても暫し」と、殿の御前述給はせければ、然て侍ひ給ひけるに、斯くおはします同じ事なれど、壇を壞たず成りぬるも、猶人よりは殊に見えたり。秋の夜長しと云へども、誰かは心安く寢入り御殿籠らんずる。殿の御前すべて呆れ惑ひておはします。「然てのみやは」とて、守道召して事ども問はせ給へば、「御惱の初め、御祓など仕うまつりしに、斯からんとやは、思ひかけ侍ひし。御占などは宜しからず侍ひしかども、然ばかり爲させ給ひし事どもに、然りとも、轉ぜさせ給はじやとこそ、思ひ給へしか」とて、心憂き御事とぞ、涙も浮きて侍ふ。「然てとかくの日は明日にこそ候ふめれ、關白殿、御喪日なれど、其れは忌ませ給ふま

じ。女院の御忌の日のみなん去らせ給ふべき。それにはた當らせ給はず、然らでは、え頓に爲させ給はじ」と申す。「然らば然にこそは有めれ、朧ろげにやは見えさせ給はざりし」とても、泣かせ給ふ。「祇園の東、大谷と申して賤き野侍り。そなたになんおはしますべきなり」と申せば、然ば明日まかりてぞ、然べきさまに仕うまつるべき」と、仰事賜ひてまかでぬ。御位も去らせ給ひしかば、御輿にて有るべきにあらず、故女院、四條の宮などの御例にて、絲毛の御車にてと思召したり。其日に成りぬれば、早旦より、宮司、然べき人人參り混みて、さまざま思し掟て仰せらる。道造り喧騒る。殿の御前は、力無く思召されて、「え歩むまじからんずらん」と泣かせ給ふ。日暮るるままに、準備ぎ喧騒るに付けても、宮司ども、涙に咽せて仕うまつる。女房達も、常の行啓のめでたかりつるを思ひ合はするに、あさましう涙におぼほれ惑ふ。やがて其折ぞ二火「人棺」仕うまつる。女房え仕うまつらねば、大納言、中納言、惟經、惟憲などぞ仕うまつる。然るべき御具など入れさせ給ふ。關白殿は御忌の日なれば、今日は見えさせ給はず。女房車四つ五つぞ參る。我も我もと泣き惑ひて、此度の御供にと云ひ續くれど、然のみ有るべき事ならねば、然るべき限り參り合へり。然て御車に乘せ奉りて、早き出だす程の御聲ども推し量るべし。一品の宮は、東の廊の板敷下ろしておはしますべきなれば、差し合ひていみじ。乳母達え參らず、宮の御聲え忍び合へさせ給はず、哀れに悲しとは疎かなり。女房の、日頃、衣ども、菊や紅葉など爲重ねたる上に、藤の衣の重なる程ぞ凶凶しきや。常の行啓に有らず、押し返したるなり。有樣も哀れに悲しきに、秋を限りと思ふべきにや、曇り無くめでたきに、續き立ちたる御有樣などもいみじ。物見る人も、年頃の御有樣の何事に付けても華やかにおはしつる、思ひ續けて、目も昏れて見だに飽き參らせず。女房の衣の色さへ見え分かるる月の色なれば、自ら物の心知りたる人は、哀れに堪へ難く、世の常無き事をさへ、取り重ね思ひ續けて、女房の車を見て思ひけり。

藤衣かへすがへすも悲しきは涙の掛かる行啓なりけり

と云へば、今一人、

花紅葉折りし袂も今はとて藤の衣を著るぞ悲しき

などぞ、人知れず我心どもを遣りける。殿の御前、おはしましも遣らねば、肩に掛け奉り、引き率奉る。殿ばら、人人、苦しう思さるべし。斯くて、おはしまし着きにたれば、いと廣き殿なりけり。晝よりも明かなる月なれば、何事も殘り無く見分かる。おはしましては、今はの御事どもにて、夜深くなる御念佛の僧ども、聲振り立てて、泣く泣く哀れなるに、物の故、心も知らぬ者どもも、涙止め難く、山の座主、權僧正など、導師、咒願仕うまつり給ひて、今は唯だ名殘無く、煙にて上がらせ給ふ程ぞ、いみじきや。今宵の御給仕、典侍仕うまつり給ふ。然るべき女房など下りて、皆取り次ぎ仕うまつるも更なり。唯だ思ひ遣るべし。典侍正月の御給仕思ひ出でられて、泣き惑ふ樣、「以下脱文アルカ、或ハ樣ハ衍ニテ、惑ふニテ切レタルカ」然て曉方に果てさせ給ひぬる。御骨は木幡の僧都と、宮の亮頼任と、木幡に率て奉りぬ。あさま

しく一所のみ雲霧に紛れさせ給ひぬるに、在りつる人人、皆歸り參れるも、數は知らねど、哀れに悲し。御忌に、權僧正を初め、然るべき僧綱達、皆侍ひ給ふ。此程の御願ありつれば、枇杷殿の西の廊にて、五大尊造り率らせ給ふ。年頃もいと道心おはしまして、百萬遍の御念佛など、常に爲させ給ふ。貴き人と申しながらも、あさましう心麗はしう、物むつかりなど爲させ給はざりつれば、功德の人とぞ推し量り聞えさする。一品の宮御服奪れ、いと哀れに心苦しう、繪にも書かまほしうおはします。女房、宮司など、皆いと黑ましたり。侍の人人は、さすがに濃き限り衣ばかりにて冠をぞ爲たる。中宮も女院も、覺束なくて止ませ給ひぬることを、哀れに悲しく思召さるべし。土御門殿にて、一年御堂供養や、殿の上の御賀に、四所さし集まらせ給へりし、一品の宮、殿の上など、すべて六所おはしましし程などの事、昨日ばかりと覺ゆるに、尙侍の殿の、哀れに若くておはしましに、この御有樣などの、すべて猶、世こそゆゆしけれ。一品の宮御方には、春宮より御使日日に參る。この春の御裝飾、女房の袖口、思ひ出づるも、いと黑き御簾、御几帳などの程、同じ御邊りの事と見えぬにも、大人しき君達などは涙ぐむ折多かり。はかなく五七日にも成らせ給ひぬれば、日頃造らせ給へる五大尊、百の不動尊、供養し奉らせ給ふ。其頃は惡しき御物の怪どもにて亡せさせ給ひぬれば、佛道妨げにやとて、今は唯だ極樂へとのみ御心ざししなりけり。講師には敎圓法橋いといみじう仕まつる。殿の上の御前など、いみじう泣かせ給ふ。女房など、あなかたはらいたと思ふまで泣けば、講師は惘れつつ、小止みがちなり。御法事は十月廿八日と定めさせ給へり。其れには、銀の御具ども爲て、阿彌陀佛の三尊をぞ造り奉らせ給ひける。昨日の講師、天竺の釋迦の涅槃の所の悲みの涙の、今に其邊りの砂子に染みて、紅の色なる心を說きければ、命婦の乳母、里より、

君戀ふる涙の色はそのかみの別れの庭も斯くや有りけん

返し、辨の乳母、

いにしへの別れの庭の涙にも身に染む事は猶ぞ勝れる

此程も哀れなる事ども多かれど、え書き續けず。

十六日の月明きに、典侍、

君が見し月ぞと思へど慰まず別れし庭を憂しと思へば

辨の乳母、

眺めけん月の光を知るべにて闇をも照らす影と添ふらん

少將の乳母、

立ち昇る雲と成りにし君ゆゑに月ぞ憂き世の影とのみ見る

五節の君、

憂けれども見し面影の戀しさに今宵の月を飽かず見るかな

命婦の乳母、

何どて君雲隱れけん斯くばかり長閑かに澄める月も有る世に

少將、

さやかなる月とはいさや見え分かず唯だかき曇る心地のみして

斯くて、七七日の御有樣、爲させ給ふ事ども、え書き續けず。此度の御佛造らせ給ふ御飾りの御料には、大和守保昌の朝臣の許、玉を召しに遣はしたれば、京の家に、奉るべき由云ひ上げたりければ、參らすとて、和泉添へたり。

數ならぬ涙の露を添へてだに玉の飾りを增さんとぞ思ふ

同じ御料の玉を、權大進爲政が請ひたりければ、赤染、

別れにし玉は返すに難けれど涙のみこそ袖に掛かれれ〔底本ニハれるト誤レリ〕

殿の御心地も、去年より斯く惱ましうおはしませば、御堂の事、夜晝準備がせ給ふ。此宮の御事の後、いとど苦しう成り增さらせ給へれば、哀れに心細く思さる。いと怖ろしき事に歎き給へれば、御法事の僧の法服、御誦經の料の御衣の事、染殿にも、大方の人人も、準備ぎ滿ちたり。斯かる程に、はかなく廿七日に成りぬれば、阿彌陀堂に莊嚴御裝飾など爲させ給ふ。また曉に、殿の上の御前、一品の宮、一つ御車にて渡らせおはします。殿の御方、宮の御方など、女房車二十ばかり有り。宮の女房、此度ばかりの宮仕と思ふに、殘り無く參りたり。萬づまだ暗き程にて覺束なければ、詳しく書き付けず。おはしまし暇きて、此御堂の北の方の廊に下りさせ給ふ。明く成るに見れば、御前より初め、皆墨染におはしまし合ふに、いとど悲し。萬づ爲立てて、未の刻ばかりにぞ事始まる。所所の御誦經ども、庭の面見えぬまで、池の際に出だして積み渡したり。殿の御前、女院、中宮、關白殿、次次の殿ばら、一品の宮、宮司ども、下部まで、赤き裝束に、また尼の御裝束を添へさせ給へり。この御裝束を見て、典侍、

掛けてだに思ひ掛けきや唐衣互に涙掛けんものとは

返し、辨の乳母、

花にのみ染めし袂を打返し涙の掛かる色ぞ悲しき

佛は、此造らせ給へる阿彌陀の三尊、御經の程、推し量るべし。講師などの申し續け給ふ有樣、なかなかなる物摸ねびなれば書かず。斯くて事ども果てぬれば、かき冷ましたるに、一品の宮は、やがて今日の御局に留まらせ給ひぬ。十二月二日御正日なれば、其れ過ごして、九日枇杷殿に渡らせ給ふべきなりけり。殿の御前、萬づを爲極めさせ給ひて、いとど心長閑かに、哀れに悲しう思さる。御心地の惱ましさ增さらせ給へれど、この御事をのみ、心に掛け思召しつるに、夜さりつ方より、いと苦しう思召さるれば、堪へ難くて臥させ給ひぬ。

鶴林

殿の御前畏く、此心地の、昨日の御決事を遂げさせつる事と思召す。御正日は來月五日なり。其れは皆、御經、佛など萬づ皆具したれば、いと安き事と仰せられて、いと眞やかに苦しげにおはしませば、殿ばら御心地惑はせ給へり。日頃、上の御堂、定基僧都の御坊におはしませば、程狹くて、許多の殿ばら、人人參り混み給へるに騷がしければ、「如何で、斯く騷がしからで在らばや」と述給はすれば、いみじう忍ばせ給ふ。上の御前は、猶一品の宮のおはします方におはします。關白殿、御祈り御修法の事など捉てさせ給へば、「更に更に、己れを哀れと思はん人は、叶度の心地に、祈りせんは、なかなか恨みんとす。己れをば、惡道に落ちよと、惑はさばこそは有らめ、唯だ念佛をのみぞ聽くべき。この君達、更に更に、な寄り在せそ」など仰せらるれば、「御物の怪の思はせ奉るなめり」など、私語き述給はすれば、御祈り絶えたり。日頃に成るままに、いと苦しげにおはします。十一月に成りぬれば、宮の御正日の事せさせ給ひつ。內裏、春宮にも、此御惱をいみじき事に思召し歎かせ給ひたり。御心地俄かに重きにはおはしまさねど、去年より例のやうにもおはしまさず、物も聞し召さで、久しう成らせ給ひたるに、此宮の御事を、いみじう思召し屈折れさせ給ひつる續きなれば、斯くいと弱げにおはしますなりけり。月頃も、すべて御祈り絶えて爲させ給はず、唯だ此御堂の內の御佛を見給ふ事を、夜晝營み思召して、安き睡も御殿籠らずなど在りつれば、「如何に」とのみ、殿ばら、宮ばら思し歎かせ給へるに、斯くさへおはしませば、いと心憂く思し歎かせ給ふ。我が御心地にも、「此度は限りの度なり、更に更に物騷がしき有樣無くて在らん」と述給はす。すべて物をつゆ聞し召さねば、いと賴もしげ無くおはします。殿の上、女院など渡らせ給ひて、泣く泣く見奉らせ給へば、「疾く疾く歸らせ給ひね」とのみ申させ給へば、心長閑かならぬを、口惜しう心苦しう思召さる。內裏、春宮より御使隙無く參る。斯かる程に、霜月の十餘日の程に成りぬ。五節の事ども喧騷れど、殿ばら、宮宮御服なれば御覽なども無く、此上無く嘆嘆し。中宮大夫は五節出だし給へば、中宮よりも童女の裝束、えならず爲て奉らせ給へれど、其れも思召す事ども有れば、御心地も空なり。今は出でさせ給はんとのみ、疊東なさを歎かせ給へども、殿の御前の、「暫し」と申させ給へば、霜月の二十日の程にも成りぬ。十九日の夜さりは、一品の宮、枇杷殿に渡らせ給ふべき由仰せられて、「渡らせ給はんままに、此方へ渡らせ給へ」と申させ給へば、やがて殿の御前に渡らせ給ふ。灯影に見奉り給へば、黑橡の御小袿に、氣鮮明なる御色の程、有樣など、いと細細やかに美くしげにおはします。いみじう泣かせ給ひて、「疊東ななから、如何でかとてなん。然ば夜更けぬ前に渡らせ給へ。亂り心地宜しくも成り侍らばこそは參り侍らめ。早早、この御送り疾く疾く」と、申させ給へば、關白殿、殿ばら、打添ひて渡し奉らせ給ふ。一品の宮の御前は、恥かしくて、とも斯くも申させ給はざりつれど、萬づ哀れに思召されて、人知れず歎かせ給ふ。萬づに哀れ

に悲しき御渡りなり。殿ばらおはしまし、昔の女房皆侍へば、同じ樣なれど、唯だ一所おはしまさぬのみ、返す返すあさましきや。中納言殿の上も、此頃御子産みの事有べければ、三條なる安藝の前司よしすけが家に渡らせ給ふにも、やがて覺束なさに渡らせ給ふ。「萬づいと悲しくて、何事も知り聞えぬなり、疎かにな思しそ。今然るべき物は奉らん、白き物ども要るわざを」など、哀れに申させ給へば、中納言殿の上も、忍び敢へず泣かせ給ひ、「如何に、如何に」と、泣く泣く歸らせ給ひぬ。斯かる程に、中宮出でさせ給ひぬ。「今まで見奉らざりける事」と、いみじう泣かせ給ふ。女院、上の御前などは、初めよりおはしませば、中宮も「此處におはしまさん」と申させ給ふを、「いと便無き事なり、事の煩ひ有り、早う西殿へ渡らせ給ひね」と聞えさせ給ひけれど、唯だ斯くておはします。殿の御前、いと苦しう成らせ給へば、此度と思召して、年頃御手づから書かせ給ひける御草紙二三帖ばかり侍ひけるを、女院に奉らせ給ふとて、殿、

風吹くと昔の人の言の葉を君が爲めにぞ書き集めける

御返し、女院、

慰めも亂れもしつつ惑ふかな言の葉にのみ掛かる身なれば

また、殿、

言の葉も絶えぬべきかな此世には賴む方無きもみぢ葉の身は

斯くて日頃に成らせ給へば、本意の樣にてこそは、同じくは」とて、阿彌陀堂に渡らせ給ふ。もとの御念誦の間にぞ御裝飾しておはします。高き屏風を引き廻して立てさせ給ひ、人參るまじく構へさせ給へり。殊なる事無ければ、起き上がらせ給はず。猶「物つゆ聞し召せ」と、殿ばら申させ給へば、いみじうむつがらせ給ふ。内裏よりも、東宮よりも、斯く今まで見奉らせ給はぬ歎きの御消息頻れば、「吉からん日して、おはしませ給へかし。唯だ思ふ事は、いと無禮に、臥しながら御覽ぜん事を思ふなり、然らば吉き日して」と述給はす。此月廿五日宜しき日なれば、其日行幸の御用意あり。春宮の行啓は同じ日有るべけれど、心慌ただしかるべければ、同じ月の廿八日と定めさせ給ふ。然て其日に成りて、辰の刻ばかりに行幸あり。昨日御髮など剃らせ給ひて、御袈裟、衣など奉らせ給ひて、世の常の御有樣にて、御脇足に押し掛かりておはします。上いといみじう哀れに見奉らせ給ひて、塞き止めさせ給はぬ御氣色のいみじきを、殿もいみじく泣かせ給ふ。あさましう有らぬ人に細らせ給へる御有樣、哀れに悲しく心憂く見奉らせ給ふ。「然て何事をか思召す事とては有る」と聞えさせ給へば、「今は此世に、すべて思ふ事候はず、世の中に朝廷の御後見仕うまつりたる人人多かる中に、上がりても、斯ばかり幸ひ有り、爲べき事の限り仕うまつりたる人候はず侍る。先づは朝廷の祖父や、伯父やなどこそは、斯樣にて候ふに、また斯かる折の行幸候はず。父帝、母后の御事にこそは候ふめれ。其れすら、然しも有らぬ類ひども數多候ふ。先づ近うは三條院、六月に位に即かせ給ひて、十月七日冷泉院の御心地重らせ給ひし、行幸あるべく仰せられしかど、公卿の定めに、猶御物の怪のいと恐ろしうおはします由申し侍りしかば、行幸候はず成りにき」など、いと爽やかに申し續け

させ給へば、此御心地は力無げさのいみじきにこそ有めれ、御心地はゆめに變らせ給ふこと無し。あはれ安め奉らばやと思すに、いと悲しうて、「思さんままの事述給へ」と返す返す申させ給へば、「すべて思ふ事候はず、世始まりて後、この行幸こそは例に候ふめれ。是れより外の事は何事かは。但し此御堂の事仕うまつりつる男どもをなん一つの事をせんと思ひ給へつる」と申させ給へば、「いと易き事なり」とて、關白殿の上の家司、因幡の前司庶政をば、頼明が交替の美濃に成させ給ふ。下の家司、左衞門尉〔志カ〕ためかた「爲長ノ衍カ」をば、使兼けさせ給ひ、宣旨下させ給ふ。また御堂には五百戸の御封寄せさせ給ひ、宣旨同じく下りぬ。殿の御前、「いみじう嬉しき仰せなり」と、返す返す泣く泣く喜び申させ給ふ。上はまた何事をもと思召さるれど、また申させ給ふ事無きを、口惜しう思召さる。女院の御方に入らせ給へれば、女院いみじく泣かせ給ひて、「殿のいみじう嬉しき事に喜び泣き給ふ、返す返す嬉しき事」と、喜び申させ給ひ、「哀れに心憂き事見給ふる」といみじう泣かせ給ふ。「中宮然ておはしませば、同じ樣の御事どもにぞ、御對面などは頓にえ有るまじきにこそ」など語らひ申させ給ふ。然ていと疾く還らせ給ひぬ。〜朝廷より、此御堂に絹三百疋、布千段、御誦經に行はせ給ひけり。殿の御壽命の爲めの御誦經なりけり。其程、げに世の例に爲つべく、古り難うめでたき御有樣なり。一年の御堂供養に、行幸、行啓など思し合はせられて、還らせ給ひぬ。斯くて廿八日に成りぬれば、東宮の行啓あり。同じく殿の御前、一日のやうに、然るべき樣にておはします。東宮見奉らせ給ふままに、哀れにあさましきまで泣かせ給へば、殿もいみじう泣かせ給ふ。有べい事ども申させ給ひて、いみじう泣かせ給ふにも、御心の中に、我世に遇はせ給はず成りぬる事を、哀れに口惜しうも有るかな。心の程見え奉らんと思ひつるものをと思さるるに、いと悲しう思召さるるなりけり。「今は斯く行幸、行啓にまかり合ひぬれば、今なん覺束なく心留まる事無くて、極樂にも心清く參り侍るべき」とても、泣かせ給へば、いとど哀れにいみじう見奉らせ給ふ。女院の御方に入らせ給ひても、此御事より外の事は何事かは有らん。然ても、疾く歸らせ給ふ。「暫しもと思へど、起き居給へるがいと苦しければ」と述給はせても、また泣かせ給ふ。殿の御前、「今はいと心安し、今日まで世には在りつるなり」と述給はするに付けても、僧俗、許多の人人、涙を流せど、いみじう忍びやかなり。其後は、內裏にも、東宮にも、覺束なく思し歎かせ給ひて、思し入りたるも怖ろしうて、御愼みども有り。帝いみじう音樂心おはしませど、此御惱の後、世を思し濕り、哀れなる御氣色におはします。何方よりも御使頻り、參り續きたり。筑紫、陸奥の國の守を放ちての國の守、殘る無く參り集まりたり。來年は交替なるべき國國などは、年も殘り無く成りぬるに、いと理無き事に思へど、「如何でかは」とて、何をも知らぬ樣に上り集まるなんめり。また御堂の會などに參り混みし尼どもは、數を盡して、唯だ此御堂の邊りを去らず、夜晝額に手を當てて念じ奉りたり。「非常もおはしまさば、如何に哀れ」と、人知れぬ歎きどもも哀れなり。「此御堂は、三時の念佛、常の事なり。此の頃は然るべき僧綱、凡僧ども交代りて、やがて不斷の御念佛なり。然ればいみじう尊き事も、やがて聞き合へるなりけり。三位中將入道、「尋常の折こそ有らめ、斯かる折に

は如何でか」と、殿の上切に聞えさせ給へば、參り給ひて、御枕上にて、念佛絶えず勸め奉らせ給ふ。山の座主、常に參り給ひて、いみじき事どもを申し聞かせ奉り給ひて、ともすれば打顰み泣き給ふ。只今はすべて此世に心留まるべくも見えさせ給はず。此立てたる御屏風の西面を開けさせ給ひて、九體の阿彌陀佛を凝視らせ奉らせ給へり。いみじき智者も、死ぬる折は、三つの愛をこそ起すなれ。況して殿の御有樣は、樣樣めでたき御事どもを思し放ちたる御氣色なるを、現世、後世具したる御身と見えさせ給ふ。女院、中宮をだに今は相見奉らせ給ふこと無し。齦ろげに申させ給ひてぞ、「然は」とて唯だ僅かなる程にて、「早還らせ給ひね、還らせ給ひね」と申させ給ふ。すべて臨終の念佛のみ思し續けさせ給ふ。佛の相好に有らぬより外の色を見んと思召さず、佛法の聲に有らぬより外の世の聲を聞かんと思召さず、後生の事より外の事を思召さず、御目には彌陀如來の相好を見奉らせ給ひ、耳には尊き念佛を聞し召し、御心には、極樂を思し遣り給ひて、御手には彌陀如來の御手の絲を引かへさせ給ひて、北枕に西向に臥させ給へり。萬づに此相ども見奉るに、猶權者におはしましけりと見えさせ給ふ。御堂の内に坊して侍ひ給ふ僧達、御堂童子に至るまで、唯だ物に當りて、水を浴み、人知れぬ額を突き、佛を入りも見奉る。御堂、御堂の僧など差し集まりて、或は搔膝をし、或は空を仰ぎて、如何で限り無き御身に、數ならぬ身を代り奉らん、代り奉らんと思ひ、涙を流すもいみじう哀れなり。世の中の尼どもは、阿彌陀堂の簀子の下に集まり居て、十方世界の諸佛の世に出でさせ給ひて、機緣既に盡きぬれば、必ず滅度に入り給ひて、近く釋迦如來、卅五にして佛道成り給ひ、入十にて涅槃に入り給ふ。佛日既に涅槃の山に入り給ひなば、衆生生死の闇に惑ふべし。但し是れは非生に生を唱へ、非滅に滅を現じ給ひしが如く、眞に滅し給はずば如何に嬉しからんや。十二月二日、常よりもいと苦しう爲させ給へば、女院、中宮、上の御前も、いとゆゆしう思ひ奉らせ給ひて、關白殿に切に申させ給へば、人人出だして、見奉らせ給ふに、哀れに悲しういみじうて、殆御聲立てさせ給ひつべし。然て齣らせ給ひぬれば、僧達近う候ひて、御念佛をして聞かせ奉る。然れど其日癒らせ給ひつ。此程、内裏、春宮より御使いみじかりつ。今に猶弱げにおはしませど、唯だ此御念佛の怠らせ給はぬをのみ、おはします定にて有るなり。又の日も、「今や今や」と見えさせ給へれど、事無くて過ぎさせ給ひぬ。四日巳の刻ばかりにぞ亡せさせ給ひぬるやうなる。然れど御腕より上は、まだ同じやうに溫かにおはします。猶御口動かせ給ふは、御念佛せさせ給ふと見えたり。許多の僧ども並み居て、涙を流して、御念佛の聲惜まず仕うまつる。「臨終の折は、風火先づ去る。かるが故に動熱して苦多かり。善根の人は地水先づ去る。かるが故に、緩慢して苦無し」とこそは有なれ。然れば善根者と見えさせ給ふ。哀れに内裏、東宮の御使ぞ隙無き。日頃いみじう忍びさせ給へる御前達、殿ばら、聲も惜ませ給はず、げにいみじや。上達部、殿上人すら、何くれは更にも云はず、御堂の内の卑しの法師ばらの、物思ひ無げなりつるが、庭の前に伏し轉び泣くも、げにいみじ。世界の尊き尼法師さへ集まりて「佛の世に出で給ひて、世を濟し給へる涅槃の山に隱れ給ひぬ、我等が如き如何に惑はんとすらん」など云ひ續け泣くも、いみじう悲し。夜中過ぎてぞ冷え果てさせ

給ひける。御棺は惱み初めさせ給ひし日より造らせ給へれば、やがて入棺し奉りつ。いみじう御聲ども正無きまでおはしまさふ。又の日、陰陽師召して問はせ給ふに、「七日の夜せさせ給ふべし、所は鳥邊野」と定め申して退かでぬ。七日に成りぬれば、早旦より準備ぎ立たせ給ふ。例の事ども推し量るべし。日暮れぬれば、御車に昇き乘せ奉りておはしますに、其日早旦より夜まで雪いみじう降る。然るべき人人、例の裝束の上に、怪しの物ども着て、雪かき敢へず降り掛かりたるも、樣樣に哀れに悲し。「萬づ事削ぎて、唯だのやうに」と仰せられけれど、事限り有りて、人の續き立ちたる程、十、廿町ばかり有りぬべし。今は出でさせ給ふ。無量壽院の南の門の脇の御門より出でさせ給ふ。彼の釋迦入滅の時、彼の拘尸那城の東の門より出でさせ給ひけんに違ひたる事無し。九萬二千の人集まりたりけんにも劣らで哀れなり。此世界の尼ども、心を盡して參り送り奉れど、許多ある人なれば、何れとも知り難し。萬壽四年十二月四日亡せさせ給ひて、月立七日の夜御葬送、御年六十二に成らせ給ひけり。儀式、有樣に、夜も唯だ更けに更けもて行く。所所の念佛僧、奈良、三井寺、比叡、石藏、仁和寺、横河、法性寺、すべて云ひも遣らず。關白殿、內大臣殿を初め奉りて、許多の上達部の歩ませ給へるも、すべて哀れに數を盡したり。物見車さへ數知らず、いみじく哀れに悲し。事始まりて、山の座主、御導師仕まつり給ふ。猶初め終り導き奉るべきにこそ有りけれ、先だち奉るやうも有らましかばと、先づ悲しく涙を流し給ふ。然てえ仕まつり遣り給はず。夜更けて鳴り止み、いと靜かなるに、云ひ續け給ふ事も、いとどしき涙の催しなり。「淨飯王入滅度の朝、悉達太子銀の棺を荷ひ、摩耶夫人眞如に還り給ひし夕、五百の羅漢紅の涙を流しき。不生不滅の佛すら、猶愛別離苦、無去無來を離れ給はず」など、云ひ續け給ひて、六道に逢ひ給はん佛菩薩に申し給ふべきやうなど、一一に續け申し給ふ。「此中に十六字あり。諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂。其處何の心か有ると問はば、即ち愈靈答へ給ふべし、諸行無常は天上に上る智慧の橋なり、是生滅法は愛欲の河を渡る般若の船なり、生滅滅已は劒の山を越ゆる寶車なり、寂滅爲樂は淨土に參る八相成道の義果なり。無量無數の賢聖來りて、此所は何れの經論の文ぞと問はば、答へ給ふべし、諸行無常は增一阿含經の文なり、是生滅法は大般若經の文なり、生滅滅已は華嚴經の文なり、寂滅爲樂は後敎涅槃經の文なりと答へ給ふべきなり。この娑婆世界は願ひ住むべき所にもあらず、輪王の位久しからず。天上の樂みも、五衰早く來り、乃至有頂も輪廻期無し。況んや世の人をや。事と願と違ひ、苦と樂と伴なり。かるが故に經に述給まく、出づる息は入る息を待たず、入る息は出づる息を待たず、唯だ眼の前に樂び去り、悲び來るのみならず、また命終に臨む時、罪に從ひて苦に墮つ。愈靈彼の西方世界に生れ給ひなば、樂みを受け給はん時、極も無く人天交接兩つながら相見ることを得給ふ。また限り無き樂びを得給ふべし。かるが故に此の世界につゆも御心留まらず、佛の御敎の如くにて、最後の御念佛亂れさせ給はざりつ。賴もしきかな、今は極樂の上品上生の御位と賴み奉る」など、いみじう哀れに悲し。斯樣の道の師などは、いみじき帝の御事と申せど、唯だ事の初めを氣色ばかりにて止むなれ。是れは年頃の御師弟子の契りにおはしましつれば、泣く泣く殘り無く無常の作法をも、

然るべき事をも、心の限り申し給ふ。爲ん方無く急く悲し。世の人も諸行無常の咒をば唯だ涅槃經の偈とのみこそ知りたりつれ。多くの事ども持たり給へりけるものを、宜べこそ雪山童子身にも換へけめと、聞く人人のみ有り。六道の佛菩薩の御名ども、泣く泣く皆云ひ續け給へれど、え聞き留めず成りぬるこそ口惜しけれ。然て萬づに悲しくて、曉方にぞ、殿ばら、然べき僧など集まりて、御骨拾はせ給ひて、瓶に入れて、年頃親しく仕うまつりつる左少辨章信掛け奉りて、宗基僧都諸共に、木幡に奉て奉りつ。然べき年頃の人人皆參る。然て殿ばら歸らせ給ひて、御堂に皆おはしましぬ。何事も哀れに悲しかりつるに、忠命內供と云ふ人こそ、鳥邊野にて覺えけれ、後に洩り聞えたりし。

煙絶え雪降り敷ける鳥邊野は鶴の林の心地こそすれ

となん有りける。彼の娑羅林の涅槃の程を詠みたるなるべし。長谷の入道殿は聞き給ひて、「薪盡きと云はまほし」とぞ述給ひける。殿ばらの、御堂にて、日の過ぐるままに、哀れなる御事を盡きもせず思し歎く。また此程にあさましう哀れなりつる事は、侍從大納言殿、朔日の日より、奇しう心地の例ならぬは、風にやとて、朴を參り、湯ゆでなどして試み給ひけれど、いと苦しうのみ思されければ、如何なるにかと思し、殿の內も、萬づに御祈し騷ぎけるに、四日の夜さり、殿の御前の終らせ給ひし折にこそ亡せ給ひにけれ。いと苦しう思されければ、姫君と行經、信經の君の御手どもを、左右に捉へてこそ絶え入り給ひけれ。哀れに悲しとも疎かなり。北の方、君達、惑ひ給ふ。此殿は年頃道心にて、行ひいみじう爲給ひつる人なり。法華經、念佛、數知らぬに、日日の所作に大佛頂をこそ七遍讀み給ひけれ。疎ろげならず、必ず往生の有樣ならんと疑無し。其が中に、父君義孝の少將、方便品誦して亡せ給ひて、往生の記に入り給ふめり。一條攝政の御裔、奇しう命短くおはするに、此殿は五十に餘り給へりかし。然れど此殿は、御心の限り無くめでたくおはしつればにや。今までおはしつ。位も正二位、官も大納言ばかりにて、耻無き程なり。朝廷より初め、世の人いみじう惜み聞ゆ。いみじき物の上手の亡せ給ひぬる事と、口惜しう思ふ人多かり。然りげも無く、盛りにおはしつる殿の、思ひ掛けぬ程の御有樣こそ、返す返す哀れに悲しけれ。殿の御有樣は、然れど御年も寄りて、許多の年頃榮えさせ給へりつれば、道理に思ひ聞えさす。此殿の御死こそ、いと合へ無き御事に世の人聞ゆ。中納言殿、斯からぬ折ならましかば、送り聞えてましと、口惜しう、人知れず哀れにこそ歎かせ給へ。此事どもを聞き給ひて、長谷の入道の御許より、中宮大夫に聞え給ひける。

見し人の無く成り行くを聞くままにいとど深山ぞ寂しかりける

中宮大夫、御返し

消え殘る頭の雪を掃ひつつ寂しき山を思ひ遣るかな

となん聞え給ひける。御堂には、宮宮、殿ばら、哀れに聞えさせ給ふに、十日の夜、中宮の御夢に、いと若くをかしげなる僧の、いと貴やかに裝束したるが立文を持て參りて、「是れ」と申せば、「何處よりぞ」と有れば、「殿の御文」と申せば、喜びて取り入れて御覽するに、「下品下生になん有る」と侍る御消息なれば、

宮の御前、「いと思はずに、然やは」と述給はせければ、此僧、「如何でか斯うまでも、聽ろげの事には候はぬものを」と申す、と御覽じければ、殿ばら、「然は往生せさせ給ひけるにこそ有なれ。此御堂の事を、晝夜御營みに心に掛けさせ給ひ、臨終の觀念、有るべき限りおはしましつるに、いみじう嬉しきかな」と思し述給はする。三位の中將入道述給ひけるは、「いと苦しげにおはしましし折、念佛切に勸め聞ゆ。自らも爲しに、眠りたりしかば、いと心地よげなる御氣色にて、「下品と云ふとも足んぬべし」と云ふ言を、返す返す殿述給ふと見しかば、功德の相なめりと思ひ給へて、人にも聞かせで止み侍りにしを、此御夢に聞き合はするになん、いと賴もしう成りぬべき」とぞ聞え給ひける。また二三日ばかり兼ねて、永昭僧都、融碩なんどが、御枕上にて御念佛しければ、融碩の夢に、九體の中尊の御左の肩の脇より、いと美くしき小法師の出で來て、香爐を持て來て、殿の御前の御枕上に置きつと見て覺めにけり。其夢は、まだおはしましし折、人人に皆語りけり。往生の記などには、人の終りの有樣、さては夢などをこそは聞き置きて、往生と定めたれ。定めて往生せさせ給へりと見えたり。「先づ亡せ給ひし有樣、御腰より上は溫まらせ給ひて、御念佛極まり無く爲させ給ひしに、功德の相著く見えさせ給ひにきかし」など述給ひ定めさせ給ふ。法華經をいみじく歸依し奉らせ給ひければ、現世安穩、後世善所と見えさせ給ふぞ、世に無くめでたきや。御忌の程、關白殿、法華經一部、阿彌陀經あまた、經一偈を上げさせ給ひて、日日に爲させ給ふめり。またおはしましし折、はかばかしき御處分も無くて亡せさせ給ひにしかば、此頃ぞ關白殿せさせ給ふ。然べき御帶、御佩刀などは、かねて御堂の藏に置かせ給ひて、やんごとなからん折に、皆御堂に借り申させ給ひし事なり。御領、御庄、然るべき限りは、四五所皆寄せ奉らせ給ひて、殘りの所は、「上のおはしまさん限りは領ろし召して、後は」とぞ述給はせしかば、其儘にと思召すを、納殿まさのりが許に使ひ殘さひ給へる、つやつや絹五六千疋、例の絹萬疋、綾、絲、綿、樣樣の唐綾、すべて數知らず。其れは關白殿の方へ、女院、中宮、一品の宮、高松殿の上、中納言殿の北の方などに分ち奉らせ給ひて、殘りは皆上の御前に奉らせ給ひつ。また世の中の六十餘國の上馬、「是れなん一なる、一なる」と奉り集めたるも、殿ばら受領の下り、僧達などにも分たせ給ひて、殘り、いみじと思召すを、撰り置かせ給へりける馬、御厩の加へて百疋ばかりぞ候ひける。皆召し集めて、殿ばらに配り奉らせ給ふ。御忌に籠り候ひ給ふ僧達に皆配らせ給ふ。殿の御前の御心捉てにも、關白殿さし進み、有るべき限りめでたくおはします。哀れ上の御前、四十餘年と云ふに別れ奉らせ給ふに、いといみじう思したり。前前の御物思ひだにこそ、類ひ無く思されたるに、此度は萬づに付けてさへ思し歎き增さりたり。此御忌に侍ふ僧達、關白殿を初め奉り、此殿ばら、他上達部、受領、數を盡して、非時せさせ給ふに、添へ給ふ物、あさましうおどろおどろし。また七日七日の御誦經、僧達一わたり、引き渡すばかりの事どもをぞ爲させ給ふ。すべていみじかりし御名殘なれば、末までめでたしと見えたり。十二月の廿八日、女院、極樂淨土書かせ給ひて、色紙の御經などして、申し上げさせ給ふ。その御法事、有樣、書かずとも推し量るべし。殿の御前には、百體の觀音を造り奉らせ給ひ、夜を晝に急がせ給ふ。やが

て御法事に申し上げさせ給ふべきなり。千部の法華經思し始めたりしも、いみじう準備せさせ給ふ。是れも此度同じうはと思し急がせ給ふ。九月よりは、殿ばら皆、皇太后宮の御服にて、薄鈍にておはしまし、宮司なども濃やかなりつるに、黒橡に成らせ給ふ。世の中の人、十が九は、皆鈍み亘りたり。云はば諒闇とも云ひつべし。朝廷よりも、諒闇せよと云ふ宣旨下りたればなりけり。斯くて萬壽五年に成りぬ。今年は、世の中に新しき車見えず、先華やかに追ふこと無く、小舍人、童部だに、華やかなる衣着せたる人無し。女院、中宮、關白殿など、皆斯くておはしませば、世の人は皆御堂に混みたり。御法事は、正月に爲させ給ふべければ、夜を晝に萬づ準備がせ給ふ。御佛は極樂淨土を繡佛にせさせ給ふ。御經は金泥に書かせ給ふ。正月廿八日なれば、いと近く成りぬと準備ぎたち給ふ。除目は二月に有るべき年なめり。殿の上は御惱ありつれど、宮の御事無くば、いと只今は、斯くおはしまささまし。御堂の事どもをぞ、返す返す關白殿には申させ給ひける。「女院は高陽院におはしまさせて、關白殿は土御門殿に住ませ給ひて、御堂を常に見させさせ給ひ、修理を爲させ給へ」とぞ申させ給ひける。また「一品の宮の御事をなん思ふ事なる。あなかしこ、疎かに誰も思ひ聞えさすな、我が遺言違ふな」とぞ、返す返す聞えさせ給ひける。こまと、彼の高松殿の中納言殿の上は、殿の亡せ給ひにし頃ぞ御産は有りし。關白殿、萬づに扱ひ聞えさせ給ひける。斯くて二十日に成りぬれば、萬づ搖すり合ひたり。御誦經、朝廷、東宮、一院、女院、中宮、關白殿、内大臣殿、北の政所達、次次の殿ばら、中納言殿の上、高松殿、大方すべて庭の隙無し。世の中の絹、布と云ふ物、すべて今日に盡きぬらんと見えたり。僧どもの添へ物、布施など、すべて、なかなかなれば、書き盡さず。いみじう世に珍らしき事にこそ有めりしか。僧綱ども、惘れて取り敢へぬ樣なり。少し家も狹からんは、置き處あらじと見えたり。其日やがて、殿ばら、宮宮歸らせ給ひにしかば、御堂かき冷ましたるやうに成りしかば、御堂の上下、皆涙を流してぞ、哀れに道理にこそ見えしか。殿の御前の御有樣、世の中に、まだ若くておはしましより、行ひ人と等しく成らせ給ふ。朝廷に次次仕まつらせ給ひて、唯一無二におはします。出家せさせ給ひし頃の御事、終りの御時までを書き續け聞えさする程に、今の春宮、帝の生れさせ給ひしより、出家し道を得させ給ふ。法輪を轉じ、涅槃の際まで、發心の初めより、實繁〔二字何ノ衍ニヤ〕の終りまで書き記るす程の、悲しう哀れに見えさせ給ふ。彼の侍從大納言の御法事も、同じ日ぞ世尊寺にて爲給ひける。此僧ども、暇明くを待ちて、夜ぞ爲させ給へる。哀れなる殿の御死にこそ。斯く云ふ程に、日頃は過ぎて、二月二十日の程に除目ありて、殿の中納言は權大納言に成り給ひぬ。國國の受領さまざまに成り集まり、喜び申す。中宮の大夫は民部卿に成り給ひぬ。まことや權大納言は此民部卿の御許を、一昨年立たせ給ひて、殿の上のおはします、今の大貳忰憲が家の内にぞ住ませ給ふ。餘所餘所なれど、猶此民部卿の御許にぞ猶斯くて領り聞え給ふ。昔より此殿をば、上の御子に爲奉らせ給ひしかば、斯う心細くおはしませば、同じ所に參りて住み給ふなりけり。次次の有樣ども、またまた有るべし。見聞き給ふらん人も書き付け給へかし。御堂の百體の觀音は、阿彌陀堂にぞ宿り居させ給ふめる。あはれ殿のおはしまさましかば、許多御

堂設けて、安らかにおはしまさましものを。佛も然べき人に後れ奉らせ給へば、斯くこそは哀れに見えさせ給へ。殘り人滅の後は、世間皆闇に成りにけり。世の燈火消えさせ給ひぬれば、長き夜の闇をたどる人、幾そばくかは有る。主人去らせ給へる御堂雜備がせ給ふは、御果ての事、やがて思召したるなるべし。女院、中宮、内裏に參らせ給ひても、哀れにいみじく思召したる御氣色を、内裏の上も道理に思召す。御果てより前に、百體の觀音の御堂は、關白殿造らせ給ふ。あはれにめでたく幸ひおはします人も、身一つこそ有れ、後の御事どもなどは、思はずなる事ども必らず有るを、此殿の御心揆て遍くめでたくおはしまし、世の恨つゆも聞かせ給ふべくもおはしまさねば、あはれに忝く、世に有ると有る人、仰ぎ申したり。今行末に世を政治ち直させ給はん御末にも、變らず斯くおはしませば、世の人の歎き云ふ者あらじと見えたり。

殿上花見

入道殿亡せさせ給ひにしかども、關白殿、内大臣殿、女院、中宮、數多の殿ばらおはしませば、いとめでたし。尚侍の殿、皇太后宮のおはしまさぬこそは、口惜しき事なれど、如何でかは、然のみ思ふ樣にはおはしまさん。光源氏亡れ給ひて、名殘も斯くやとぞ、さすがに覺えける。めでたきながらも哀れに覺えさせ給ふ。后宮、右大臣殿、藏大將などばかり物し給ふ程の覺えさせ給ふなり。さすが末に成りたる心地して哀れなり。女院は内裏、春宮の御親にて、太上天皇の定にておはしまして、御車にてのみ御堂へ渡らせ給ふ。内裏へも入らせ給ひなどして、なかなか心安くめでたき御有樣なり。御兄弟の殿ばらより初め奉りて、やんごとなくいみじう思ひ奉らせ給へり。世の人も靡き申したること道理なり。いみじく氣高く、侍ふ人、聲高からず、打解けず嚴やかに心にくく、めでたき院の樣なり。容を好ませ給ひて、今も好き若き人ども參り集まりて、めでたく有らまほしき御有樣なり。若き人競み交はし、扇を差し隱しつつ並み侍ふ。裝束より初めて、我も劣らじと思ひ競み交はしたり。然れど衣の音冒ましからず、寛舒やかに心にくき院の樣なり。皇太后の宮、樣異り、華華と持て出で好ましかりしも、然る方にて、をかしかりしを、殿ばらも思ひ出で聞え給ふ。中宮只今の、時の后にて、又雙ぶ人無く、常人のやうにて侍ひおはします。いとめでたし。是れも盛りの御有樣なれば、人人參り集まり、宮達數添はせ給ひて、御乳母參り集まりて、いとめでたし。好き若人、童女など參りて、心心に好ましくめでたき御有樣、御心ばへより初め、幸ひは然もこそおはしまさめ、如何で斯く飽かぬ所無き御有樣どもなりけんと、御兄弟の殿ばらも見奉らせ給ふ。高松殿の御腹には、春宮大夫、中宮權大夫、權大納言など申して、男三人おはしますなり。姫君は右衛門督の上にて物し給ふ。上の卷に記るしたれば、新しくも申し立てず。中宮には、女宮二人おはしまして、男宮のおはしまさめ事を口惜しう、内裏にも宮にも、殿ばらも思召す。姫宮は入道殿の御服にて、一年は御袴も奉らざりしかば、五歲にて奉る。十二月の十餘日になん有りける。帝、后、御心に入れさせ給ひて、思し營ませ給ふ。殿も故

殿のおはしまいしに變らず、居立ち營ませ給へば、いとどめでたし。其日の儀式、有樣など、云へば疎かなり。皆紅に、蒲萄染の上衣、柳の唐衣、色許されたるは、二重織物、常の人人は繪書き、繡物し、えも云はず競み盡したり。上渡らせ給ひて、御腮結ひ奉らせ給ふ。いとめでたくをかしげにおはしませば、限り無しと見奉らせ給ふ。二の宮又いと美くしうて、差し次がひておはします。今宵は何事も物騒がしくて過ぎぬ。又の日、上渡らせ給ひて、上達部、御前に召し有れば、御簾の外に侍ひ給ふ。「和歌など有るべし」と仰事あれば、權大夫杯執りて、關白殿に參らせ給ひけるに、「蕭蕭しきに、今日の有樣少し書き記るし て有らんなん好かるべき」と、御氣色ありければ、權大夫なん其日の歌の序題書き記るし給ひける。心は祝の心になん。

誰が爲めと何か譬へん君が代は萬づ代を經て盡くる世も無し　權大夫能信

姫松の木高く成れば移ろはぬ雲の上こそ綠なりけれ　關白殿

生び添はる行く末遠き姫松と〔をカ〕木高き蔭と結びつるかな　內大臣殿

わたつみの龜の背中に居る塵の山と成るべき君が御代かな　大夫齊信

多かれど、是れより下は何かはとて止めつ。御音樂あり。人人物被き給ふ。今日は女房白き衣どもに濃き打ちたる、紅梅の唐衣打出で渡したり。映え渡り、をかしう見ゆ。又の日は紅梅に萠葱の唐衣など、三日の程いみじう裝束き盡したり。內裏の御乳母達、大貳の三位、美作の三位、上野など皆參りて、打出で侍ひ給ふ。やがて一品に成らせ給ひて、男叙爵、女叙爵、年官など得させ給ふ。斯くいとめでたくておはしませど、男御子のおはしまさぬを、口惜しく思召す。內の大殿には、女三所、男、人物せさせ給ふを、大姫君、御匣殿と聞ゆるを、いと參らせ奉らまほしう思して奏せさせ給ふ。內裏にも然る御志ありて思召しけれど、中宮に憚り申させ給ひて、さしはへ打出で申させ給はず。宮は然る事も有らば、斯く盛年過ぎ、何事も見苦しき有樣にて、如何でか在らん、籠り居なんと思召しけり。鷹司殿の上、言に出でて諫め聞えさせ給ふ。東宮大夫もいと數多持ち給ひて、思し掛けざりしかども、大姫君は小一條院に、高松殿の女御亡せさせ給ひにしかば、壻取り奉らせ給ひて、院の上とておはします。中姫君は前の一品の宮、一所徒然にておはしませば、迎へ奉らせ給ひて、いみじく敬侍き奉らせ給ひて、其れも內裏にと思召したれど、內大臣殿の御事だに斯く難ければ、如何でか思し寄らん。一品の宮は一條院の皇后宮の御腹におはしませば、內裏の御妹におはします。御女通ひ、女房なども參り通ひて、院に行幸あるにも、渡り合はせ給ひて御對面など有りけり。東宮大夫殿の上は、帥殿の姫君物し給へば、一品の宮には離れさせ給はめ御中にて、姫君をも御子にし奉り給へるなるべし。三條の宮におはします。御手めでたく書かせ給ふ。琴、琵琶彈く人人侍ひて、いとをかしく彈き合せ遊ばせ給ふ。此姫君も、箏の琴いとをかしく彈かせ給ふ。御容もいと貴にをかしげに物し給ふ。一品式部卿の宮の姫君唯だ一所、殿の上の御姉妹の、中務の宮の中姫君の御腹に物せさせ給ふ。是れも內裏に參らせ給ふべしと聞ゆれど、殿の、中宮に、「更にな思し疑はせ給ひそ。他人人は知

り候はず、己れは然る事は如何でか」と申させ給ひけり。内大臣殿の御匣殿も、手書き、歌詠み、漢字をさへ書かせ給ふ。御容もをかしげに、御髪もめでたくなん物せさせ給ひける。やんごとなき人の御事は、申すも片腹痛く、なかなかなれど、昔も今も何を榮にか。中宮は此頃ぞ卅二ばかりにおはします。打聞くには長びさせ給へるやうなれど、いと若く盛りにめでたき御有樣なり。物思召し知り、心深くぞおはしましける。殿などもおはしまさず、我が方樣は何事も盛年過ぎ、打解け怪しき目移しに、華華と持て愛護き、然るべき人添ひ給へらん、若く盛りに、今咲き出づるやうならん人には並びて在らじと、深く思召したり。内裏には、「有るよりはやんごとなくなん思ひ聞えさすべき。若し此思ふ事取り出づる人もやと思ふばかりなり」などぞ申させ給ひける。大方の有樣、持て付け、心にくく立ち雙ぶべき御有樣なめれど、御心に斯くのみ思召すなるべし。宮達の、日に添へてはめでたく美くしうおはします。中宮は持て愛護き聞えさせ給ひながらも、心ゆかず口惜しう思ひ聞えさせ給ひて、心解けず思召したり。内裏の上は、一品の宮を限り無きものに思ひ聞えさせ給へり。宮は二の宮を「荒涼まじ」と人の思ひ申したりしも心苦しくて、人知れず讓る方無くて、哀れと思ひ聞えさせ給へり。斯く御心少しづつは方分かせ給へれど、上も宮も劣らず、何れもいと愛しうし奉らせ給ふ。藤壺の東面は一品の宮、西面は二の宮の御方に裝飾はせ給ふに、一品の宮の御方には、殿上人さながら御裝飾し騒ぐ。二の宮の御方には、后宮の宮司さながら侍ひ、裝飾樣樣にをかしくなん見えける。殿上人を、上は一品の宮、姫宮の御方に分たせ給ふ。内裏には女房を宮分たせ給ふ。心心に一品の宮に參らんなど、大方にもて違はず申す人人ありけり。齋院は村上の十の宮居させ給ひて、年久しく成らせ給ひぬるが、下り居させ給ひめれば、二の宮居させ給ふべしと、帝、后思召し歎かせ給ふこと限り無し。今年ぞ三歳に成らせ給ひける。御髪、程よりも長くおはしましけり。定まらせ給ひなば、え削がせ給ふまじければ、削ぎ奉らせ給ふ。御髪いと長く美くしうおはします。御心いと懷かしうて、内裏をも慕ひ奉らせ給へば、いと哀れに思ひ付き聞え給へり。此事を歎き思召すこと限り無し。まことや、侍從大納言など亡せ給ひての頃、入道大納言、

見るままに人は煙と成り果ててこう火〔劫火カ〕の家は哀れなりけり

と述給ひける。入道大納言とは四條大納言に物し給ふ。世に心にくく覺え給ひける人人、公任の左衛門督と聞えしなり。民部卿、式部卿の宮の源宰相、故太政大臣殿の實成中將などこそは聞えしを、實成の中將は、其頃右兵衛督にて中納言にて物し給ふ。大貳に成り給へり。御子は男子一人、公成の宰相、滋井の左兵衛督とて、容はいと好く、善き上達部にて物し給ふ。女子は中宮權大夫の上にて物し給ふ。今一所物し給ひしは、顯基中納言とて、故源民部卿の子を關白殿の子に爲させ給へる、壻取り給へりしかど、男子一人生み起きて亡せ給ひにしかば、此頃十五六ばかりにて、資綱の少將とておはす。左兵衛督は、滋井に女君一所生ませ給へりけるは、大夫殿の上、子にし奉らせ給ひて、いみじく愛護き聞えさせ給ふ。我は中宮の御乳母子に宮の内侍とて、容など目易かりける人を、いみじう思して、我が許に迎へなどして物し給ひける。后

の御兄弟の權大納言も、上二所亡せ給ひて後、世にも在らじなど思し述給はせけれど、女院の中將の君と聞ゆる人をいみじく思して、男君數多生れ給ひにけり。如何なる世のやうにか、關白殿いと然持て出で顯はれてには有らねど、尼上の御方に侍ふ人を忍びつつ、いみじう思召すと云ふ事用で來て、常に尋常ならで、子など生み給ふと云ふ事聞ゆれど、上の御方に思召さん事を祕ませ給ふなるべし。故中務の宮の御女などぞ聞えさすなりし。齋院下り居させ給ひて、御兄弟の入道兵部卿の宮に對面せさせ給ひて、聞えさせ給ひける。

今日ぞ思ふ君に逢はでや止みなまし八十餘りの年無かりせば

いみじう此上無き程の年月なりかし。いと若くて齋院に成らせ給ふ。兵部卿の宮容殊に成らせ給ひにしかば、如何でかは見奉らせ給はん。御兄弟にぞおはしましける。まことや、殿上の人人も花見、關白殿も御覽じけるに、齋院より、

殘り無く尋ぬなれども注繩の中の花は花にも有らぬなりけり〔玉葉和歌集ニハなるべし〕

と聞えさせ給へりければ、東宮大夫の御返し、

風を甚み先づぞ山邊を尋ねつる注繩結ふ花は散らじと思ひて

此歌の返しは、斯くこそ集には。

殘り無く成りぬる春に散りぬべき花ばかりをば蛾まざらなん

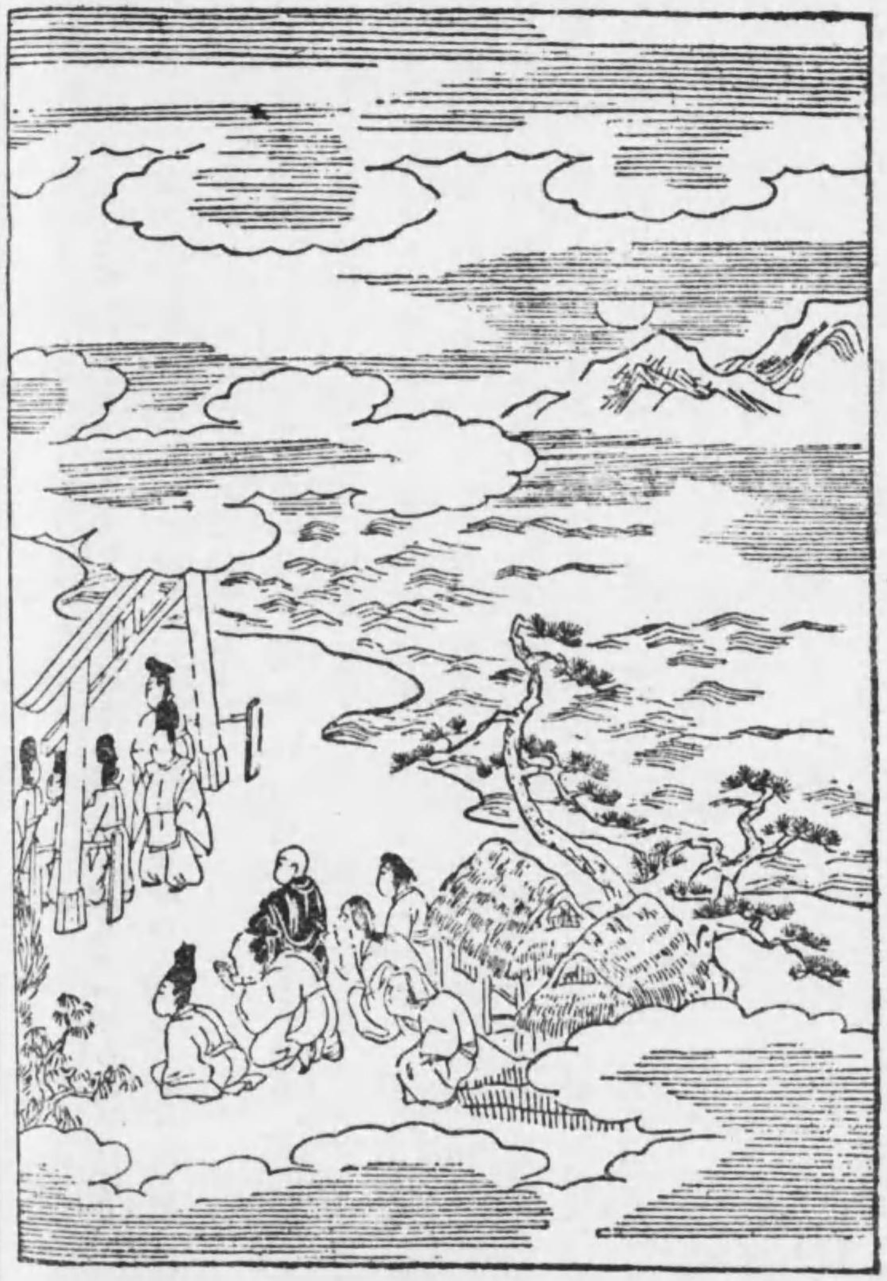
と聞えさせ給へり。民部卿、關白殿に、

いにしへの花見し人は尋ねしを老は春にも忘られにけり〔後拾遺和歌集ニハ知られざりけり〕

入道殿など先づ誘ひ聞えさせ給ひけるを思しけるなるべし。これは法住寺の大臣の二郎なり。殿の御返し、

尋ねんと思ふ心もいにしへの春には有らぬ心地こそすれ

と聞えさせ給ひけり。斯くて長元四年九月廿五日、女院、住吉、石清水に詣でさせ給ふ。是れに侍ふ人は、甲斐甲斐しき事にぞ思ひける。午の刻ばかりに出でさせ給ふ。前に御幣ことごとしくて候はす。「事成りぬ」など、物見る人人嬉しくて、他事無く見る程に、院の人人、濟政朝臣、行任朝臣、章任、韜國、範國、惟任、定任、能通、泰憲、むねなか、のりすけ、良資、成資、是れならぬもいと多く候ふ。誰も誰も目眩きまで裝束きたり。殿上人、隆國の頭中將、經輔の左中辨、實基の中將、實康の右京大夫、師良の兵部大輔、行經の少將、經季の藏人少將、上達部、東宮大夫（頼宗）、權大納言（長家）、左衛門督（師房）、右衛門督（經通）、右兵衛督（朝任）、三位中將（兼頼）、或は直衣、袍、數多は狩衣裝束、云ひ遣る方無きに、織物、打物、錦、繡物など、心心にめでたくをかしく見ゆる程に、讃岐守韜國朝臣の仕うまつりたる御車に奉りておはします。左右の側に、鏡の月を出だして、繪書き、いみじきを造り爲たり。蘇芳の狩衣、袴、同じ色の袙着たる召次と云ふ者十人附きたり。車副、青色の狩衣、袴に、山吹の袙を著て侍ふ。出だし車三つ、東宮の大夫、權大納言、左衛門督奉り給へり。思ひ思ひなる半蔀車の透き通りたるなり。一の車には



尼四人、辨の尼、辨の命婦、左近の命婦、少將の尼君、二の車には、侍從の典侍、越後の辨の乳母、大輔、平少將、武藏、三の車には、江宰相、美濃の小辨、兵衛の內侍、御車の後には宣旨、三位ぞ侍ひける。宣旨は源大納言の御女、三位は內の御乳母の大貳の三位なり。奧寄りての名は、斯う殊の外にてぞ有りける。然れど御車の後にも侍ひ給ふ。其れに由りて惡しき事にもあらずなん。尼は薄鈍、然ての人は皆紅をなん著たりし。日毎にぞ更へさせ給ふ。此出だし車の後に、狩衣姿の人いと多からで、殿、唐車に乘りて侍はせ給ふ。內大臣殿打續き同じ樣にて參らせ給ふ。賀茂河尻と云ふ所にて御船に奉る。御船は丹波守章任が仕うまつらせたりける唐屋形の船に、こまかたを立てて、鏡、沈、紫檀などを、樣樣をかしき樣に盡したり。船掉す人八人、綠衫の狩衣、袴に、黃金して繪を書きたるに、蘇芳の袙を著たり。次次女房の船、邊りの邊りに劣らじと競みたれば、心心見えて、いとをかし。水の上は然らぬだに有るに、いとめでたくをかしう見ゆ。戌亥の刻ばかりに、山崎と云ふ所に着かせ給ひて、物など奉らせて後に、石淸水に上らせ給ふ。鳥居の程にて御車に奉りて、殿上人、手毎に火を點して、御車に添ひたる火影どもの、山隱れいとをかしう見ゆ。先づ御祓へ、次に御幣奉らせ給ふ。次に舞樂、物の音ども、常よりも顯に聞ゆ。曉方に御經供養し奉り給ふ。明尊僧都、御導師にて候ふ。其後船に還らせ給ふ。廿六日に成りて漕ぎ下らせ給ふ程に、人人の姿ども、思ひ思ひに變へて、水の面も所無く浮きたる程に、船に異事なる棚と云ふ物をかしく造りて、八幡の別當元命と云ふ者、御菓子居ゑて參らせたり。繪さへをかしく見ゆ。三島江と云ふ所過ぎさせ給ふ程に、內裏の御使に資房の中將、東宮の御使良賴の少將參り合ひたり。此程に御船止めて、物など參らせて後に、御返事賜ひて參る。何方に付けてもめでたし。心のみ水に映りて、斯かる事をまだ三島江の浪に、打逢ふ事は有らじかしと、をかしく見ゆる程に、良賴の少將は「御返り無し」とて、やがて御供に參る。下らせ給ふ程に、江口と云ふ所に成りて、遊女ども、傘に月を出だし、螺鈿、蒔繪、樣樣に劣らじ負けじとして參りたり。聲ども、葦邊打寄する浪の聲も、江口の云ふべき方無くこそ見えしか。二十七日、津の國に着かせ給ひて、やがてくま河に着かせ給ふ。路の端邊の石の、思ひ思ひに背きたるもをかしう、廿八日の早旦、住吉に着かせ給ふ。殿、內の大殿など、皆御馬にて、えも云はぬ御裝束奉りて侍はせ給ふ。御祓へ、社に詣でさせ給ふ程、左右の物の音なども吹き立てたる、松風琴を調べたる心地してをかし。紀の守良宗、えも云はぬ御假屋を設けて候はす。御幣奉らせ給ふ程に、內裏の御使に定良の少將、九耳を出でて、河船の掉さして參りけん心地、道遠み、草の枕もをかしうぞ思ひ遣らる。此程に、御經供養せさせ給ふ。定基僧都ぞ講師に候ひける。事果てて、是れよりやがて天王寺に參らせ給ふ。人人の姿、有樣、都離れて、人目も愼まぬ旅の姿なれば、いとどえも云はず見ゆ。馬の氣色どもも、波の汀打踏むも殊に見ゆ。國の人人集まり、所も無く見る。折折斯かる物見る都の人だに、所無かりしに、況して道理に見ゆる程に、打混りて聞けば、年老いたる人、涙打拭ひて、「陸奧の國、津路の里などに住まひ爲ましかば、斯かる御幸に遇はましや。此年頃は、難波の浦の何とも覺えず、長柄の橋の長らへても、何にかはと思ひしに、今日こそ、然は年頃送

りし蘆の宿り、柴の扉も、げに住吉に造りてけりと嬉し。繩手の、めでたき事の例には、然は是れをこそ引かめ」と思ひ云ふを聞くも、をかしげにと覺ゆ。岸のまにまに並み立てる松も千年まで、斯かる事を、波風靜かに吹き傳へ奉らなんと覺ゆ。酉の刻ばかりに、天王寺の西の大門に御車留めて、波の際無きに、西日の入り行く折しも、拜ませ給ふ。何の契りにか殘りてと、めでたくこそ。次に御經供養せさせ給ふ。教圓僧都、講師仕うまつりけり。此程に、東宮の御使に、大進隆佐參りたり。二十九日に還らせ給ふ次でに、龜井の水の下に寄らせ給ひて御覽ずる程に思召しける。

濁り無き龜井の水を掬び上げて心の塵を滌ぎつるかな

と仰せられたりけんも、げにいとをかしくこそ。還らせ給ふ濟道に、思ひ思ひに競馬などするさへをかし。難波と云ふ所にて御祓あり。判官代ねなか御使なり。御船に奉りて、河尻に漕かせ給ひて、十月一日午の刻ばかりに雨降りて雷鳴れば、是れは神の喜ばせ給ふと云ふ人人數多あり。二日、天の河と云ふ所に留まらせ給ひて、遊女ども召して、物ども賜はす。人人皆物脫ぎなどす。日打暮るゝ程に、歌詠ませ給ふ。住吉の道に、述懷と云ふ心を左衞門督師房、

母儀仙院、巡禮住吉靈社。關白左相府以下、卿士大夫之祇候者、濟濟焉。或棹花船而取水路、或陸行而備陸行。蓋屬四海之無爲、展多年之舊思也。于時　秋云暮矣、日漸斜焉。向離波忘歸、舊風留頌。過長柄分催興、古橋傳名。遂杖酣醉、各發詠歌。其詞云、

住吉の岸の姫松いろに出でて君が千代とも見ゆる今日かな　關白殿

君が代は長柄の橋の初めより神さびにける住吉の松　內大臣

祈り來し事は一つを住吉の路には心千千に有りけり

多かれど止めつ。紅葉襲の薄樣に書きて、

長らへん世にも忘れじ住の江の岸に並み立つ秋の松風　伊勢大輔

打靡く蘆の末葉に同ひ見ばや斯かる御幸は何時か三〔見〕島江　同じ人

蘆分けて今日は此處にも暮らさばや打過ぎ難き三島江の波　辨の乳母

先づ〔松〕見れば歸らん方も忘られて眞なりけり住吉の岸　小辨

都には待遠なりと思ふらん長らへ〔長柄經〕ぬべき旅の路かな

住吉の岸見えぬまで浪寄れる都の方も忘れぬるかな

住吉の先づ〔松〕も御幸は有りけめど此は珍らしき三〔見〕島江の浦　辨の乳母

橋柱殘らざりせば津の國の知らずながら〔長柄〕や過ぎ果てなまし　小辨

音にのみ聞きしも著く住の江の浪立ち歸る事ぞ物憂き　武藏

留まるべき浦にも有らぬを如何なれば葦分船の漕ぎ歸るらん　伊勢大輔

都出でて秋より冬に成りぬれば久しき旅の心地こそすれ

名に高き君が御幸ぞ住吉のうら〔浦〕珍らしき例なりける　兵衛の内侍

眺めつつ見まくぞ欲しき住の江の松も宜べこそ年の經にけれ　辨の内侍

浅瀬行く細手の纒も珍らしき君が御幸を例には引け　辨の命婦

是れも少しを書くなり。丑の刻ばかりに、御船より下りさせ給ひて上らせ給へば、都には曉方におはしまし着かせ給へば、人の家どもに驚きて、初めの名殘を、日頃忘れ難く思ひければ、門開け騒ぎ、見し曉の朝顔、夜の衣など、反へ様などにて、やがて有る人など有りしこそ、をかしかりしか。日頃の有様、浪の上、蘆間を分けし程を思ひ出でつつ、若き人などは戀ひ合へり。齋院に遂に姫宮定まらせ給ひぬれば、帝、后、思し騒がせ給ふこと限り無し。此頃は、他事無く、二所の御中におはします。十月に御袴着せ奉らせ給ふ。女房、菊紅葉を織り盡したり。其日に成りては、上の御局にて、二所御涙も止めさせ給はず、ゆゆしくなん見えける。日暮らし、二所の御懐におはしまさせ給ふ。御乳母は、雅通の丹波の中將の女の權中納言の君、仰ぎの中納言（忠輔）の女中納言の典侍、左兵衛督の北の方に成りたる宮の内侍なり。年頃侍ひける侍從の君とて、容などいと好くて、内侍なるぞ侍ひける。御車に奉る程、侍從の内侍に抱だかれさせ給ひて「是れは乘らん」とて、下りさせ給はざりければ、「如何がはせん」とて、宮の香の御衣をぞ賜はせて、色許させ給ひて、乘せさせ給ふ。「程程に付けては幸ひ有りけり」と云はれけり。中納言の典侍、丹波の中將の君の侍ふべきにて有りつるを、斯かれば中納言の典侍ぞ、御佩刀など執りて乘り給ふ。他御乳母達は、他車にてぞ參り給ひぬる。三歳にはおはしませど、御髪長く、例の六歳ばかりの子どもにておはします。此程泣かせ給ひて、え下りさせ給はぬこそ、兒には似させ給へりけれ。宮の内侍は左兵衛督迎へ給ひつつ、更に參らせ給はず。斯くて内裏の御乳母の大貳の三位と聞ゆるは、殿の上、鷹司殿の御乳母子なり。其人の子に丹波の守章任と云ふ人の家に、三條なるに出でさせ給へり。榊など挿す程、尋常の事には異りてをかしく見ゆれど、内裏にも宮にも思召し入りて、御使隙も無く奉れり。御有様もゆかしう、いみじく思ひ聞えさせ給へれば、殿上人、上達部、我も我もと先づ參りて後になん、内裏には參りける。上達部も、殿上人も、參りたる人に、「院にや參りたりつる」と問はせ給ふに、「然も候はず」と申すは荒涼まじく、「參りたり」と申す人には、「誰にか逢ひたりつる。何事かおはしましける」など問はせ給ふに、誰も誰も、如何でかは先づ參らんと思はざらん。左衛門督と聞ゆるは、故中務の宮の御子なり。東宮權大夫兼け給へる、齋院の別當に成り給へり。長官には藏人の辨經長、帥の中納言と聞ゆる、道方の子なり。六條左大臣殿の御孫なり。四月には御禊の日、やがて大膳に入らせ給ふ。内裏近くて、女房など參り通ふ。侍など具して、露けき道を分け參るもをかし。御禊の女房の裝束など思ひ遣るべし。扇など、殿上人、心心に盡し競むべし。内裏よりは覺束なき事をのみ思召す。八月三十日に、中宮行啓あり。蘇芳の濃く薄き匂ひなどに、草の香の御衣など奉る。いとをかしう艶めかしく、めでたき御有様なり。日頃の程に、此上無く大人びさせ給ひけるを、哀れに見奉らせ給ふ。二日ばかりおはしまして歸らせ給ふを、

いと飽かず口惜しう思召さる。内裏の御使の、霧を分けて參るも、いとをかしう思召さる。十月、衣更へ五節、臨時の祭など云ひて、心長閑かならで過ぎぬ。一品の宮は明暮目枯れず愛護き奉らせ給ひて、「御對面など有るべし」と有れど、一品に成らせ給ひぬるは忝し。御角髮など結はせ給ひて、上らせ給はんとて止まりぬ。尋常ならず、いみじく持て愛護き聞えさせ給ふ。殿上人朝夕に參り退かで、鞠蹴、小弓射など、をかしく遊び合へり。子の日に山菅を手まさぐりにして、櫛亮兼房、

おぼつかな今日の子の日を山菅の引き違へても祈りつるかな

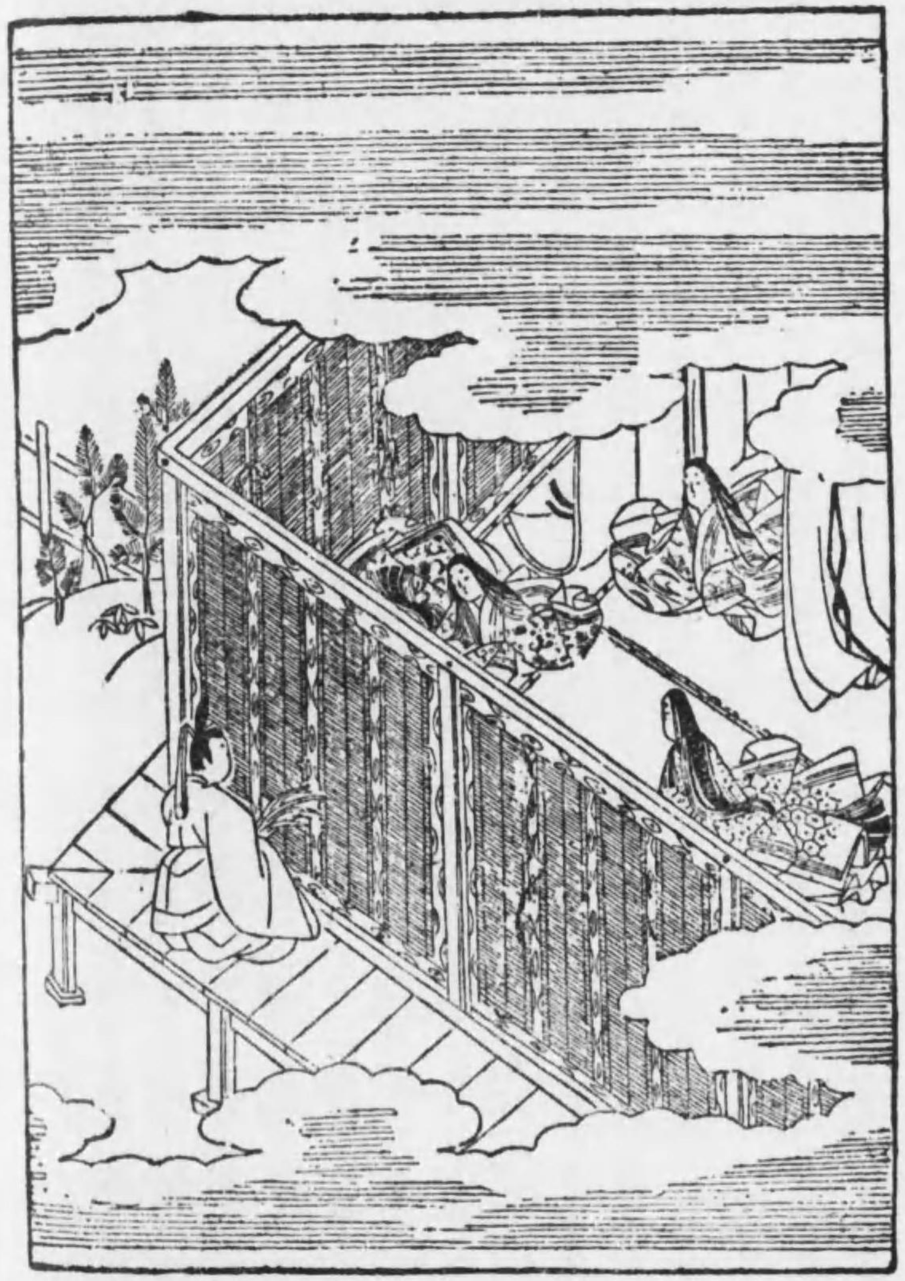
と云へば、出羽の辨、

今よりは松をもおきて山菅の長き例に引きや比べん

など云ひ交はす程もをかし。殿上人など參りて小弓射などするに、大夫、

今日よりは子の日の松と梓弓諸矢に千代を兼けて引かなん

返し忘れにけり。年廻りぬ。例の事騒がしく過ぎぬ。春深く成るままに、齋院渡らせ給ふべき年にて、心殊に思召し準備がせ給ふ。内裏には繪所、作物所にて、女房の裳、唐衣に繪書き、彩色繪など、いみじく爲させ給ふ。宮には宮司承はりて、染殿、打殿に遣はし、思し營ませ給ふ。御禊には八重山吹を捻り重ねて、八重八重の隔てには、青き一重を重ねつつ、幾重とも知らず重ねて押し出だされたり。眞の花の咲きたる夕映と見えて、いみじくをかし。祭の日は反對の色なり。濃き二人、薄き二人、やがて同じ色の上衣、唐衣なり。紅の濃き、薄き、紫、山吹、青き、蘇芳など、皆二人づつなり。歸さには、斑濃にて、袴、上衣も、裳、唐衣も、羅にて、紋には黄金をし、繡物どもをし、心心に繪など書きたれば、涼しげに艶めかしう、をかし。上達部も、殿、内の大殿を初め奉りておはしませば、いみじうめでたし。上達部、殿上人殘る無し。日毎にいみじき見物にてなん有りける。此程過ぎぬれば、長閑やかにて、内裏邊りも徒然に思召さるれば、女院入らせ給へり。上の御局におはしまして、女房ぞ弘微殿に局して下り上りける。珍らしき細殿住みもをかし。東宮、一の宮は、此院におはしませば、入らせ給ひて、東宮の御方におはします。一品の宮は此宮の一つが御弟におはしませば、世の人まだきより、「いみじく善き御間なり」と聞えさするも、げに然もやおはしまさん。女院の御方に、一品の宮渡らせ給ふ。幼なくおはしませば、晝も渡らせ給ふ。下の御局より、關白殿など具し奉らせ給ひて、上らせ奉らせ給ふ。撫子の織物の單襲、菖蒲の小掛奉りたる、華華と、盛りに櫻の咲きこぼれたる心地して、氣高く、匂ひ鶸鶸しく、今めかしうをかしげなる御有樣、類ひ無し。今年ぞ九つに成らせ給ひける。いみじくめでたしと見奉らせ給ふ。院も斯かる御有樣をば、まだ御覽じ習はせ給はず。男宮をのみ習ひ申させ給へるに、哀れに珍らしう愛くしと見奉らせ給ふ。齋院は、また懷かしうをかしげに、らうたげに、匂ひやかに、撫子の花を見る心地ぞ爲させ給へる。美作の三位など、「また、貴き人あまた見奉れど、此御前達の樣なるはおはしまざりき。一條院の女二の宮、故女院におはしましかば、見奉りし、其れぞいとをかしげにおはしましかども、此二所の御樣には、えおはし



まさず」など、揖焉に褒め申し給ふ樣、誇りかに愛敬づき給へり。大宮夜さり上らせ給ひて、中の戸開けて御對面ある程、いと安らかに、疎からず、めでたき御間なり。貴き人の御間は、耻ぢ交はし申させ給ひて、つゆ氣はひも漏さじと愼み、女房なども心したり。内裏、東宮渡りおはしますも、いとめでたしともの疎かなり。一月ばかりおはしまして、出でさせ給ひぬ。東宮には、一品の宮御腹に、姫宮二所おはしませども、其れは疎くて見奉らせ給ふこと無し。今年も十月に齋院に行啓あり。此度は五六日ばかりおはします。十月廿餘日庚申なるに、上達部、殿上人參り、音樂の方の人も、詩の道の人人も召し集め、殘る無く參りて、歌詠み、音樂など有り。下臈も其道の人は交りたり。權大納言、

萬づ代に色も變らぬ榊葉の散るもみぢ葉に木綿や掛けまし

色寒み枝にも葉にも霜降りて有明の月を照す白菊

左衞門督、（師房）

今宵しも隈無く照す月影は殘りの菊を見よとなるべし

多かれど書かず。女房、

月影に照りわたりたる白菊は曆きて植ゑし驗なりけり

多かれど止めつ。月明くをかしき夜、權大夫口ずさびに、

榊のみこそ殊に見えけれ

と述給へば、女房、

神垣は月も紅葉も有りけれど

など聞えさせ交はしけり。心長閑かにもおはしますべけれど、飽かで歸らせ給ふ。斯かる御有樣は苦しげなりやとぞ。

歌合

鷹司殿の上、七十賀せさせ給ふ。女院、中宮など、例の渡らせ給ふ。院は曉に渡らせ給ひぬ。宮は晝内裏より出でさせ給ふ。儀式、有樣、前前舊りにし事なれど、猶いとめでたし。御輿寄せて奉る程など、内裏の御前、上の御局の簾取り除けて御覽ず。弘徽殿、藤壺の間のいと狹きに、上達部、殿上人立ち混み、近衞司、胡籙負ひて立ち休らひたり。名對面の程など、いといとめでたし。内大臣殿參らせ給ひて、「御迎に參れと候ひつるなり、大臣は、彼處の事ども御口入れ候ふ。事繁くて」など申させ給ふ。いと物物しく、綺羅らかなる御有樣なり。春宮大夫、權大夫、權大納言など、御兄弟の殿ばら、皆參り給へり。宮は櫻、朋葱の五重の御衣を、皆織物にて、五つばかり奉りて、赤色の唐の御衣、地摺の御裳奉りて、めでたき御有樣にて、御もてなし、用意など、重りかに耻かしげにおはします。三十五六に成らせ給へば、思ひ遣りは大人びて

覺えさせ給へど、二十ばかりとぞ見えさせ給ふ。下臈などだに、善き人は長びて見ゆる事も無し。況して盛年過ぎなど爲させ給ふべきにはあらず。御髮は御衣に五六寸ばかり足らせ給はで、色に、淨潔に、嬌嬌として、隙無く掛からせ給へり。女房はかねて例の陣に出で居にけり。美作三位御髮上げ奉り給ひて、やがて御輿に侍ひ給ふ。女房は二つ色の濃き、薄き、蒲萄染の織物の上衣、紅梅の龍紋の唐衣、萠葱の裳の腰なり。例の事なれば、釆女馬乘りなど、儀式、有樣、前前の同じ事なり。入らせ給ふ程の亂聲など、目慣れたる事も無く、めでたくいみじきに、鷹司殿の上は、然ばかり御覽じ盡してしかども、また今日も御涙こぼれさせ給ふ。御堂供養に四所渡り合はせ給ふ行幸行啓ありし折に、準らふべくも思はくは有らねども、儀式、有樣、異る事無くめでたければ、斯く思召すにこそ。昔の御事をも思召し出づべし。舞は殿の若君せさせ給ふべしと有りしかど、然も有らで、諸大夫の子どもぞ舞ひける。其日の儀式、有樣、女の知る事ならねば記るさず。院の女房は、皆薄色に紫の唐衣ぞ著せさせ給へる。尼の御裝束せさせ給へるも、いと哀れにめでたく見えさせ給ふ。夜さりは皆樣樣に歸らせ給ひぬ。樣樣の御贈物など、いとめでたし。まことや、又の日は、昨日の有樣、儀式を、淸涼殿の東面にて爲させて御覽ず。一品の宮の、所狹かりなんとて、出でさせ給はず成りしかば、御覽ぜさせ給はんとて、爲させ給ふなるべし。樂など同じく爲させて御覽ず。東宮も渡りて御覽ず。中宮の女房、上の御局の簾、長長と上げ渡して押し出でつつ、居並みたる前より、東宮上らせ給ふ。いと物物しく、めでたき御有樣なり。中宮、一品の宮は、二間にて御覽ず。今日は紅どもに、葡萄染の織物奉りたる、いとめでたし。一品の宮は紅梅の匂ひに、濃き打ちたる梅の織物の上衣、萠葱の小袿など奉りたる、華華と氣高く美くしう、云はん方無き御有樣なり。內裏の思召したる御氣色疎かならず。殿より初めて參らせ給へり。昨日は遙かなる庭にて、分明にも御覽ぜざりしを、今日は御前間近くて、舞の有樣、物の音なども、勝りてなん有りける。夜更けてぞ、春宮も歸らせ給ひける。事果てて皆人人退かで給ふ。中宮は、やかで上の御局におはします。年も殘り無くて、御佛名や何やと、物騷がしうて過ぎぬ。まことや、御賀の歌は、輔親、赤染、出羽。經任の頭の辨の母にて物し給ふ佐理の大貳の女ぞ書き給ひける。赤染、正月朔日臨時客したる所、

紫の袖を列ねて來たるかな春來る〔後拾遺和歌集ニハ立つ〕事は是れぞ嬉しき

七月七日、

天の河早く渡りね彥星の夜さへ更けなば眠る程も有らじ

輔親、

新しき春の初めに來る人は三年の友と思ふなるべし

子の日、

年毎の春の初めに引く松の積れる數は君ぞ數へん

數數には煩さきやうなれば、何かはとて止めつ。年廻りめれば、朔日の有樣など、例の事なり。院には、行

幸、行啓など、いとめでたく待ち付け奉らせ給ひて、先づ御輿寄せぬ程も、疊り無き御前に、長長と陣引きて、中門に御輿寄せて、渡殿より入らせ給ふ程、いとめでたし。頭、御佩刀執りて内侍に傳ふ。内裏の女房かねて參り居て、御饌參りなど、例の儀式なり。拜し奉らせ給ふ程など、見る人、常の事なれど、涙こぼれて、めでたくいみじ。女房えも云はず裝束きて、押し凝りて侍ふ。打出づる事は無し。中宮には大饗ありて、拜禮などいとめでたし。正月二十日の程に内宴あるべければ、他事無く、藏人の有樣、容の事を、人に勝れてと思召す。御給仕は齋院の御乳母の中納言の典侍仕まつり給ふべし。藏人十人を、内裏に四人、院、東宮、中宮、二人づつ出ださせ給ふ。院には容好き人多くて、内裏、東宮にも、二人づつ奉らんと思しけれど、煩ふ由申して參らざりければ、然しも思召さざりける劣りの人をぞ爲させ給ひける。仁壽殿に御裝飾せさせ給ひて、院、中宮の御局して參らせ給へり。今日も打出でなどは爲ず。此方彼方いみじく裝束きて侍ふ。藏人は、院のは唐綾を泥、紺青して、紋を染めて四つ、錦の上衣なり。中宮のは色色の二重紋に、一重は打ちて、其れも赤地の唐菱なる錦の上衣なり。扇、裙帶、領巾など、いみじく心を盡して、當り給へる人、競み給へり。院のは權大納言、中宮のは左衛門督ぞ爲給へる。上達部など、今日は皆青色著給へり。儀式、有樣など、いと珍らしうをかしき事の樣なり。三月には、また賭弓あれば、前方、後方と、事ども分きて、前方は賀茂に參り、今一方は北野に詣づ。其頃の頭は、故民部卿の御子、隆國の頭中將、今一人は小野の宮の御孫經任の辨、齊信の民部卿の御子にし給ふ。才など有りて、麗はしくぞ物し給ひける。詩作り歌詠みなど、古への人に耻ぢずぞ物し給ひける。賭弓にも、宮上らせさせ給ふ。權大納言、左衛門督などの射給ふ程は、方方に心寄せの人念じけり。賭物は中宮せさせ給ふ。權大納言、顯基の宰相中將は、一品の宮の別當、左衛門督、公成の宰相は齋院の別當に物し給ひけり。然れば一品の宮の女房も、齋院のも念じ聞ゆるに、前方勝ちたれば、人人賀茂に詣でて、歸さに齋院に參りて、音樂などして出づる程に、追ひて車に、引き連れて歸るを見れば梓弓諸矢はいとど嬉しかりける

隆國の頭中將、

嬉しきは諸矢のみかは梓弓君も方引く心ありけり

歸り參りて、内裏にて鬼の間の方に侍へば、御前に召して、有樣など問はせ給ふに、「歸さに、院に參りて候ひつれば、めでたき手して、斯く書きてなん候ひつる」と奏す。返事など問はせ給ひて、をかしと思召したりけり。三月三十日方に、いと垂房長く花面白き藤を奉らせて、鷹司殿より、

藤壺の花はことわり劣らじと源さへも開けたるかな

御返し、宮、

藤の花神さびにけるみなもとに匂ひ劣れる末ぞ折り憂き

唐の紙に、いと今めかしくをかしく書かせ給へりければ、殿の上、いみじくめで奉らせ給ひけり。數多おはしましが、御容、御髮、何れとも無く美くし。御手も一所惡ろきおはしまさざりけるが、前の世の然るべ

きにておはしましけるにこそ。三月晦日方に、藤壺の藤の花、えも云はず面白く塀に咲き掛かりて、御溝水を遣り水に掛り分けて流させ給へるに、咲き掛かりたる、いとをかし。此花の宴せさせ給ふ。上達部、殿上人參りて御音樂あり。春通の辨琵琶、左衛門佐のり季和琴など彈き合はせ給ふ。大夫、權大夫など物誦んじ、歌うたひなど遊び給ふ。女房、

紫の雲立ち紛ふ藤の花如何に折らまし色も分かれず

夏にだに契りを掛けぬ花ならば如何にか爲まし春の暮るるを

女房、殿上人など多かれど止めつ。四月、祭など物騒がしくて過ぎぬ。祭の車を小一條院の下部打ちたりなど云ふこと有りて、院の人、責められさせ給ひて、撿非違使ども居並みて、人も易くも歩りかず、いみじき事どもに世の人申し給へり。日頃經れど、井など塞ぎて、いといみじく忝き事と、世の人も申し思へり。院の下部の知りたりける下種の、出だし車に附きたりけるを、戯ぶれて打ちたりけるを、車打ちたりと聞し召したりけるとぞ。小一條院には、故左大臣殿の女御の御腹に、男二人、女一所を、一の宮は中務の宮なり、濟政の播磨の守の壻にて物し給ふ。二の宮は三井寺に大僧正愛護き聞え給ふこと限り無し。高松殿の御腹の若宮は亡せ給ひて、女宮一所ぞおはしますは、高松殿の上の、御傍放たず愛護き聞えさせ給ふ。東宮大夫殿の姫君の御腹にも、男女數多おはします。高松殿に侍ひける人を思召して、片時も御覽ぜではえおはしまさで、西の院と云ふ所に居ゑさせ給ひて、男女數多生ませさせ給へりける。下野の守なりける人の女なりける、瑠璃の女御と世の人聞ゆめり。童名なるべし。昔も今も斯かる幸ひ人絶え給はぬにこそ。五月十餘日ばかりにぞ、如何に思召しけるにか、撿非違使など立つべき官旨下りける。院は世の中憂しと思召したる、道理なり。内大臣殿は此院の御妹の女二の宮をぞ上にておはします。御心寄せありて、いとほしく、此程も思し歎かせ給ひけり。御女參らせ奉らんとは思し述給へど、中宮にも御氣色好くて參らせ給ひて、宮達を翫び聞えさせ給ふ。院の高陽院殿に渡らせ給ひておはします。殿の上に御對面など有り。殿の御前は如何ならん清淨を盡しても御覽ぜさせんと思召したり。泉の上の渡殿に、四條中納言參り給へるに、出羽の辨對面したるに、殿、内より御火取持ちておはしまして、薫香せさせ給ひて、添ひおはします。なかなかいと愼ましく、物聞え給ふも打出でにくく覺えけり。繪に書きたる心地す。其頃伊豫の中納言の君、龍の音を聞きて、

湧きかへり岩間を分くる龍の絲の亂れて落つる音高きかな

出羽の辨、

解くれども沫にも有らぬ龍の絲を常に寄〔綻〕りても見まほしきかな

など、はかなき事を云ひつつ明し暮すも、をかしくなん有りける。八月晦日に、殿上の人人、嶮峨野に花見に行きたるに、中宮の臺盤所に、女郎花の小さき枝を、扇の端を引き破りて挿したるに、書き付け侍る。東宮權大夫、

一枝の花の匂ひも有るものを野邊の錦を思ひ遣らなん

返し、御前の撫子を折りて、源少將、

百敷の花や劣れる霧分けて立ち交るらん野邊の錦に

新嘗會の日、雨の降り暮らすに、源少將、

日影も見えず曇る今日かな

江侍從、

天照す豐の明りと思へども

と云へりけり。一條院の一品の宮をば、入道一品の宮と申す。皇太后宮のをば、東宮の一品の宮と聞えさす。當代のと三人おはします。齋院は二品におはしませど、年官年爵賜はらせ給ふ。春宮の一の宮は、內裏に御子もおはしまさねば、疑ひ無き儲の君と思ひ申したり。越後の辨は此宮の御乳母にて侍ふ。三月に、藤民部卿亡せ給ひぬ。口惜しき事に朝廷より初めて思召す。大納言に左衛門督成り給ひぬ。源大納言と聞ゆ。內大臣殿の太郎三位中將、二郎信基、三郎信長と聞ゆる。二所ながら侍從にて物し給ふ。四郎は法師にて、長谷の僧都に奉り給へれば、いみじきものに愛護き聞え給ふ。殿には御子のおはしまさぬ事を、口惜しなども世の常なり。上の御兄弟の源大納言、內大臣殿の中將をぞ子にし奉らせ給ひける。若君一所こそ十ばかりにておはしますめれ。鷹司殿の上ぞ具し奉らせ給へる。御容美くしう愛敬づき、ふくらかに匂はせ給へり。故式部卿の宮の左兵衛督の女の腹なりけり。殿に二所候ひけるを、姉君は則理の但馬守の妻にておはす。一所は若君生み奉り給ひてければ、やがて參り給はず。故中務の宮の御物の怪いと强くて、妨げ聞えさせ給へば、おはします事は絶えたり。まことや、女院は無量壽院の傍らに、御堂建てさせ給へり。築土築き渡し籠めて、いみじくめでたく造らせ給へり。沈、紫檀を高欄にし、蒔繪、螺鈿、櫛の箱などのやうに爲させ給へり。柱繪なども世の常ならず、釘打つ所には、瑠璃を釘の形に伏せなど、萬づを盡したり。年毎の九月には、御念佛せさせ給ふ。女房えも云はず裝束きて打出でたり。僧の裝束やがて爲させ給ひて賜はす。小さき僧どもの續るもいと美くし。上達部、殿上人殘る無く參り給ふ。折折の功德作らせ給ふ。いとめでたき御有樣なり。長元八年五月、三十講果てて、關白殿、歌合せさせ給ふ。殿上の人人分かたせ給ふ。左方は藏人頭經輔、濟政、資業、良賴の春宮亮、良經の左馬頭、行經の少將、中宮大進義通、經季の少將、經長の辨、經成の少納言、信長の侍從、龍國、資任、憲房、經平、實綱、藏人は俊經、季通、貞章なり。右方は實經朝臣、兼房の中宮亮、資通の辨、俊家の中將、通基の四位侍從、師經の內藏頭、行任、擧周、爲善、國成、良宗の右衛門佐、資綱の少將、經家の少納言、經季の左衛門佐、三河守經信、定季信濃權守、藏人は義清、家任、賴家と書かせ給ひて、「題は他所求むべきならず、唯だ此間近く見ゆる事をこそは」とて、月、五月雨、池水、菖蒲、螢火、瞿麥、郭公、照射、「是れのみや外の思ひ遣る事は有らめ」とて、戀と書かせ給ひて、各方方に、左には經輔頭辨、右には良宗藏人右衛門佐にぞ召して賜はせたりし。頭辨は民部卿の服にて籠り居給へればなるべし。樣樣に競みたる程に、同じ月の九日に、殿上の童を方分たせ給へ

り。左には殿の若君、行任が子、範國が子、章任が子、右には家經が子、範永が子、頼國が子分たせ給へり。是れは御賀に舞せし人の子なり。右少し事違ひたるやうなり。十二日に成りて、上達部の然るべく若やかなるを分たせ給ひたり。左には兼頼の宰相中將、公成の左兵衛督、右には顯基の宰相中將、隆國の右兵衛督と述給はす。何時しか如何がと思ひ申す。申の刻ばかりに、左の方の人人、色色の羅を屋形に張りて、黄金の常夏の花押したる船、二つに乘りて、笛氣色ばかり吹きすさびて、伊勢の海歌ひて、池の心に任せて、棹さして參るを見れば、二藍の直衣、指貫に、紅の打ちたる白き單衣をぞ著たる。藏人は織物の指貫、青色の水に映りたる影をかし。池の上の反橋に船を寄する程に、上達部二人立ちて向ひて、然るべき人人少しばかりを具して、參り居たる後に、藏人俊經二藍の美くしき取りて、擂げ敷くを見れば、紫の浮線綾に、青き象眼を付けて、伊勢海と云ふ催馬樂を、蘆手に繡ひたり。鏡の水、黄金の砂子など爲たる洲濱を、季通、貞章取りて、打敷の上に居う。黄金の透箱を彫り物に爲たる、黄金の机に居ゑたり。員指の物は、黄金の洲濱に沈の石立てて、鏡の水など爲たる上に、尾上の松を植ゑ移すを數に爲たり。童、員指と思しくて居たり。斯かる程に、右人間近くなる程に、車の音續け、先追ふ。眞に山川の瀧つ瀨の音よりも騒に喧騒りて參る。殊更にすると聞えてをかし。劣らず爲んと思ひし事の違ひぬるが口惜しきなるべし。先づ然るべき人人は、俊家の中將、常夏の出だし打衣、二藍の直衣、青色の織物の指貫、通基の四位侍從、二藍の直衣、青色の織物の指貫、濃き打衣、實綱の少將、二藍の直衣、指貫に、青き織物の單衣、藏人二人、織物の指貫、青色にて、黄金の洲濱に、沈の鑼結ひたる、黄金の常夏の草むらを昇きたり。歌は何に書きたるぞなど、心にくき程に、早う花に蝶のいみじうをかしきが十ばかり居たるなりけり。員指の物は、内裏の御前と思しくて、竹の臺より抽き出でたるを、數には爲たり。鏡の水、沉の石立てて、樣樣の草を下草にて、色色の裂帛して造りたるも、殊更と見なせばをかし。斯くて藏人取りて、員指には爲たり。左右競みて方分きける程に、殿の若君左に寄り給ひにければ、競まんもなかなかなりとて、右は唯だ靜穩なり。左の講師左中辨經長、右の講師右中辨資通參りて居たり。三位輔親をぞ此歌の勝負定むべき人にて召したる。歌の善し惡しは如何が定むらん。神さびて居たる面持、氣色、繪に書きたる心地して、是れより外は誰をかはと見えたり。暗う成れば、火など點して、左行經の少將寄りて、透箱を開けて、彫り物の骨に象眼の紙を張りて、題の心を樣樣に書きたる扇を一つづつに取りて、講師經長の辨に取らす。歌は内裏の御乳母宰相の典侍書きたり。右には兼房の右衛門佐、蝶居たる常夏の枝を折りて、資通に取らす。方人近く參り寄りて居たり。左は北、右は南にぞ在りける。講する程、限り無くをかし。夜やうやう更けて、月の澄み昇りたる程、池の心清さも、歌の題の心さへ協ひてをかし。殿の女房の裝束は、羅を撫子にて、色色にて捻り重ねたり。歌は煩さきやうに人の思へれど、斯く云ひ云ひて書かざらんも本意無ければなん。

一番　左勝　月

夏の夜も涼しかりけり月影は庭白栲の霜と見えつつ

四位少將行經

右　赤染衛門

宿からぞ月の光も勝りける夜〔世〕の曇り無く澄めばなりけり

二番　左勝　五月雨　相摸

五月雨に御津の御牧の眞菰草刈り干す隙も有らじとぞ思ふ

右　東宮學士義忠朝臣

五月雨の空を眺むる長閑けさは千代を兼ねたる心地こそすれ

三番　左　池水　式部大輔資業朝臣

千代を經て澄〔住〕むべき水を寒きれつつ池の心に任せたるかな

右　少納言經家

年を經て住〔澄〕むべき君が宿なれば池の水さへ濁らざりけり

寒きるる惡ろしとて右勝。

四番　左　菖蒲　左馬良頼朝臣

あやめ草尋ねてぞ引く眞菰刈る淀の邊りの深き沼まで

右　東宮大夫頼宗

昔より盡きせぬものは菖蒲草深き淀野に引けばなりけり

五番　左勝　瞿麥　四條中納言定頼

床夏の匂へる庭は唐國に織れる錦も如かじとぞ思ふ

右　赤染

庭の面に唐の錦を敷くものは猶床夏の花にざりける

猶床夏と云ふこと惡ろしとて、右負けぬ。

六番　左持　郭公　義忠朝臣

啼かめ夜も啼く夜も更に郭公待つとて安き睡やは寢らるる

右　赤染

夜もすがら待ちつるものを郭公またとも啼かで過ぎぬなるかな

七番　左勝　螢火　左馬頭良經朝臣

澤水に空なる星の映るかと見ゆるは夜はの螢なりけり

右　赤染

名に立てる五月の闇も無かりけり澤の螢の紛ふ光に

八番　左勝　照射　式部少輔公資

五月闇天つ星だに見えぬ夜に照射のみこそ山に見えけれ　赤染

右

五月闇火串に掛くる燈火の後ろめたくや鹿は見るらん

右歌善しとて、輔親其方に心ある程に、左人人「燈火とは、例の人の宿に點すをこそ云へ、更に斯からず」と申すに、「古き歌に點す火はと詠みたり。然らねど、火串に斯くと云ひつれば、他燈火を然云ふやう無し」と申せば、輔親も、眞に歌は心ばへあり、をかしけれど、斯ばかりにても然か云はれめればとて、右負くるに爲す。

能因法師

九番　左　祝　　資房の少將

君が代は白雲掛かる筑波嶺の峰の續きの海と成るまで

右勝

思ひ遣れ八十氏人の君が爲め一つ心に祈る祈りを

左歌、山の海と成り、海の山と成りけんもあい無し。海は海、山は山にて有らんこそ善からめとて。

能因法師

十番　左　戀

黑髮の色も變らぬ戀すとてつれなき人に我れぞ老いぬる

右勝　　春宮大夫頼宗

逢ふまでとせめて命の惜しければ戀こそ人の命なりけれ

夜いみじく更け行き、月の影涼しく、物長閑やかに見なされて、今も昔も斯かる類ひ有らんやと覺ゆる程に、是れ彼れ然るべき歌ども詠じて、御管樂あるに、笛竹の夜更くる程も、いとをかしきに、左方勝ちわざと思しくて、沉、紫檀の、貝摺り、鏡の水遣りなど爲たる破籠ども參らせたり。輔親には、裝束一具被けさせ給ふ。次に上達部の出で給ふ程に、內大臣殿、大納言三人に御馬奉らせ給ふ。常の事なれど、今宵は常よりも勝りてをかしく見ゆるに、事の有樣、千代を添へまほしかりし夜の明け行きしこそ、飽かず理無かりしか。殿の若君十一にて御元服せさせ給ふ。いみじうふくらかに愛敬づき、匂ひやかなる御有樣なり。程も無く少將に成らせ給ひて、臨時祭の舞人せさせ給ふ。內大臣殿の三郎、兵衞佐と聞えさせ給ふと舞はせ給ふ。いと美くしう物せさせ給ふ。春宮大夫殿には、太郎兼賴の宰相中將、二郎俊家の中將、三郎能長の侍從など、いと數多異御腹にも物し給ふ。但馬守基貞とて物し給ふ十六なるを、忽ちに成させ給へるなりけり。年廻りぬれば、少將殿春日の使せさせ給ふ。殿上人、我も我もと殘る無く、えも云はぬ狩衣姿、劣らじと競み裝束きたり。いとめでたくて渡らせ給ふを、殿は限り無しと思召したり。殿ばらもいみじく愛くしがり、愛で聞えさせ給ふ。鷹司殿の上いと愛しうし奉らせ給ふ。常に中宮に、上は參らせ給ふ。七十に餘らせ給へど、御髮はゆらゆらと總やかにておはしますも、いとめでたくおはしましける御髮なればなるべし。內裏に一品の宮の御裳著の事、思召し準備がせ給ふ。御調度は、藏人義清に仰せ事賜はせて、いみじく尋常

ならずと思したり。御屏風の繪、此國の、唐の、繪所に、繪師召して、いみじく爲させ給ふ。女房の裝束、裳、唐衣、上衣、童女の裝束など、人人當り、三日が程、大人三十人、童女六人が裝束を、色色樣樣に、尋常ならずと思召す。明くれば、先づ渡らせ給ふ。御調度召して、且つ御覽じ、其事、彼の事など、他事無く思し準備がせ給ふ。貴に氣高くおはします御心にも、此道は限り無き御事にこそ。經任の辨、宰相に成りて、俊家の中將、頭に成り給ひぬ。御心に思召しけるは、限り有る位なりとも、此頃東宮に讓り聞えて、一品の宮をやがて參らせ奉り給はんと思召す。世の人は若宮にぞ參らせ奉り給はんと思ひ申ししかど、如何に思召すにか、東宮にと思召す。然りとて、前の一品の宮、疎かに思ひ參らせ給ふべきにあらず。唯だ見る世に、今少し動き無く見奉らんと思ふなりなど、人知れず御文通ひけり。斯かれど、內裏には、內大臣の御匣殿參らせ給ふべしと申すは、如何なる事にか。內裏には水聞し召し、面痩せさせ給ふなどぞ人人申すめる。如何なる御事にかと、思し歎かせ給ふに、三月晦日よりは、わざと苦しう爲させ給へば、中宮も上らせ給ひて、上の御局におはします。御裳著の延びぬれば、いと口惜しき事に思召す。然るべき人人は、如何なる事にかと、人知れず思ひ歎き給ふ。女院も入らせ給ひぬ。四月朔日に成れば、わざと苦しうせさせ給へば、御修法數多始めさせ給ふ。御祈り殘る事無し。殿ばらも退かでさせ給ふ折無く侍はせ給ふ。御物の怪ども移りて喧騷る樣、いと恐ろし。例の堀河左大臣殿、女御殿具し給ひて出でおはし、然らぬ者、樣樣名告り、いと苦しき御心地に添へても、一品の宮の御裳著の事延引まりぬるを、口惜しく思召して、七日程苦しく爲させ給ひて、「我が今日斯くて有るべきものと思ひけんや」と仰せらるるは、御裳奉らましものをなど、思召すなるべし。今年ぞ廿九に成らせ給へば、まだいと盛りに惜しき御程なり。院も中宮も、如何に如何にと思召す。殿、內大臣殿、然らぬ殿ばらも、片時退かで給ふ事無く侍ひ給ふ。御祈り、世の中搖すり滿ちたり。如何がおはしまさんと、いとこそ恐ろしけれ。

著るは佗びしと歎く女房

內裏の御惱み、日を經て重らせ給ひて、四月十五日ばかりより、日毎に絕え入らせ給ふ。女院、中宮涙に昏れておはします。三位達も、いと睦まじき人なれば、一つにておはします。終に四月十七日の夕方崩せさせ給ひぬれば、二所ながら、院も宮も同じ樣にておはしませば、聞えさせ煩ひて、斯くてのみは如何でかと、御兄弟の殿ばらぞ、下の御局に、御衣に押し括みて率て下ろし奉らせ給ふ。今暫しだに長閑かに見奉らせ給ふべきを、御心にも有らず、いみじう思し惑はせ給ふ。御聲洩り聞えつつ、いといみじ。世の中搖すり滿ちたる心地するに、確かに聞えさする人も無けれど、一品の宮の幼なげに泣かせ給ふも、いみじう哀れなり。何時の間にか、東宮の御方には、除目ありて、頭、五位藏人、六位藏人など成り、萬づに、皆獅子、狛犬、日記の御厨子、御劍など渡り、引き代へたる有樣、夢の心地なんしける。例の作法に、御乳母子ど

も、章任の伊豫の守、實綱、憲房、義通など仕うまつる心地ども思ひ遣るべし。兼房の中宮の亮、云ひ續けて泣く聲のおどろおどろしきも哀れなり。昔は斯く位にて崩せさせ給ふは、正無き事多く、所狹かりけれど、今の世は、然る殿しき事も無し。關白殿も同じ殿におはしまし、今の上も如何でかは情無くもおはしまさん。院も、宮も、唯だ亡き人にておはします。二十一日の夕さり、京極殿の東の對におはしまして、其處にて御念佛など有るべければ、曉に中宮、一品の宮も、北の政所のおはします鷹司殿に出でさせ給ふ。位ながらの御有樣は、所狹くいみじかるべければ、太上天皇に成し奉らせ給ひてけり。殿は今の內裏の御事ども行はせ給へば、內大殿、他殿ばらぞ添ひ奉らせ給ひて出でさせ給ふ。曉の月の隈無きに、物覺えぬ心の中に覺えける。出羽の辨、

めぐり合はん期みも無くて出づべしと思ひ掛けきや有明の月

女院も、京極殿に出でさせ給ひぬ。院も、宮も、おはしますやうにも無く、沈み入らせ給へり。鷹司殿の上は、待ち付け聞えさせ給ひて、萬づに慰め聞えさせ給へど「嫗捨」にのみぞ書き盡すべくもあらず。關白殿、內大殿、殿ばらより初め、泣き戀ひ聞え給はぬ人無し。殿の內には、初めて、世の光を取り出でさせ給ひしより初め、御心ばへのめでたくおはしまして御年の程惜しく、いみじく夢かと思し惑ふ。女院の御心の中に、生れさせ給ひし程、殿の思し喜びしより、今日今までの御心など、萬づをば申すべきにもあらず、唯だ戀しう悲しういみじう思召し惑はせ給ふ。中宮も露の御湯をだに聞し召さで日頃に成らせ給ひぬるを、また如何にと、女房などは持て騷ぎ聞えさす。御葬送の程近く成るにも、「悲しながらも、おはします程は、然ても在るを、今はと聞き參らせんこそ、いみじう、いとど」など宣はせて、宣旨の君、

何時かまた空しき骸のからだにも殘り無くとも成らんとすらん

出羽の辨、

知らぬかな君が煙を見るまでに數ならぬ身も在らんものとは

また、

今はとて煙と成らん夕こそ悲しきことの限りなるらめ

一品の宮などのおはしますべき土の殿造る音を聞きて、出雲、

何時しかと三つばと思ひしを思ひも掛けぬ殿造りかな

返し、

なかなかに定め無き世は飛鳥川玉造りなる宿と成らじや

女院の御堂行はせ給ひけるに、柳の造りたるを、內裏に參らせ給へりければ、枝は眞にて有りければ、清涼殿の壺に植ゑさせ給へりけるが、生ひ出でたりけるを聞きて、宮の宣旨、

憂きふしと思ひながらも生ひ出でん柳の最〔糸〕も哀れなるかな

出雲、

形見にと思ひ寄るより青柳の目〔芽〕の暇〔糸〕無くや悲しかるらん

など忍びつつ、涙の隙には云ひ交はしける。顯基の中納言、人よりは殊になどや思召しけん、法師に成り給ひにけり。世に哀れなる事に云ひ喧騒る。女院より御消息遣はしたりけるに、

世を捨てて宿を出でにし心にも猶戀しきは昔なりけり

と申し給へりければ、侍從の内侍、

時の間も戀しき事の慰まば世は二度も背かなましを〔此句イ背かれなまし〕

仰事めきて有りけるなるべし。内裏よりとて御使の參り、御文など參らせさせ給へるにも、先づかき暗して

のみ思召し惑はせ給ふ。御葬送の夜、

出羽の辨、

掛けまくも思ひ初めてし君なれば今も雲居を仰ぎてぞ見る

中宮亮兼房が許に、入道一品の宮の相摸、

程經れば慰む方も有るべきを絶えぬ涙の雨は如何にぞ

齋院の下りさせ給ひける夜の有樣などの、いみじう哀れなりけるを、或人、

掛けてだに思はざりけん去年の今日葛城山に跡絶えんとは

四條中納言定頼、

世の中の哀れなるには大空の雲も涙を惜まざりけり

などぞ聞ゆなりし。御乳母の典侍、假初に退かでて、尼に成りにけり。子の縫殿助と云ひける、法師に成りにけり。

大方の餘所の雨とや思ふらん戀ふる涙の降ると知らずや

後れじと思ふ心に背けども此世に留まる程ぞ甲斐無き

など、物覺えめ心の中に覺え給ひけり。少將の内侍、

今までも世に在り經んと思はぬを背く道にも後れぬるかな

女院に僧の裝束せさせ給ひて、御忌に籠れる僧に賜はせんとて、故院の御方の女房に縫はせさせ給へば、

今朝見れば歎き明せる涙には右の袂ぞ顯はれにける

御服に成る夜、女院の兵衛の内侍、

形見とて著れば涙の藤衣しぼりも敢へず袖のみぞ浸づ

御葬送の又の早旦、いみじう雨の降りければ、

上りにし煙は雲に紛ひつつ忍びも敢へぬ雨の音かな

是れも女院の女房、

慰ふる間にいや遠ざかる別れには止めん方も無きぞ悲しき

五節の君、月の明き夜、

さやかなる月も涙に曇りつつ昔見し夜の心地やはする

兵衛の内侍、

雲の上に見し夜の君が無ければや月も涙に曇るなるらん

五月雨はいとど晴間無く、軒の菖蒲も知らず顔にて過ぎぬ。はかなくて御法事なども過ぎぬれど、御心ども は晴間無くて、明し暮させ給ふ。齋院は下りさせ給ひにしかば中宮におはします。今年ぞ八つに成らせ給ひける。御髪は膕ばかりにて、黒き御姿いみじう哀れなり。一品の宮は十一におはします。御髪、御身長に唯だ少しぞ足らせ給はざりける。女院見奉らせ給はんと聞えさせ給へば、八月晦日方に渡らせ給ふ。黒き御單襲に黒き御小袿奉りて、二所ながらおはします。今日ぞ大宮も少し起き上がらせ給ひて、見奉らせ給ふ。乳母達皆引き裝ひ奉り給へれば、いとどいみじうをかしげにて並びおはします。大宮、日頃にいみじう面痩せ給へるしも、御色は雪恥かしうて、黒き一重の御衣に、御髪は御衣よりは色にて、いと煩たくは有らで、艶艶と御衣に溜まりたる程、いと哀れに艶めかしく、心苦しう見えさせ給ふ。母屋の御簾に、御屏風添へておはしますを、少し疊み除けておはしますを、女房など、いと哀れに珍しく見奉る。「よし見よ、我れ見」と思召したるも、いみじう哀れなり。いみじう暑き年にて、皆單襲一つなどを奉りたり。此方彼方に、御乳母達、尋常の女房三人ばかり參る。美作三位も、尼に成りて侍ひ給ふ、いと哀れなり。宮も然樣に思召し立たせ給ひにたり。此宮達の御事を、院のいみじう樣樣に思ひ聞えさせ給へりしものをなど、いみじう哀れにのみ思召さる。一品の宮の御事をいみじう思召したりしに、二の宮のいみじう附き聞えさせ給へりし、齋院に成らせ給ひにしかば、心苦しう哀れに、ゆかしう思ひ聞えさせ給へりしものを、やがて見奉らせ給はず成りにしなど思召すも、いみじう哀れなり。此宮達をも見奉り果つべきにもあらずと、物心細くのみ思召さる。御心と沈み增さらせ給ひつつ、世を厭はせ給ふ御心深し。「一品の宮はやがて院におはしますべく」など申させ給ふにも、齋院の御事をぞ、また心苦しう思召しける。女院には待ち付け聞えさせ給ひて、いとどしき催しなり。「如何に多かる」とは眞にこそ。此方彼方珍らしげ無く、「唐土船」も寄せつべかりける。打過がひ、えも云はずめでたくをかしげにて、御年の程よりも御髪は長う美くしうて、黒き御衣奉りつつおはします。いみじう哀れなり。一品の宮の御供には、中宮の宣旨、少將の命婦、右衛門の内侍、小馬の内侍、齋院には中納言の典侍、侍從の命婦、出羽の辨など侍ふ。故院の人人の交りて侍ふを聞かせ給ふにも、いみじう哀れに思召さる。三四日ばかり有りて、歸り渡らせ給ひぬ。其年、疱瘡夏より出でて、人人頂ひけるに、中宮、初めの度、然もおはしまざりける、然樣の御氣色おはしましける、惱ましさに事托けさせ給ひて、九月三日の程に、尼に成らせ給ひぬ。然るべき事とは思召しながら、差當りては鷹司殿の上も、侍ふ人人も、いみじと見奉り思したり。いとめでたき御髪を削ぎ果て奉りつれば、他人にておはしますも、いみじう哀れなる事なり。九月六日崩せさせ給ひぬれば、云ひ遣らん方無くいみじ。宮宮の幼なき御心地ど

もにも、思し惑ひ戀ひ申させ給へる、いみじう哀れなり。女房聲も惜まず泣き惑ひたる、云ふべき方無し。物思ふとても、斯く心に任せたるやうなる事は難きものを、いとあさましく哀れなり。一品の宮は女院におはしますべければ、關白殿にぞ聞えさせ置かせ給ひける。宮達の院に渡らせ給ひし程は只今の事ぞかし。例ならず起きさせ給ひて、見奉らせ給ひし御有樣の、涙に浸ぢて、明し暮させ給ひて、引き裝はせ給ふ事も無かりしかど、御髮の清らに、露も亂はせ給はず、大方も重りかに、耻かしげなりし御樣になんおはしましける。萬づに思ひ出で參らする事多くて、女房達思ひ惑ふ中にも、出羽の辨は死ぬべしと人人いとほしがる。母屋の御簾少し參りて御饌參る。御給仕は命婦の君、左衛門の內侍、侍從の內侍、出羽の辨などやうの人人取りて參る。平常におはしまいし折、然樣のみ仕うまつりし人人よりは、立ち勝りたる人して仕うまつらせ給ふ。中宮の大夫は亡せ給ひにしかば、權大夫ぞ大夫にてやかで物し給ふ。殿は籠らせ給はず、大嘗會、御禊などの事行はせ給へば、日頃過ぎ、長閑やかなるしも、物の哀れなる事は增さり行く。「物覺ゆる今日は如何にせん」とは、眞にぞ。女院いみじう哀れなる事を、いとど思召し、「我が命長さこそ耻かしけれ、宮は心に任せたるやうにこそ物し給ひけれ。斯く立ち後れ奉りて、一日にても在らんと思ひけんや」と思し宣はす。內裏の一の宮は高陽院殿に、御乳母達など具しておはします。二の宮は一品の宮の御腹に三つばかりにておはします。女一の宮は齋宮に、女二の宮は齋院に居させ給ふべしなど聞ゆ。斯くて、臨司殿には、頃さへいみじう哀れに、秋の暮つかた「有るを見るだに」と、吹く風も身に沁みて哀れなり。前栽もやうやう枯れ枯れに成り、蟲の音も弱り行き、雁の連れ渡るも驚ろかれ、七條の后宮崩ぜ給へる折、「荒れのみ增さる」と、伊勢が云ひたる程の心地も、斯ばかりや有りけん。權亮、宿直所に、長閑やかに經など讀みて、眺めける氣色も哀れなるに、云ひ遣る。

出羽の辨、

目の前に斯く荒れ果つる伊勢の海を外の渚と思ひけるかな

返し、兼房、

往時の海人の住みけん伊勢の海も斯かるなぎさは有らじとぞ思ふ

御前の火炬屋を見て、肥後の命婦、

君が爲め年經て見えし火炬屋の今は我身の胸を燒くかな

出羽の辨、

美くしき飾りと見えし火炬屋も今日は心を焦すなりけり

齋院の小辨の命婦、

如何にせん衞士の焚く火も消え果てて長き思ひに燃えぬべき身を

また、

木枯の風に任する紅葉だにまだ散らぬにや人は散りなん

十月廿一日、宮宮は院に渡し奉り給ひつ。人人は猶留まりて侍ふに、宣旨の君「退かで給はざらん前に、今一度參らん」と述給へるに、出羽の辨、

君在さぬ舊き宮には涙河渡るばかりの瀬こそ無からめ

返し、

斯くばかり涙の雨の日を經ればげに宮城野も海と成るらん

人人「今は」とて退かづる程に、宮の亮爲善、雨の降るに、

泣く涙天雲霧りて降りにけり隙無く空も思ふなるべし

返し、

悲しさぞいとど數添ふ天地も君を戀ふると見ゆる氣色に

「一品の宮より」とて有る御文に、「仰事殊になん」とて、宣旨の君、

もみぢ葉の心心に散りぬとも木の下〔子の許〕は猶思ひ出でなん

返し、

もみぢ葉の木の下をだに頼まずば散るにもいとど悲しからまし

また「今や出で給ふ」とて、齋院の小辨の命婦、

悲しきに添へても物の悲しきは別れの中の別れなりけり

出羽、

數多さへ別れの道を知らましや君に後れぬ我身なりせば

御帳の前に、いと事事しくて向ひ侍ひし獅子、狛犬の、人離れたる壁の下に捨て置かれたるを見るも、いと

ど哀れにて、

見る儘に夢まぼろしの世の中は獅子の果てこそ悲しかりけれ

宣旨の君、

然もこそは君が守りの失せぬとも斯くやは獅子の果ても有るべき

五節、臨時祭の程なども、斯かる事ども多かれど止めつ。世の中は御禊、大嘗會など云ひて、心長閑かなる折無し。北野の宮にとて、里人出で立ちなどすれど、此宮にのみぞ哀れに靈やかにて、盡きせず昔を戀ひて、宮達の幼なくおはしますを見奉り仕うまつりて、涙の干る世無くて明し暮しける。女御代には故式部卿の宮の姫君、殿の上の子に爲奉らせ給ふ、立たせ給ふ。御禊の有樣いとめでたし。先帝は廿一年位におはしましかば、絶間久しくて珍しく思ふべし。絲毛にて、女御代は、殿の上一つ御車にて渡らせ給ふ。また奉りたるを放ちて、絲毛、黄金造り、檜榔十、女房四十人、童女八人、例の作法なり。色色二つづつに、葡萄染の上衣などに有りけん、十二三ばかり重なりたり。下仕の揮したりしなど、尋常の事には似ず面白くめでたし。御輿の内のめでたさ、物物しく鮮やかにめでたくておはしますに、猶女院の御有樣は、

いみじくめでたきに、さし雙びおはしまいしは、又いみじかりし事ぞかし。大頭など云ひて、例の恐ろしげに筋太き紙縒り掛けて、さすがに麗はしくて渡る。馬に乘りて持たれば、心心にて、「やや」云ふ程もをかし。内裏の女房十人馬にて仕うまつるこそ、如何に顯證に理無からんと、いとほしけれ。殿此度は御車にて、引き後れて候はせ給ふ。一の宮いと美くしき御直衣姿にて、また童にて、御乳母達、御車の後に乘せさせ給ひて、御覽ずる、いとめでたし。大嘗會、例の月日の標山引き、卑しの者まで、青摺に赤紐艶めかしうて、急ぎ歩み倒れぬべく、悪しき道を續き立ちて行くもをかし。然るべき人は歩まで、人より後まで敬持かれ、肥大りたる近江守などは、人に押されなどして、歩み行くもをかしくなん。猶尋常の事にはあらず。今年は五節舞ふ人は、皆位冠など賜はる。女御代、内裏に參り給ふべしと聞ゆれば、今だにと思すべき内の大殿、春宮の大夫、只今は思し斷えたり。年も暮れぬ。晦の日、權大納言、一品の宮に參り給へるに、宣旨の君、

憂きもののさすがに惜しき今年かな遙けさ增さる君が別れに

返し、權大納言、

悲しさはいとどぞ增さる別れにし年にも今日は別ると思へば

また大納言、手習ひに、

春立つと聞くにも物の悲しきは今年の去年に成ればなりけり

御返し、出羽、

新しき年に孫へても變らねば戀ふる心ぞ形見なりける

この宣旨は宮の御乳母なりけり。殿の上の御姪に物し給ふ。

晩待星

年換りぬれば、内裏邊り華やかに今めかしう、御藥參り、御給仕など、三日の程いとめでし。七日、式部卿の宮の姫君參り給ふ。殿の役立ちせさせ給ふ事なれば、世の中靡きて、いとめでし。内裏より御使行經の四位少將參る。手書きの大納言の御子、今の權大納言民部卿に成り給へる、子にし給へり。容好く華やかなる人なり。斯くて參らせ給ひぬれば、御使度度參りて上らせ給ひぬ。殿の上もおはします。弘徽殿、登華殿、掛けておはします。内裏は梨壺に猶おはしませば、道いと遠し。一品の宮は、宣耀殿、麗景殿におはしませば、承香殿の馬道より通りて上らせ給ふ。又の日の御使は資房の頭中將、上達部、殿上人參り集まり、杯の程など、例の作法よりもめでたし。殿の斯く思召し扱ひ聞えさせ給へば、人人の裝束など云へば疎かなり。然るべき人人競ひ參り、いとめでたし。二月十餘日に、一品の宮、后に立たせ給ふ。大夫には故中宮の大夫、權大夫には資平の右衛門督、亮、大進など、皆有る限りなり。三月にまた式部卿の宮の姫君、后に

立たせ給ふ。一品の宮をば皇后宮、此宮をば中宮と申す。大夫には民部卿、權大夫には公成の兵衛督、亮には頭辨經輔、權亮、大進、行親、泰憲などなり。宣旨には故左兵衛督の女、但馬守則理の朝臣の女、御匣殿には左衛門督の女、左の大殿の女御の御腹の姫君なり。中務の宮の御女など侍ひ給ふ。皇后宮は陽明門の院におはします。女一の宮は齋宮、女二の宮は齋院、〔左の大殿の上に成らせ給へりト云フ句アレド後人ノ注ナラン〕男二の宮は一つ院におはします。皇后宮、一二の宮、齋宮、齋院に居させ給ひぬれば、一所若宮打遊ばし聞えさせ給ひて、物をのみ思召しておはします。中宮は程無く入らせ給へと有れど、如何に思召すにか、入らせ給はず。まことや、女院は月日の行くも知らせ給はず、思召し入らせ給へり。北の政所も、宮のおはしまいしかばこそ内裏にも參りしに、思ひ滯りしかとて、一向に剃り捨てさせ給ひておはします。院の西の對の南西掛けて、一品の宮おはします。北東掛けて齋院はおはします。いとど愛くしげにて、鈍色の御衣透き透きなるに、いと黑き御衣重ね奉りて渡らせ給へる、いと哀れなり。御前の庭曇り無きに、月の明きを眺めて、昔思ひ出で參らする人なるべし。

曇り無く尋ね行かばや月よりも明き蓮に君を住ませて

など、忘るる世無く戀ひ忍び參らす。四月は故院の御果てにて、いとど「今朝鳴く聲に」驚かせ給ふ御心の中ども云ふ方無し。九月までは宮達猶黑くておはします。五月五日、内裏より皇后宮に、

諸共に掛けし菖蒲を引き別れ更に戀路〔小泥〕に惑ふ頃かな

宮の御返し、

方方に引き別れつつ菖蒲草合はぬ根をやは掛けんと思ひし

と聞えさせ給へるを、いと哀れと思召す。内裏には齋宮をぞいみじう愛しうし奉らせ給ひける。男宮をば、また如何でかは疎かには思ひ聞えさせ給はん。女二の宮をば、いと愛しう爲奉らせ給ひける。中宮は華華といとめでたくておはします御有樣、貴に氣高くおはします。八月に内裏の一の宮御元服せさせ給ひて、東宮に立たせ給ふ。思ひつる事なれど、差當りてはいとめでたし。大夫には、やがて春宮大夫、權大夫には源大納言、亮には近江守隆輔、權亮には内裏の大殿の道基の侍從、宣旨には宰相の乳母、備前の前司長經の君の女なり。大進には伊豫の守仲宣なり。京極殿の寢殿に、東面には一品の宮、北面には院の御前、齋院とおはしまいて、西の對に東宮の御裝飾は爲たり。一品の宮の御服果てんままに、御裳奉りて、東宮に參らせ給ふべし。「内裏に」と故院は申させ給ひしかども、后も數多おはします、御年も此上無しなど思召すなるべし。十月に院に行幸あり。いとめでたくおはしますにも、二所打續きておはしましは、先づ思召し出でられて、かき昏らし思召さるれど、然りげ無く紛らはしておはします。中宮には、前栽合、菊合など爲させ給ひて、をかしき事多かり。皇后宮には、萬づを外に聞かせ給ひて、思召し歎く事限り無し。大夫は故中宮の御忌の程煩ひ給ひしが、ともすれば起り給ひつつ煩ひ給ふ。故皇太后の御折より、此宮をば取り分き扱ひ聞えさせ給ふ。枇杷殿燒けにしかば閑院におはします。大夫殿の上は、別當の御女を愛護き奉り給

ひて、二の宮に思ひ志し聞えさせ給へり。別當とは公成の兵衛督なり。御服果てて、一品の宮、齋院の御髪剃がせ給ふ。殿ぞ剃ぎ率らせ給ふ。色色の菊の御衣の上に白き唐綾奉りて一品の宮おはします。いと氣高く、華華と、めでたくをかしげにおはします。御髪の掛かりなど、繪に書くとも筆に及ぶまじ。齋院のいと兒めかしく、らうたげに美くしうおはしますを、樣樣に有り難く見奉らせ給ふ。故宮、故院の御事を思召せば、此殿ばらも疎かにえ思ひ聞えさせ給はず。其頃は、殿の中將ときこえしは、中納言にて物せさせ給ふ。御容いとめでたく匂はせ給へり。內の大殿の三位中將、今は中納言にて物せさせ給ふ。小一條院の高松殿の姫君にぞ增取り聞えさせ給へる。一品の宮、其年の十二月の十三日に御裳奉りて、やがて其夜春宮に參らせ給ふべしと、準備ぎ立たせ給ひたり。殿準備がせ給へば、故院のおはしまいしにも劣らず。其頃氷を扇の形にて、御硯の蓋に置きて、東宮の御方より此御方に奉らせ給へれば、敷きたる紙に葦手にて、出羽の辨、

君が代に扇と見れば氷すら千代をかねてぞ結び貫く

と書き付けて參らせ給へり。其日に成りぬれば、春宮の御裝飾は寢殿の西面にし、一品の宮の御方は本の東面なれど、今少し廣く、中の戸の此方、やがて裝飾はせ給へり。御帳などは殿より奉らせ給へり。葡萄染の二重織物、一重は打ちたる、白き紋を居ゑたり。紐は紅梅、青きに梅の折枝を織物にもし、織物にも織りたり。いとおどろおどろしうめでたし。御調度は故院の作物所にて心殊にさせ給へりしかば、いとめでたく尋常ならず。御櫛の篋、片つ方は常の黃金の篋、今片つ方には透篋なるを、二つづつ殿上人に賜はせて、中の物は造らせさせ給ひ、心心に競みしたり。女房の裝束は、色色に、紅の打ちたる葡萄染の上衣、又の日は、紅梅どもに、櫻、萠葱の唐衣、晝渡らせ給ふ日は、四人づつ、色色皆打ちたり。いと美くしくめでたき御間なり。東宮は十三、宮は十二におはします。衣の數は五つなり。柳著たる人は、浪の繪を白き絲して結びて、氷せさせて、「柳氣力無くして」と云ふ詩の心なるべし。池に波の紋あり、氷盡く開けたり。廿七日內裏に入らせ給ふ。東宮は梅壺に、一品の宮は昔の儘に藤壺におはします。藤壺の東面は殿の御宿直所なり。入らせ給ひて、梅壺の西面、上の御局にておはします。殿、內の大殿など出で入らせ給ふにも參らせ給ふ。御參りの程、三日は殿おはしまして、夜は御沓を抱だき、御衾參らせ給ふ程、哀れに細かに、眞の御親などのやうに扱ひ聞えさせ給ふも、昔の御事をいみじう思召すにこそ。舊き女房などは藤壺を見るに付けても、いと哀れなり。今はとて出でさせ給ひし、「曉の賴みも無くて」など云ひし程思ひ出づべし。心の程推し量り給ひて、辨の乳母、女房の許に、

忍び音の涙な掛けそ斯くばかり狹しと思ふ頃の袂に

と有れば、出羽の辨、

春の日に乾かざりせば往時の袂ながらや朽ち果てなまし

眞に慰む方無からましと、表面は世に隨へど、藤壺にては、おはしまいし御有樣より、居させ給ひし眞木柱などを見るは、忍び難く哀れなる心の中なり。中宮は尋常ならず成らせ給ひて、奏せさせ給ふ。上達部悅

び申しなどし給ふ。いみじうめでたし。皇后宮には、齋宮伊勢に下らせ給ふ。齋院は本院になど、皆外外におはします。貴き人も猶苦しげにおはします。内裏の御心、いとめでたく有るべかしく、直直しうさへ有りて、制も厳しくなどぞおはしましける。御容いとめでたくおはします。一品の宮をいと心苦しう思ひ聞えさせ給ひて、雨風の荒き音なひに付けても、御使奉らせ給ひ、故院の申し置かせ給ひし思召せば、辱なくて哀れに思ひ申させ給へり。清涼殿には北塞がりて、まだ内裏にはおはしまさず。秋の月隈無きに、人人歩りきて見るに、南殿へ上らせ給ひし長橋の朽ちたるを見るも哀れにて、

君が代を渡しも果てぬ長橋の何にか爲まし我れ朽ちずとも

盡きもせずめぐりて見れば影をだに留めざりける君ぞ悲しき

何事も變らざりける百敷にあはれ君しも何地なりけん

また宴の松原にて、

哀れにも今は限りと思ひしを又めぐり逢ふ宴の松原

など云ひ集めたる言ども書きたる草子を、院の女房の見んと有りければ、奉りたるに、書きて押し付けられたる。辨の命婦、

掛けて聞く片端〔橋〕だにも悲しきに同じ邊り〔渡〕を如何に見るらん

かき絶えて影見ぬ間に惑ふかな月も澄みける昔ながらに

など書かれたる、いと哀れなりければ、當の人の言とは覺えぬも哀れにめでたし。三月ばかりに、院、内裏に入らせ給ひたり。路など隙無くて、一品の宮に御對面無し。宮より、

君は猶散りにし花の木の下〔子の許〕に立ち寄らんとは思はざりしを

御返し、

花散りし路に心は惑はれて木の下〔子の許〕までも行かれやは爲し

御手などいと若く貴に書かせ給へり。斯くて清涼殿壞たれて新しく造らるべしとて嘆つが、藤壺より見ゆるも、いと哀れにて、

動き無き玉の臺と見しものを涙と共にこぼれぬるかな

また人、

曇り無く磨きし時は思ひきや涙降る屋〔舊屋〕にこぼれ果てんと

數多ありしかど忘れにけり。中宮出でさせ給ひて、御修法、御讀經數知らずめでたし。女宮ぞ生れさせ給へる。口惜しと思召せど、御乳母、然るべき人人數多參る。程無く入らせ給ひぬ。姫宮も入らせ給ひぬれば、内裏には前前の宮達の餘所におはしますに、珍しく愛くしと見奉らせ給ふ。女院は靈きせず故院の御事を思召して、有りし樣に物好みも爲させ給はず、女房なども、衣の音甚く高くもせず、靜やかに、いとどもてなしたり。「世は再びも」と仰せられしかど、猶一度に背き果てさせ給ひつ。其頃民部卿の御子の大夫の君

とて、いと美くしう物し給ひつるも亡せ給ひぬれば、いみじう思ひ歎き給ひて、母北の方は院の典侍と聞えさせつる、今は三位にて物し給へるも尼に成り給ひぬ。いみじう哀れなり。世の幸ひ人と愛でられ給ひつるに、斯くても劣り給ふべきには有らねど、大人び給へるが亡くなり給ひぬるが口惜しきなり。また姫君二所ぞ物し給ひける。民部卿殿もいみじう思し歎く。御子左殿とて、大宮なる所を、いと面白く造りてぞ物させ給ひける。水の流れ、神さびたる松の氣色など、尋常の所に似ず。斯くて中宮には又尋常ならず成らせ給へれば、世にめでたき事に聞えさす。其頃伊勢の託宣など云ひて、「藤氏の后おはしまさぬ、惡しき事なり」とて、内の大殿の御所殿參らせ給ふべしと云ふ事出で來て、七月朔日頃と準備がせ給ふ程に、六月廿七日内裏燒けぬ。内裏は京極殿におはします。一品の宮は御堂に、女院へ出でさせ給ひぬ。あさましう、「年頃斯かる事無かりつるに」と、内裏にも思召し歎かせ給ふ。讃岐守憲房が家の近衛なるに渡らせ給ひぬ。寢殿に一品の宮、女院おはします。西の對に東宮おはします。女院のおはします京極殿に、内裏渡らせ給ひぬ。前の齋院は故宮の御處分なる小二條殿造り改めて渡らせ給ひにき。内の大殿にも口惜しき事に思召しける。九月に中宮此度も女宮生み奉らせ給ひて、九日と云ふに崩せさせ給ひぬれば、哀はれにいみじき事を思召し歎かせ給ふ。姫宮を殿の上、御形見と撫で愛護き奉らせ給ふ。阿波の大進下らんとて、入道一品の宮に參りたりけるに、斯かる御事にて留まりぬらんとて、相摸がおこせたりける。

時雨する秋の深山の嵐には世に大淀の船出せじかし

御四十九日に雨の降れば、行親が許に、出羽の辨、

況して人如何なる事を思ふらん時雨だに知る今日の哀れを

また誰とか、

霧晴れぬ秋の宮人あはれ如何に時雨に袂濡れ增さるらん

故中宮の出雲、下野が許に、

如何ばかり君歎くらん數ならぬ身だに知られし秋の哀れを

など哀れなる事ども多かり。はかなく月日も過ぎて、内の大殿の御所殿、十二月に參らせ給ふ。宮の御事の程無きになど殿は思召したり。今年ぞ廿六に成らせ給ひける。年頃何時しかと思召しける御事にて、殿御心を盡させ給へり。内の大殿の上は、三條院の女二の宮、此度は添ひ奉らせ給へり。新しく人なども參らず、有り附き自易し。京極殿に參らせ給へり。いと愛敬づき、氣高くてをかしげに、御髮などめでたくおはしましける。覺えありて侍はせ給ふ。殿片時退かでさせ給はず、哀れに添ひ侍はせ給ふ。そのまたの年京極殿燒けぬれば、内の大殿の二條殿に渡らせ給ひぬ。あさましき事を思召し歎かせ給ふ。故院の二十餘年おはしましに、一度だに無かりし事を、程も無く斯かる事と歎かせ給ふ。この御時には明意僧正の山の座主に成るべしとて、山の人起り喧騒りしかば、殿の御門理無くいみじかりき。斯くて内裏には女御殿いと覺えありて侍はせ給ふ。打解けさせ給ふまに、いとをかしく、御簾引き上げて渡らせ給ふにも、心有らんと

見えて、はかなき事も故ありて物し給ふ。如何で斯く此大臣腹がちにて、母も無き子を生したてけん、手など書き給へる樣よと思召しけり。侍ふ人人も心にくく持て付けて、打解くる折無く、故故しき御方のやうになん有りける。七月七日、故中宮の御事を思召し出でて、若宮に、

去年の今日別れし星も逢ひぬめり例無き身ぞ悲しかりける

御返し、

秋來れば流れ增されど天の河影だに見えぬ人ぞ悲しき

東宮の御方より、一品の宮に、

逢ふ事は晩待つ星に借しつれど渡らまほしき鵲の橋

と聞えさせ給へりけり。內裏の上は直よかに煩はしき方に覺えさせ給へれど、歌の方にをかしうぞおはしましける。殿の中納言殿は數より外の權大納言に成らせ給へる。容貌、有樣、人に勝れ給へり。斯くて內裏造り出でて渡らせ給ふべし。皇后宮、二の宮の御書始にぞ入らせ給へる。あはれに大人びさせ給へるにも、年月の事思召し知られて、哀れに思召さる。やがて留め奉らせ給へば侍はせ給ふ。弘徽殿に皇后宮、藤壺には殿の姫宮達の入らせ給ふべきにて置かせ給へり。梅壺には內の大殿の女御、梨壺には例のやうに春宮おはします。宣耀殿に一品の宮おはしまいて、梨壺の北の屋を上の御局に爲させ給へり。細殿などいとをかし。反橋の妻戸、唐廂など、いとをかしう今めかし。藤壺にのみおはしまいて、一の所なれば、さすがに

晴るくる方も無く、屏の廻りて有りしに、いとをかし。入道一品の宮、東宮大夫殿の姫君參らせ奉らんと申させ給ひて、參らせ奉らせ給ふ。一品の宮も入らせ給ひて、御對面など有りけり。三日ばかり有りて宮は出でさせ給ひぬ。大夫殿、是れもつと侍ひ給ふ。殿の大納言は源大納言殿の御壻に成らせ給ひぬ。いと華やかに持て愛護き聞えさせ給ふ。內裏邊りいと今めかしくをかし。殿の宮も入らせ給へり。黃覺えて、女房など物哀れなり。梅壺の女御などの上らせ給ふを見るにも、思ひ出づる事多かり。四五日ばかりおはしまいて出でさせ給ひぬ。宣耀殿、麗景殿いと近き程にて、加賀の左衛門、出羽の辨など云ひ交はす。上の御局よりは況して向ひにて、いとをかし。琵琶、箏の琴彈き合はせ、殿上人參りなどしてをかし。四月ばかりのをかしきに、此方彼方の細殿、反橋の戸口などに、殿上人參りて、水鷄の打叩くも、尋常の所に似ぬぞ辛爾なるや。猶內裏邊りに如くもの無しと、人人云ひ思へるも道理なり。まことや、梅壺の御方に此春、上より、

春雨の降りしく頃は靑柳のいと〔糸、最〕亂れつつ人ぞ戀しき

と申させ給へれば、

靑柳のいと〔糸、最〕亂れたる此頃は一筋にしも思ひ寄〔縒〕られず。

と聞えさせ給へり。御返り、

靑柳の糸は方方靡くとも思ひ初〔染〕めてん色は變らじ

また御返り、

淺緑深くも有らぬ青柳は色變らじと如何が頼まん

と聞えさせ給ひけり。其年五節、臨時祭など過ぎて、師走の一日、内裏燒くべしと有る御物忌の日、況して今日明日と申したるを、然しもやはと思召し思ふ程に、二日と申したる果ての日燒けぬ。御方方出で驚がせ給ふ程、恐ろしく云はん方無し。あさましき事をのみと思召す。まことや、二條殿におはしまし時に、鵜の魚を食ひて候ひけるを、入道の大納言聞き給ひて、女御殿の御方に、鵜の魚を食ひて候ひける事など書き給ひて、

如何でかは上の空には知りにけんかもめみゆるに世に逢へりとは

上渡らせ給ひて、御覽じて、

祈りつつ緩ぶる網の驗には飛ぶ鳥さへも斯かるとぞ見る

是れを聞き給ひて、また大納言ぞ申し給ひける。十一月、殿上に雪山造らせ給ひて、人人詠めと仰せられ給ひて、

天地の受けたる年の驗には降る淡雪も山と成るらん

是れは先づの事どもなり。斯くて一條院に渡らせ給ひぬ。いと狹けれども、さすがに有るべき限りなり。梅壺、下の御局はいと狹ければ、上にのみ侍はせ給ふ。麗景殿は一品の宮のおはします御格子の外より、緣を渡りて參う上り給ふ。梅壺の御方もいと近し。東宮、一品の宮は同じやうにおはします。南面に春宮、北面に一品の宮おはします。方方に殿上人の參るも近くて聞ゆる、いとをかし。一品の宮の御方に、經家の辨、經信の少納言、資仲の少將など參りて、琵琶彈き遊ぶ。辨、

秋の夜の半の月を今宵しも

と云へば、出羽の辨、

彈き止めつる事ぞ嬉しき

梅壺の中將、七月七日に殿上の資綱少將に、

今宵こそ著くも見えね天の河雲の上には有らぬ邊りか

返し忘れにけり。麗景殿の下り上り給ふ女房の衣の音、薫香の香りなど、近き程にて、をかしう心にくし。薫香の香なん勝れたりける。皇后宮の御方は廣くおはしまします。麗景殿の女御上らせ奉り給ひて、箏の御琴彈かせ奉り給ひけり。いと貴にをかしき御樣にて、いとをかしう彈かせ給ふ。同じ物の音なれども、貴き人の彈き給はんに適ひてをかしきものになん。小野の宮の右の大殿、大將辭し給ひてければ、殿の大納言成り給ひぬ。是れを歎きて、春宮大夫籠り居給へり。喜びなど申させ給ふさま、いとめでたし。斯くて十二月の一日、また一條院燒けぬ。あさましなども殊更の樣なり。内裏は高陽院殿に渡らせ給ひぬ。東宮は

京極殿に、一品の宮も具し奉らせ給ひて渡らせ給ひぬ。高陽院殿に一の宮、殿の上もおはします。めでたくいみじ。如何ならん事を盡して、御覽ぜさせんと思召したるも道理なり。一の宮は、女院のおはします寢殿の東面、其方の廊かけておはします。東の對は此度は無くて、山河流れ、瀧の水競ひ落ちたる程など、いみじうをかし。院の御方に、出羽の辨、

瀧つ瀨に人の心を見る事は昔に今も變らざりけり

伊勢が「塞き入れて落す」と云ひたる、大納言の家居も斯ばかりは有らざりけんと、めでたくいみじ。年廻りぬれば、所所の有樣ども、いとめでたし。梅壺の女御殿の御覺え、月日に添へていとめでたく、世の人は申せど、如何なるにか、「后にはえ居給ふまじ」とのみ申す。何事にて著きにか。この御時は、制ありて、衣の數は五つ、紅の織物などは制あり。物の榮無けれど、折折院の人の裝束などは、いとをかしく爲させ給ふ。然れど制あればいと口惜しくぞ。五月最勝の御八講に、上の御局におはします。菖蒲を皆打ちて、やがて菖蒲の唐衣、藥玉など付けて、長き根をやがて御前の御簾の前の遣水に浸して、出で居たるもをかし。麗景殿も折折の裝束をかしう、細殿にて、琴、琵琶彈き合せて、殿上人など物誦んじなどして遊ぶ。五日、加賀の左衛門、一品の宮の出羽に、

袂には如何で掛くらん菖蒲草刷れたる人の袖ぞゆかしき

と云ひたりけれは、出羽の辨、

喝て無く知らせや爲まし九重の疎かならぬに掛くる菖蒲を

この出羽の辨、いとをかしう風流者なるものから、「有心なること、出羽の匂ひや、色の樣も殊になん有る」と、殿上の人人云ひけるを聞きて、梅壺の女房の云ひける。

身に沁むと聞くぞゆかしき色ならで如何に染めける君が匂ひぞ

返し、

誰か然は語り散らすぞ日に添へて盛り過ぎ行く花の匂ひを

皇后宮の御方も、昔の皇太后宮の名殘り、華華と今めかしうをかしくぞおはします。此頃內裏邊り昔覺えてをかし。後一條院の御時は、唯だ中宮一所おはしまして、常人のやうにおはしましを、此御時は樣樣御方方おはします。然るは御心は麗はしく、浮華ならずぞおはしましける。殿などにも、故院は任せられ奉らせ給ひて、萬づも知らぬやうにて、貴に氣高くぞおはしましける。是れはいと麗はしく、御容貌もいと清げに、才おはしまいて、善き帝におはしましけり。後一條院の御容貌もいとめでたくおはしまいて、世の人忍び參らせぬ無し。一品の宮、齋院に露の御事もおはしませば、上達部、殿上人いみじう參り、殿、內の大殿より初め奉りて、參らせ給へば、めでたうおはします。「帝の御名殘は斯くこそはおはしましけれ」とぞ人申しける。此內裏いみじう有るべかしうおはしまいて、此宮にも、故院の御事を思召いて、東宮にも斯く參らせ奉らせ給ふ。然るべき折折、風の荒く吹くにも、御使など奉らせ給ふ。女院の御有樣のいとめ

でたくおはしませば、同じき帝と申せど、斯くめでたくおはしますなりけり。御容貌も御心ばへも輕輕しからず、有るべき限りめでたくおはします。殿の駒競とて行幸ありき。女院も渡らせ給ふ。殿の宮の女房など、いみじう裝束きて、其れ過ぎて內裏に入らせ給へりき。所狹くて、梅壺の上の御局におはします。やがて其御裝飾の儘なり。打解くる世無く、めでたき御裝飾なれば、然ながら下に下りさせ給ひて、讓り聞えさせ給へる、御几帳の帷子の御座なども、心殊に留まりたり。匂ひなども、尋常ならずと、人人愛で合へり。

蜘蛛の振まひ

世の中いと騷がしう心長閑かならぬに、關白殿春より久しく惱み渡らせ給ふに、四月に成りては、少し宜しく成らせ給ふに、大將殿、世の中の御心地煩はせ給ひけり。七日と云ふに亡せさせ給ひぬ。あさましなども世の常なる事をこそ。今年ぞ二十に成らせ給ひける。殿の思召し沈ませ給へる樣、道理にいみじ。母上の御心の中、大納言殿など、取り集め云はん方無き御心の中どもなり。摸似び盡すべくもあらず。大方世にもいみじく惜み聞えさす。御年の程、容貌、有樣のめでたく物せさせ給へる、世の中に斯かる事は無かりけりなど、男などは、昔の例を引きて惜み聞えさす。山の井の大納言と聞えさせけるなん斯く有りし。然れど其れは廿五にて大納言にてなん物し給ひける。彼の關白殿は帥殿、權中納言、后宮など、いと數多物し給ひき。異腹に物し給ひけり。唯だ人柄の惜しく、容貌、有樣などの物し給ひけるぞ、是れは唯だ一所類ひも無くて、御容貌、有樣も優れたるに、御年の程、官位、惜しかるべき盛りなりかし。御葬送の夜、物覺えず惑ひ合ひたる心にも、賢しらに、上、

空蟬の殼を頼むに有らねども又此は如何に別れ果つらん

と、いみじく思し惑はる。其おはしましける御帳の中に、蜘蛛の巢を掛きたりければ、

別れにし人は來べくも有らなくに如何に振まふ小蜘蛛ぞ此は

御返し、宰相の君、

君來べき振まひならぬ小蜘蛛はかきのみ絕ゆる心地こそすれ

御法事の日、男女參り集ひたる、皆同じ樣なる濃き薄きばかりを、變る標にて有るを御覽じて、

見渡せば皆墨染の衣手は起〔裁〕居に付けて物ぞ悲しき

四十九日果てて、山に上りて申したりける。座主、

たぐひ無き君が別れは程經れど落つる涙の色ぞ變らぬ

返し、大納言殿、

思ひきや思ひの外の別れして深き涙を掛けんものとは

大將殿おはしまし初めける春、上の持たせ給へりける扇に手習など爲させ給へりけるを、御硯の下に有るを御覽じ付けて、書き付けさせ給ひて置かせ給へる。

手ずさびのはかなき跡と見しかども長き形見に成りにけるかな

春宮大夫の姫君、此後久しう音づれ聞えさせ給はざりければ、大將殿の上、

はかなしと思ひし程に露の身も消えやしにけん問ふ人の無き

御返し、

思ひ遣る心も露と消え返りえも云ひ遣らで歎かれぞ爲し

「今更に兒のやうにて物せさせ給ふ事」とて、大納言殿の上、

風早み置き所無き白露を心に掛けて物ぞ悲しき

御返し、齋院の中納言の典侍、

數ならぬ身に沁みてこそ思ひ遣れ心盡しの秋の白露

殿は日に添へても思召し冷まさせ給ふこと無く、いみじくのみ思召し歎かせ給ふ。先打追ひて參らせ給ふと聞かせ給ひては、先づ入り給ふべき路の障子押し開け、心して待ち聞えさせ給ひ、萬づにいみじく見ても飽かず思召しつるに、あさましく云はん方無き御心の中なり。秋に成るままに哀れにいみじき事を何處にも思召す。月日はかなく過ぎて、九月の御念佛に、院に一品の宮渡らせ給ふ。女房十人ばかりして、忍びやかなれど、上達部、殿上人いと多く參り給へり。御堂の東北掛けておはします。萩の羅の御几帳ども繪をかしう書きたるに、若き人人、樣樣なる袖口ども押し出でたる、をかし。「萩の上風」、「萩の下露」押したる人も有り、萩の風に浪寄り掛かる事だに惜しき。取れど消えせぬ程もをかし。唯だ枝ながらと云ふべくも有らず。三位の、地檜の衣どもに紅の打ちたる、赤色の唐衣著給へる、猶いと清げに、髪の掛かり、肩付など、人に優れ給へり。色色に移ろひたる菊の中を押し分けて、「置きまどはせる白菊」の袖の見えたるも、をかし。暮れ行くままに月の隈無きに、打ちたる衣どもに、羅の唐衣透きたるに、玉を貫き、露置かせなどしたるが、いとをかしきに、資仲の少將、「折れぬばかりも」とて寄り居たるも、折をかしかりき。十四日雨降りて口惜しきに、出羽の辨、

罪滌ぐ昨日今日しも降る雨は是れや一味と見るぞ嬉しき

大和、

滌ぐべき罪も無き身は降る雨に月見るまじき歎きをぞする

斯くて麗景殿の女御尋常ならず成り給ひぬれば、春宮大夫いと嬉しく思したり。其頃大將に成り給ひぬ。殿は御喜び申し給ふを聞かせ給ふにも、いみじうなん思召されける。師走の廿餘日の頃、內裏に御面疱おはしまして、醫師ども參りなどして、少し煩はしう申しけり。如何なるべき御心地にか。

根合

内裏の御面疱の事猶癒らせ給はねば、如何に煩かしう思召す。朔日の有様など同じ事なり。日頃の過ぐるままに、「猶水など射させ給ひてや善からん」と申せば、其作法の御裝飾して射奉る。いと寒き頃、堪へ難げに見えさせ給ふ。上東門院の入らせ給ひて、見奉らせ給ふ御心、譬へん方無し。唯だ打惱みて物せさせ給はんだに有り、見る人堪へ難き御事の樣なれば、いといといみじう見奉らせ給ふ。殿ばら、殿より初め奉りて、集ひ侍はせ給ふ。内の大殿の、女御の御事を思すにもいみじ。年頃も后に立たせ給はん事を思しつるに、此際は況して如何に如何にと思召す。大將殿も、女御の尋常ならずおはしませば、如何がは口惜しう思されざらん。日頃の經るままに、いと堪へ難げにおはしませば、心を盡し給ふ人多かり。内の大殿は、后の御事をいみじう爲させ給ふ。御心にも、いみじういとほしう思召しながら、難げなる御氣色なり。院にもいみじう申させ給ふ。正月の十日の程、いみじう重く成らせ給ひぬれば、内の大殿の女御退かでさせ給ふを聞し召して、藏人長宗を召して、臥させ給ひながら、御文書かせ給ひて奉らせ給ふ。いみじう哀れなり。今暫しの程を近くて聞き果てさせ給はで、などやうに聞えさせ給ひけるにぞ、留まらせ給ひぬる。常の人は、添ひて如何なるまでも見る事なるを、如何なる事にか、皆出でさせ給ふべしと聞ゆるは。皇后宮上らせ給ひて、見奉らせ給はんと申させ給へど、「他人人も如何が思はん」と仰せられて、上せ奉らせ給はず。重く成らせ給ふままに、内の大殿は、女御の御事をいみじう申させ給ふ。如何ならんと、殿の人も思ひ騒ぎたり。二の宮も入らせ給ふ。人に拘だかれさせ給ひて、屈んじたるやうにておはしますも、いと哀れなり。十四日、齋宮、准三宮の宣旨下り、年官、年爵賜はらせ給ふ。此折にやと世の人思ひ申したりつる梅壺の御事、然も有らず成りぬれば、いみじう思し歎かせ給ふ。女御殿も、殿の思召したる御氣色を御覽ずるに、理無く苦しう思召さる。關白殿を「つゆ御心寄せ無く、情無くおはします」と、恨めしう思ひ申させ給ふ。一の人の御女ならぬ人の、御子おはしまさめが成らせ給ふ例は、又無き事と思召して、爲させ給はぬなりけり。此御事思召して、御殿籠り、御祈りせさせ給ふに、惡しき御夢をのみ御覽じて、御護持僧明快召して、仰せられけるは、「今は此世の祈りなる爲そ、年頃の願ひは都率天の内院なり。年頃の願ひ違へず、都率天に必ず本意遂へ給ふな」と、仰せられければ、明快鉦打ちて祈り申しける時に、近う侍ふ人人、忍び難く、涙堪へ難かりけり。惡しかるべき樣に知らせ給ふべき事も有りければ、「我身はとても斯くても苦しかるべきならねど、留まらん人の爲めの疎かに思ふべき事ならねば」とぞ仰せられける。然るは「御志ありておはしまし、覺えおはします」と、世に喧騒りつるに、此事を爲させ給はず成りぬる事をぞ、奇しく人人申しける。然るまじきにこそはおはしましけめ。寛德二年正月十六日に位讓りの事ありて、春宮渡らせ給ふ。糸毛にて參らせ給ふ。いといみじき御有樣を外に思召しつるよりも、いみじう悲しく思召さる。

いみじう泣かせ給へば、「斯くな泣き給ひそ、上東門院に善く仕うまつり給へ、二の宮思ひ隔てず思せ」など申させ給へば、御顏に袖を押し當てておはします。「時成りぬ」と申せども、頓みにもえ動かせ給はず。内侍御劔の箱賜はすれば、髮上げて取る心地いみじうて、愼みも敢へず。「凶凶し」とて讃責む。水射奉れば、「いと堪へ難し、此世にてだに暫し安めよ」と仰せらる。いみじう悲し。甚く夜更けて還らせ給ふ。上達部、殿上人さながら仕うまつり給ふ。同じ事なる御事なれど、御車にておはしましつるを、御輿にて還らせ給ふ。いみじうめでたし。他人に讓り聞えさせ給はば況して如何ならん。齋宮の御事をなん、いみじう申させ給ひける。「二の宮如何にせんずらん」とぞ、内内にも仰せられける。故院も、女院も、關白殿も、同じ事におはしましだに、我どちこそ善かりしか。末末の人人は、善からぬ事を云ひ出で、自らなる事も有りしに、況して是れは御腹も異らせ給ひ、御後見も異らせ給へれば、如何にと思召すなるべし。御方方の御事ども、思召し申させ給ふ事ども有らめ、人聞かねば書き付けず。十八日の夕さり、俄に崩せさせ給ひぬれば、云ふにも疎かならず、いみじ。上東門院の思召し歎かせ給ふ樣、云ふ方無し。「命長くて斯かる御事を見る事」と、人の思ふらん事をさへ添へて、思し惑はせ給ふ。殿ばらもいみじう思したり。内の大殿は恨めしき方も添ひて、涙落ちさせ給ふ。二葉より事毎疑ひ無く、后がねと敬侍き聞え給へるに、口惜しくいみじう思召さる。大將殿も、女御の御產屋四月なるに、今二月、三月を過ぐさせ給はず成りぬる、いみじう口惜しく思し歎く。今の内裏には、院の御事のいみじうおはしましつるを思召せば、御喜びも、何とも思召されぬに、院の御事は如何にと思ひ參らせながらも、御乳母達待ち付け聞えさせつる、嬉しさは限り無し。月のいみじう明きに、初めは御車にておはしましつるに、御輿にて、儀式、有樣、百官引き連れて還らせ給へる、めでたくいみじとも疎かなり。院の例の御有樣にて讓り申させ給はましかば、如何に思召すこと無くめでたからまし。思し歎かせ給へる樣、道理にいみじ。齋宮、齋院を又もえ見奉らせ給はず成りぬる、いみじう哀れに、限り無き御有樣も、斯かる事のおはしましけるも、哀れなりけり。皇后宮には「許さぬものに思したれど、亡からん世には、思し出づる事多からんものを」と、唯だ去年の冬申させ給ひし、思し出づるにも、いみじう思召さる。梅壺には起きも上がらせ給はず、思し沈みておはします。薄色の御衣ども奉りたりけるが、何處とも無く翻りたる袖のみにもあらず、いみじけれど、干さで御覽ずべき方の無きこそ、いみじう哀れなれ。何方に落つる涙にか、殿は一向に恨めしう思したれば、耻かしうも恨めしうも思しもや爲けん。また哀れに上の御局にのみおはしまさせ、御志深げに聞えさせ給ひし御中らひなれば、一事の有るまじかりけるをば、如何が御心ばへの哀れに淺からず有りしは、思ひ出で聞えさせ給ふ事も、如何でかは無からんとぞ、人の心にも推し量り參らせける。殿の斯く思召したるも耻かしく、一向に忍ぶ樣にや思召すらんと思召せば、やうやう起き上がり、御行ひなどにて明し暮させ給ふ。本よりいみじう御行ひの御心深く、經など讀ませ給はぬ無く、千部の經を度度讀ませ給ひ、書きなど爲させ給ひければ、殊に御經書かせ給ひ、是れを營みにて明し暮させ給ふ。御經樣樣にめでたく爲させ給ふ。世を背かん事を思

召せど、殿の御許し奉らせ給ふべくも見えさせ給はねば、人知れ御心設け爲させ給ひ、御服過ぐさせ給ふ。四月に麗景殿の女御、女宮をぞ生み奉らせ給へる。四月八日には御即位あり。殘る人無く見る。門入る程、車どもの競ひ入る程、いと恐ろし。玉の冠して、床子どもの上に居並みたる、唐繪の心地して、女房などは吉に付きて侍ふ。辨の乳母、典侍に成りて、其日の御給仕し給ふ。めでたしなども世の常なり。丹波の乳母は、雅道の中將の女、宰相の乳母は、故致仕の大納言の孫、備前守長經の女なり。然るべき人人、殿上人など、花を折りたる心地して、めでたし。御輿寄する程、御乳母達如何なりけん。朝日の輝き出づるを見る心地す。今年ぞ廿一に成らせ給ひける。一品の宮は二十に成らせ給ふ。后に立たせ給ふべけれど、御服過ぐし、神事など過ぐしてと思召すなるべし。命婦、藏人十人は、禮服とて、赤色の唐衣の袖廣きをぞ著たる。今十人は摺唐衣著つつ、髮上げて並び侍ふ。威儀の親王、褰帳など、例の事なり。京極殿におはします。寢殿を南殿にて、西の對を清涼殿にしたり。北の對に一品の宮おはします。北の一の對を內侍所などに爲たり。西の中門の廊を陣の座にしたり。いみじの京極殿の有樣や。帝三所、后三所立たせ給ひぬ。又も一品の宮立たせ給ふべかめり。四條中納言は、後朱雀院崩せさせ給ひける頃、雪の消え殘るを見て述給ひける。

木がくれに殘れる雪の下消えて日を待つ程の心地こそすれ

とて、崩せさせ給ひにけるこそ、いと哀れに、先づ書くべき事を忘れてなん。院崩せさせ給ひて、源三位の御許に、皇后宮の辨の乳母、

あはれ君如何なる野邊の煙にて空しき空の雲と成りけん

返し、

思ひ遣れ同じ煙に交りなで立ち後れたる春の霞を

其三月、內裏の御前の櫻の盛りなりけるを、一品の宮の出羽の辨、

風吹けど枝も鳴らさぬ君が代に花の常磐を始めてしがな

また、人、

はかなさに比へて見れば櫻花折知らぬにや成らんとすらん

其四月、祭の日、葵に付けて、下りさせ給へる齋院に、女院の中納言の典侍、

去年の今日斯くや祈りし神山に摘みし葵の掛けまくも惜し

返し、皇后宮の辨の乳母、

掛けまくも畏しとこそ祈りしかはかなかりける葵草かな

護持僧にて候ひける山の座主明快、

雲の上に光消えにし其ままに〔拾遺和歌集ニハ二三ノ句光隱れし夕よりトアリ〕幾世と云ふに月を見つらん

内裏邊り御服におはしませば、御簾などもいと怖ろし。上達部、殿上人なども、然ながら椽を著給へり。一品の宮の女房などは、鈍色、香染などをぞ著たりける。何の榮無し。皇后宮の、徒然と昔を戀ひつつ行はせ給ふ。女房など、内裏邊りを戀しう思ひ出づ。春宮は十二におはします。閑院に皇后宮一所におはします。齋宮、齋院も下りさせ給へり。樣樣なる御服姿、いと哀れなり。十七、十五におはしませば、わざとの大人の美くしう細小やかなるにておはします。御容貌ども、いとめでたくおはしますとぞ。梅壺の女御殿は、内大臣殿、數多の御中に、勝れて思ひ聞えさせ給ひければ、今も見奉らせ給はぬ折無く、早旦、晝の隔ても無く渡らせ給ふ。いと匂ひやかに愛敬づき、氣高くめでたき御有樣を見奉らせ給ひて、是れは何處の人にか劣り給ひて行ひもし給ひけるにかと、見奉らせ給ふ。御髮はいとめでたく煩たくおはしまして、御衣の裾に等しくおはします。いとめでたく隙無く掛からせ給へり。卅二三ばかりの人にて、いと盛りにめでたく物せさせ給ふ。院は今年ぞ三十七に成らせ給ひける。御位十年ぞおはしましける。女院の御前には世の中を思召し歎き佗びさせ給ひて、巖の中求めさせ給ひて、白河殿に渡らせ給ひぬ。京極殿をば一品の宮に奉らせ給ひつつ。内の大殿の女御、女院の斯く渡らせ給ひぬるを聞かせ給ひても、

憂しとては出でにし家を出でぬなり何ど故里に我れ歸りけん

とて、打眺めさせ給ふ程、いと哀れなり。秋に成るままに、蟲の聲を聞かせ給ふも、「草葉に掛かる」と思召されて、

夜もすがら鳴き明すらん蟲の聲聞けば友得る心地こそすれ

七月七日に、

今日とても急がれぬかな並べて世を思ひ倦みにし棚機の糸

など打眺めさせ給ふも、いと哀れなり。白河殿の秋の氣色、いみじう哀れなるに、況して神無月の時雨に、木の葉の散り交ふ程は、涙止め難し。殿守の侍從の許に、大膳大夫範永、

往時を戀ふる寢覺や增さるらん聞きも習はぬ嶺の嵐に

いといと哀れに催されて、御前にも、人人いみじう思召さる。又の年の四月ばかりに、御前の花散り果てて、

惜まれし木末の花は散り果てて厭ふ綠の葉のみ殘れる

と、打思召したる氣色、いみじう哀れなり。今の内裏も前前の御有樣變らせ給はず、いみじう哀れに忝く思ひ申させ給へり。山里も寂しからず、萬づの人參り仕うまつり、御乳母子の但馬守高房、美濃守基貞、近江守憲輔など集ひ侍ふ。然らぬ人人も參り仕うまつらぬ無し。殿上人、判官代、藏人など侍ひて、衰へさせ給ふ事も無し。めでたく帝二所の御親にておはしますべきを、御子の定にておはします。いとめでたしと思ひ參らすれど、御自らは「類ひ無く心憂かりける身かな」と思召したり。女房などは徒然のままには、花紅葉に付けても、をかしき事多かり。内裏は京極殿より方塞が

りければ、宮の司に十二月に渡らせ給ふに、雪の降りたる早旦、一品の宮の女房、南殿などを出でて見れば、雪は眞に花と紛ひ、池の氷は鏡と見ゆ。巖にも花咲き、いみじうをかし。御堂の方を見れば、唐繪の心地して見渡さる。庭の雪は消え方に成りけり。木末ぞ盛りと見ゆる。宣旨、出羽の辨に、

賤の男は見るに甲斐無き朝かな又立ち返る行幸〔深雪〕ならなん

出羽の辨、

言の葉の行き〔雪〕も遣らねばなかなかに面白しとも云はでこそ見れ

また人人、

巖にも松にも花ぞ咲きにける斯かる雪見し折は有りきや

赤根さす日より前にも出でて見て消えて悔しき今朝の雪かな

など、色は紛ひぬべきとも、紅梅の匂ひ、鈍色など亂れ來て、見る樣どもをかし。年廻りて、宮の司に出でさせ給ひぬ。人人柳、櫻などこき交ぜたり。殿上の側より下り上らせ給ふ。心の緩び無き道なり。齋宮には故式部卿の宮の姫君、但馬守則理の女の腹に物し給ひける、居させ給ひぬ。齋院に殿の二の宮の居させ給ひぬ。大方には四の宮におはします。然れど三の宮をも高倉殿の一の宮、此三人は聞えさせず。此程に、一品の宮は后に立たせ給ふべけれど、先づ齋宮、齋院の御事定まりてと思召す。内の大殿の中姫君は、奇しく此年頃惱み渡らせ給ふ。現し心も無きやうにて、二十年ばかり癒らせ給はねば、今は任せ奉りておはします。小姫君と聞えさするぞ、上の御方におはしまさせ給ふ。女御代せさせ給ふべかりける。三月晦の日、宮の司燒けぬ。何時しかと、あさましき事を思召す。内裏は内大臣殿の二條殿に渡らせ給ひぬ。一品の宮は、鷹司殿の上、近衛に憲房が家におはしますに、例の渡らせ給ひぬ。怖ろしさも思ひ靜めて見渡せば、花いと面白く盛りなり。東宮におはしまいし折も、此處にいと久しうおはしまして、花の盛りには、人人參り給ひて、鞠蹴など遊ばせ給ひし所なり。出羽の辨、

慰まぬ心は有らじ櫻花姨捨山の月を見るとも

など思ひけり。四月十餘日二條殿へ入らせ給ひぬ。六月には后に立たせ給ふべしとて、然るべき事ども、人人當り思召し始むる程に、世の中の御心地をいみじう煩はせ給ひて、日頃經れど更に癒らせ給はで、いと重くおはしませば、六月十餘日に、三位の里の近きに出でさせ給ひぬ。御祈り數知らず、殿より初めおはしまして、爲殘させ給ふこと無し。二十日の程よりぞ少し宜しう成らせ給ひける。廿五日に后の宣旨下りて、七月十日大饗あるべしなど有る程、此宮には珍しかるべき事にも有らねど、猶漫ろ寒く、めでたし。七月朔日京極殿に渡らせ給ひて、十日立たせ給ふ。然ばかり廣き院の中、露の隙無く女房の局に爲渡し、御給宿、進物所などに、樣樣邊り邊りに爲居たり。院のおはしましにも劣らず、徒らなる屋無く掛け渡し、水の流れも心行き、池の面澄み渡り、松の綠も氣鮮明に見え、いみじう面白く、めでたし。源氏の三條の宮おはせで後、大將昔に劣らず、内の大殿の姫君と、住み滿ちておはする事と云ひた

る心地ぞ爲させ給ひける。光り合ひて、疊東なからぬに、女房どもの髪上げて、皆打出でたるに、殿、内の大殿など、御簾の中におはしまして、古女房の、故宮の御時より侍ふ召使、有るべき作法ども仰せられ、「御髪上げの典侍上れなど云はせよ」と仰せらるれば、辨の典侍參り給へりける、上りて、晝の御座に御倚子立てて、御髪上げさせ給ひておはします。此世の事とも見えさせ給はず。紅の御單襲、白き織物の御衣、裳、白きを奉りて、額ばかり上げておはします御有樣、いみじうめでたし。不備に物し給はん人の、居丈高に髪少なにて、倚子の御座に上り給はんは見苦しうや有らまし。微かなる灯影など、めでたきは著き事にぞ。拜禮など、いとめでたし。池の篝火際無きに、白き鳥どもの足高にて立てるも、葦手の心地して、をかし。博士の命婦參りて、人人御簡に附け、御髪上げなどする、猶いと殊なる事なりや。其夜の御饌參る。御給仕は殿の上、宮仕うまつり給ふ。藏人六人髪上げて參る。女房は其夜は朽葉の一重襲、桔梗の上衣、女郎花の唐衣、萩の裳、又の日は紅の一重襲、女郎花の上衣、萩の唐衣、紫苑の裳、又の日は桔梗、朽葉、女郎花、紫苑などを、六人づつ織り、一重襲やかて同じ色の織物の上衣、裳、唐衣は映えぬべき色どもを更へ續きたり。樣樣の浮線綾、二重紋など、心心に競みたり。色許されぬは、黄金して、螺鈿し、繪書き、繡物など、いみじう物狂ほしきまで爲盡したり。筋遣り、口置き、袴の硬きに、黄金して繡物にも、打袴を爲たる人も有り。其心ばへ有る歌を繡物にしたり。劣らじと競みたり。内裏の御使に四位新少將良基參れり。寢殿の西の端にて御返り待つ程は、人人と物など云ひて。殿、内の大殿を初め奉りて、日毎に三日の程參らせ給ふ。八月十七日内裏へ入らせ給ふ。伊豫守範國が、女房の局に云ひたる。

かねてより空の氣色ぞ著かりし降る跡に立つ紫の雲

是れならねど、斯樣の事は多かり。其年の春、小野の宮の右の大殿亡せ給ひにけり。九十をしも待ち給へる心地してれ哀れなり。長しとても終には斯くこそはと見えたり。大宮の民部卿是れを聞き給ひて、

玉の緒の長き例に引く人も消ゆれば露に何か異なる

と述給ひけり。斯くて八月には内裏に參らせ給ひめ。行啓見ける人の、

雲の上ぞ思ひ遣らるる秋の月光を添へて入ると見えしに

と女房の云ひたりける。曇り無くめでたき藤壺の御裝飾、何どてか疎かならん。菊の色色に濃き打ちたる、蘇芳の唐衣など著つつ侍ふ。御禊、大嘗會など、例の事なり。内の大殿は、今は右の大殿と聞えさす。大將殿、内大臣に成り給ひぬ。右の大殿の姫君、女御代に立たせ給ふ。作法、有樣、前前に異る事無し。いとめでたし。五節、臨時祭など、例の作法にて過ぎぬ。正月など、いとめでたし。白河殿には盡きせず昔を戀ひさせ給ひつつ、行はせ給ひておはします。天狗など煩かしき邊りにて、いみじう煩はせ給ふ。人人も次ぎて煩ひ、亡くなりなどして、いと憂たて有れば、「斯くてのみは如何が」と、殿など申させ給へど、聞し召し入れぬに、いと久しう、限りに成りて煩はせ給へば、「後の世いとあいなき事なり」と、殿の促めて申させ給ひて、四條なる美作守の家に出でさせ給ひぬ。然ても猶暫しは煩はせ給ふ。斯くて右の大殿の

姫君、内裏に參らせ給ひぬ。京極殿なれば、いと狹し。琵琶彈かせ給ひ、繪などいとめでたく書かせ給ふ。男繪など、繪師耻かしう書かせ給ふ。故故しう、をかしうおはします。御容貌もいとをかしげなり。愛敬づき、ふくらかに、細小やかにぞおはしましける。まことや、内裏に歌合せさせ給ひき。また女御殿も參らせ給はざりしに、十月晦日と有りしかど、延びて霜月の九日なり。殿上人左右に分たせ給ふ。文臺は黄金の洲濱に、黄金の五葉に、黄金の蔦、色色に彩りたる掛かりたる、いとをかし。師基の兵衛佐書きたり。右は黄金の透箱に、硯の箱と思しきに、草子どもを入れたり。歌の心ばへを、題に從ひつつ、下繪に書きたり。手は右の大殿の因幡の乳母、錦の表紙、次のは黄金の表紙を磨きたる、白栲に遙遙と見えて、山の立たずまひ、水の流れは微かなり。黄金を結びて、玉を紋に爲など、樣樣なる表紙、貴にをかし。黄金の硯、瑠璃の硯の瓶、筆、墨まで、いみじう盡したり。員指の洲濱どもなど、心心にいとをかし。中宮の女房まで紅葉を織り盡したり。打物、織物、斑濃など、心心にいとをかし。羅に打ちたるも、透かしたるも、繡物、銀の水遣り、紅葉の散り交ひたるなど、いとをかしく艶かし。菊の織物の御几帳ども、押し出で渡しておはします程こそ出ださね、少し差し退きて、好き程に押し出でたる衣の裾、袖口、いと目も驚きて見ゆ。菊の折枝、葛の紅葉、鏡の水など押したるが、羅より透きたる、打目に耀き合ひたる灯影、いみじうをかし。紅の打ちたるを中重にて、葛の形に彫りて、青きを下に重ねて、香染の羅に紅葉を透かし、裳の腰など、いみじうをかし。唐衣に紅葉を分けて出づる月、おどろおどろしうをかし。大井川、戸無瀬の瀧など爲たる人も有り。歌は皆書き留めず。女臺、打敷などの有樣も、樣樣の同じ事のやうなればなん。唯だ有る事を少しづつ書き付けたるなり。高陽院殿の歌合に細かなれば、同じ事のやうなれば。また鶏合とて、洲濱を造りて、鶏を造り合せたる形、いとをかし、樣樣にをかしき事多かる御時なり。御音樂を好ませ給ひ、花合、菊の宴など、をかしき事を好ませ給ひて、盛りの御世なりけり。無量壽院に關白殿の御堂建てさせ給へれば、供養に、女院、鷺司殿の上渡らせ給ふ。一の宮、殿の上具し奉らせ給ひて渡らせ給ひ、中宮も出でさせ給ふ。内裏よりやがて晝出でさせ給ふ。前前舊りにし事なれど、猶めでたき事になん。櫻櫻、皆織物なるが、裏打ちたる六つばかり、御裳、唐衣奉りておはします御有樣、えも云はずめでたく見えさせ給ふ。御輿の後には、やがて三位侍ひ給ふ。皆紅の打ちたる、櫻の織物の上衣に、其折枝織りたる藤の織物、櫻、萠葱の唐衣、皆二重紋にて、折枝氣鮮明に織りたり。女房は櫻どもに、萠葱の打ちたる、山吹の二重織物〔の脱カ〕上衣、藤の唐衣、萠葱の裳に繪書き、繡物し、螺鈿し、口置きなど、目も彩に、「心の行きて」など云ふ歌を、黄金の具の小きを造りて、歌繪にて、櫻の咲きこぼれたる繪を書きたり。珠を貫ける青柳など、いとをかし。また裝飾の繪を爲て、帳臺、唐櫛笥、晝の御座の繪を爲たる人も有り。「花の鏡と成る水は」とて、いとをかしげなる鏡を池に押したる人も有り。更に更にえ云ひ盡すべくも有らずなん。袴は皆打ち、口置きたり。殿の宮には、女房色色三つづつ匂はして十五に、紅の打ちたる、萠葱の織物の上衣なり。いみじう綿薄く、目も彩に清淨なり。是れもいとめでたく、目も及ばぬ事ど

も多かり。宮の上、殿の上と、三所おはします。殿の上は白き御衣どもに、紅の唐綾を上に奉れり。姫宮の御前には、櫻の匂ひを皆織物にて、紅の打ちたる藤の織物の御衣、萌葱の小袿奉りたる有樣、貴にめでたく、云ふ方無く見え給ふ。式部卿の宮の上は、尼にておはします。彼方には女院、中宮、鷹司殿の上おはします。二所ながら一向にぞ削ぎ捨てさせ給へる。二所尼にておはしませば、北の政所は宮のいと耻かしげにて御覽ずれば、いとど耻かしと、耻ぢ奉らせ給へるものから、御衣は寒くやおはしますらんとて、「我が御衣を奉れ」など申させ給ふ。忘れ奉らせ給はざりけるにこそ。御年の積りに、久しう見奉らせ給はねば、如何がと思ひ參らするに。大方の儀式、有樣、云ひ盡すべき方無く、めでたし。事果てて還らせ給ふ。また樣樣の御贈物どもなど、思ひ遣るべし。斯くて內裏に、內の大殿の三の姫君參らせ給ふべしと云ふ事出で來て、御調度の事書き立てて、思し準備ぐ程に、俄かに關白殿に姫君おはしましける、やうやう大人びさせ給ひけるを、上に祕み申させ給へるを、然のみやはと思召しければ、內裏に參らせ奉らせ給ふ。內の大殿は聞き給ひて、競ひ顏にやとて思し止まりぬ。內裏燒けにしかば、京極殿に猶おはします。然るべき人人の女競ひ參り、いみじうめでたし。殿の斯く御心に入れさせ給へる事と思ふべかめれば、愛護く人の女、妹、參らぬ無し。女房の裝束など云ひつくすべき方無し。公信の左兵衛督の女の御腹の、故藤民部卿の女參り給へり。實基の中將、今は尾張守と云ふが女、源民部卿の子の信濃守の女など、君達の女いと數多參れり。其れならぬも多かれど書かず。諸大夫の女などは、數へ盡すべくも有らず。師走に參らせ給ふ。裝束など數も知らず。母上は三條殿とぞ聞えさするも侍はせ給ひて參らせ給へり。めでたしなども世の常なり。二月に后に立たせ給ふ。中宮こそは上がらせ給ふべけれど、「唯だ斯くて有らん」と申させ給ひければ、今后を皇后宮と聞えさす。三條殿をば、內內に、故中務の宮の女に候ふとぞ申させ給ひける。尼上の然る物憎みを爲させ給ひければ、片腹痛がりて、紛らはして、中務の宮の御子の因幡守の女とて侍はせ給ひけれど、今は何事の愼ましうてかは忍ばせ給はん。めでたしなども世の常なり。大方の世の覺えのみにも有らず、御覺えもいみじうおはしませば、殿も甲斐あり、嬉しく思召す。東三條殿に出でさせ給ひて、后に立たせ給ふ日の有樣、云ふべき方無し。然らぬだに、いとど有る殿を、掃ひ磨かれたる、云ふ方無くめでたし。殿の、立ち居思召し準備がせ給はんに、贈かめ草木は如何でか有らん。女房の裝束などは世の常の事なれば、細かにも云ひ立てず。めでたさ限り無し。上達部の立ち並びて拜し奉り、御髮上げさせ給ひて、倚子の御座におはします程なと、云ふ方無くめでたし。宮にも參り給へる典侍ぞ御髮は上げ奉らる。唐の御衣など參りたる御有樣の、有り附きておはしましつる事など語り給ふ。斯くて程も無く參らせ給ひぬ。大夫には隆國の中納言、權大夫には經任の中納言、亮には祐宗の頭の辨、大進には丹波守高房、憲房の尾張守、今一人は源民部卿道方、藤民部卿の女御匣殿、內侍には定親の右大辨の妹など、樣樣なり。經通の帥の中納言の女も參り給へれど、打解けても候ひ給はず。宣旨も里ながら參り給はで成り給へるなりけり。經長の源中納言の御妹なり。大人びて有心に物し給ふ人にて、え仕うまつらじと申し

給ひけれど、外ながらも、「參れ、參れ」とて、成させ給へるなりけり。人人いとど參り集まる。然るべき月夜、花の折過ぐさず、殿上人參りて、歌詠み、御音樂など常に有り。めでたしなども疎かなり。覺えもいみじうおはします。中宮も幼なくより、並ぶ人無くておはしましかば、睦まじく、哀れにやんごとなき方にも思ひ申させ給へり。殿も此御方の御事をば、忝く、心苦しう思ひ聞えさせ給ひて、有りしにも變ること無く仕うまつらせ給ふ。右の大殿ぞ、いみじう思し歎かせ給ひて、籠り居させ給ふ。女御殿も里におはしまさせ給ひ、后の御事を思し絶えさせ給ひめるが、いと口惜しう、あさましく思召さるるなるべし。東宮には左兵衛督の姫君、東宮の大夫殿の御子にし率り給ひ、參らせ率り給へり。御容貌の名高く物せさせ給ふ。女宮一所出でおはしましたり。まことや、右の大殿の女御殿は、まだ皇后宮の參らせ給はざりし折、尋常ならず成らせ給ひて、中宮大夫の三條に出でさせ給ひにしかば、殿も皆其處におはしましかば、梅壺の女御殿は獨り殿におはしまして、

行き返り故里人に身をなして獨り眺むる秋の夕ぐれ

など獨言たせ給ふ。若宮は亡せて生れさせ給へりとぞ。内裏にも殿にもいみじう歎かせ給ふ。殿の上の御姉妹の前齋宮、右の大殿に婚はせ奉らせ給はんとすと聞えし事も皆聞え止みにたり。右の大殿世の中を思し歎きて、山里に籠り居なんなど思して、然る即心設けさせ給ふと世にも聞ゆ。斯く思すも道理にいとほしく、梅壺の女御殿も、後朱雀院の御時に本意無くて止ませ給ひにき。道理にいとほしき事も思召して、准三宮に成らせ給ひて、年官年爵など得させ給ふ。内裏には根合せさせ給ふ。左頭資綱の頭中將、右頭四條中納言の子經家の辨、若く華やかに覺えある人人なり。左右二十人づつ分きて、えも云はぬ洲濱の垣根を尋ねつつ、まだ知らぬ小泥に下りつつ引き出でたる、一丈三尺の根なども有りけり。また臺、打敷、華足などの有樣、云ふべきにもあらず。中宮、皇后宮など上らせ給へり。中宮の女房の裝束は、唯だいと麗はしく、殊更に菖蒲の衣を打ちて、瞿麥の織物の上衣、萠葱の唐衣、棟の裳なり。皇后宮のは菖蒲、棟、瞿麥、杜若など黄金して花鳥を造り、口置き、いみじき事どもを盡させ給へり。折折に付けて、をかしき事のみ多かり。

永承六年五月五日殿上歌合

一番　左持　菖蒲　　左馬頭源經信朝臣

萬づ代に變らぬものは五月雨の雫に香る菖蒲草かな〔金葉和歌集ニハ五句菖蒲なりけり〕

右　　少納言源信房〔後拾遺和歌集ニハ良暹法師トアリ〕

託馬江の底の深さを外ながら引ける菖蒲の根にて知るかな

二番　左持　郭公　　權左中辨藤資仲

ほととぎす唯だ一聲に過ぎぬればまた待つ人に成りぬべきかな

右　　左近中將源顯房

うたた寢の夢にや有らん郭公またとも聞かで過ぎぬなるかな

三番　左勝　早苗　藏人修理亮藤惟綱〔拾遺和歌集ニハ隆資トアリ〕

五月雨に日は暮れぬめり里遠み山田の早苗採りも果てぬに

右　少納言源信房

さ少女の山田の代に下り立ちて急げや早苗室の早早稻

四番　左持　祝　式部大輔藤國成朝臣

秋の空出づる月日〔此二句新續古今和歌集ニ天の原めぐる月日〕のさやかにも萬づ世澄める雲の上かな

右　左近中將源資綱朝臣

春日山枝さし添ふる松の葉は君が千年の數にぞ有りける

五番　左勝　戀　相模

恨み佗び千さめ袖だに有るものを戀に朽ちなん名こそ惜しけれ

右　右近少將源經俊朝臣

下燃ゆる歎きをだにも知らせばや燒火の神のしるしばかりに

いとをかしくて過ぎぬ。皇后宮の御兄人の若君とておはしましつる、御元服せさせ給ふ。五月に駒競の行幸あるべしなど云ふ程に、俄かに三條殿亡せさせ給ひぬ。日頃惱み渡らせ給ひけるぞ、あさましく哀れなる御事なりや。皇后宮其夜さり出でさせ給ひぬ。いみじう思召し歎かせ給ふ。此頃は內裏は冷泉院にぞおはします。御葬送の程の事どもなどいみじう、斯かるに付けても、殿の思召し掟てさせ給ふ程めでたし。御四十九日果てぬれば、宮入らせ給ひぬ。哀れに戀しう思ひ出で聞えさせ給ふ。其年の七月に、內裏の御前御瘧病のやうに爲させ給ひて、いと甚く煩はせ給ふ。七月二つ有る年にて、暑ささへいと理無し。御修法、御讀經など有るべき限りなり。殿を初め奉りて、退かでさせ給ふ事も無くておはします。御物の怪ども移りて樣樣の名告りし、左大臣殿、冷泉院など、率爾事する御物の怪あり。石神とて、斯くて候へば、候ひにくきとて、常に出で來喧騷る。斯くのみおはしませば、高陽院殿に渡らせ給ひなんとする事二十日と定まりぬ。十六七日より宜しく成らせ給ひぬ。斯樣の御有樣は如何でかは憑り付き參らせんと思へど、眞にや有りけん、宜しく成らせ給ひぬ。二十日御裝束直よかに、いと麗はしくて渡らせ給ひぬ。いとあさまし。其夜中宮渡らせ給ひぬ。皇后宮、女御殿、二三日ばかり有りて入らせ給ひぬ。高陽院殿の有樣いと面白くをかし。西の對を例の清涼殿にて、寢殿を南殿などにて、小寢殿とて又いとをかしくて差し並び、山は眞の奧山と見え、襲木暗き中より落ち、池の面遙かに澄み渡り、左右の釣殿など、尋常ならずをかし。秋深く成るままに、紅葉の淡き濃きも、錦を引けるやうなり。今年の夏、鷹司殿の上亡せさせ給ひたれば、五節なども何の榮無くて過ぎぬ。臨時祭ぞ中宮上らせ給ひて御覽ずる。衣なども打出でず、例のやうにも無し。朔日の有樣など例の作法なり。あさましき事は正月八日また燒けぬ。冷泉院に內裏、中宮と渡らせ給ひぬ。皇后宮は承香

殿と思しきにおはします。中宮は上の御局におはします。斯く旅におはします程は、殿上人、近衛司は、胡籙負ひたるもいとをかし。斯くのみ有るを、あさましと思召し歎かせ給ふ。是れより三月十餘日に四條の宮に渡らせ給ひぬ。狹く暑かはしき心地す。北の對を、馬道明けて、西には中宮、其方の廊掛けておはします。東には皇后宮おはします。相撲なども清涼殿にて中宮は御覽ず。儀式、有樣、然る方に見所あり。裸なる姿どもの並み立ちたるぞ疎ましかりける。御前に堤築きて、月日山など有りけり。女房誰れにか、

浪の上池の堤は高くとも月日に如何で近くなるらん

と詠みけり。皇后宮は東なる屋にて御覽ず。斯くて九月に京極殿に渡らせ給ひぬ。師走の八日また燒けぬ。餘りに成りぬる事は云ふべき方ぞ無かりける。內裏は民部卿の三條に、女院もおはしますに渡らせ給ひぬ。中宮は權大夫の大炊の御門に、皇后宮は殿に出でさせ給ひぬ。一條院に冷泉院移し造らせ給ひて、御渡り同じ月の廿七日、東には皇后宮、北の藤壺と思しきには中宮、西の南に寄りて女御殿などおはします。世の中斯く物騷がしきやうにて過ぎぬ。皇后宮常に御物の怪に惱ませ給ふ。御祈り殘る無し。殿の少將殿、斷時祭舞人せさせ給ふ。いみじう美くしうて舞はせ給ふに、唯だ打見奉る人だに涙ぐまるるに、殿は況して、三條殿の、斯樣におはしますを見奉り給はぬ、哀れに思召さるらんかし。如何なりしにか、御簾の中にて、女房の中にて御覽じき。內裏の御心いとをかしう嫻びかにおはしまし、人を荒めさせ給はず、めでたくおはします。折折には、御音樂、月の夜、花の折過ぐさせ給はず、をかしき御時なり。辨の乳母をかしうおはする人にて、生し立て習はし申し給へりけるにや。また一條院燒けにしかば、高陽院殿を內裏の定に造らせ給ひて渡らせ給ひぬ。內裏造らせ給へれど、然るべき折に渡らせ給ふ。此頃殿の少將殿は中納言中將にて物せさせ給ふ。まだきより色におはしまして、忍び歩りきいみじう爲させ給ふ。皇后宮の小少將と云ふ人尋常ならず成りて、男君生み奉りたれば、初めたる御子にて、殿聞し召して產養せさせ給ふ。心殊に持て成させ給ひて、若君なども御覽じけり。まことや、右の大殿は終に殿の齋宮におはしまし初めぬ。長びさせ給へれど志淺からでおはします。上は亡せさせ給ひしなり。上東門院は東宮に齋院參らせ奉らせ給ひき。其程の御有樣、殿達居扱ひ奉らせ給ふ。右の大殿、內の大殿、皆同じ心に參り仕まつらせ給ふ。故院の御事を疎かならず思すなるべし。東宮大夫の滋井の女御殿、男御子一所、女宮三所四所おはしまして、いと頼もしくめでたく見えさせ給ふ。內裏邊りの御有樣いと長閑やかに、有るべき程にておはします。中宮いとめでたく、昔より內裏邊りにおはしまし慣れ、人人も持て付け易くおはします。內裏にも此御方の御事をば、やんごとなく心苦しう思ひ申させ給へり。皇后宮にも好き女房參り集まり、華華とめでたくおはします。御覽えも時世に隨ふのみにあらず、いみじうおはします。小一條院の左の大殿の御腹の姫宮も參らせ給へり。今の人は宮仕し給はぬ無けれど、是れぞいとあさまし。關白殿の御女、太政大臣のなどは、故中宮にも皇太后宮にも侍ひ給ひき。花山院の御女ぞ女院に侍ひ給ひしかど、其れは御乳母子の御腹にて、然ても宜しかりき。是れはいとやんごとなく、斯かる類ひは又無かりつる事なり。女御殿いと重りかに故故しくておはし

ます。五節に女房、梅どもに濃き打ちたる、青摺の裳、唐衣など著させ給へり。端下者、女房の局の人など、をかしく爲立てつつ、沓磨り歩りく。四條大納言の名殘をかしく、故ある御方と人思へり。梅壺の女御殿は尼に成らせ給ひて、いと尊く行はせ給ふ。御功德の事殘させ給ふ事無し。此世の事を思召さぬには、后の位を何とか思召さん。凡常の人だに眞の心を見んには心留まるべきにもあらず。況して然ばかりの御心に、世を徒にのみ思召されんには、九品の御望こそ深くは思召さるべけれ。殿の大納言、五節出ださせ給ふ。皇后宮の女房、中臈、下臈の卑賤なきどもを出ださせ給ふ。我はと思ふ際のは出ださせ給はず。裝束、有樣、云ふ方無し。此御時には制ありて、衣五つなど有れど、嚴しからねば、然るべき所所には、いみじく爲させ給ふ。後一條院の御時こそは斯かりしか。女房、童女、下仕の裝束、人人當りて心を盡すとも疎かなり。中宮より童女の裝束奉らせ給へり。紅の打ちたるに、菊の二重紋の其折枝織りたる袙、蘇芳の汗衫、龍膽の上の袴、皆二重紋なり。打ちたる袴など例の事なり。瑠璃を紋に押しなど、いみじう盡されたり。世の中に珍しき五節の有樣なり。童女なども人の程異なるを撰らせ給へり。此御時はをかしき事多く、御心遣りてなんおはしましける。御心ばへめでたく和らかにをかしくおはします。中宮幼なくより限り無き御志にて、人の御程、女院の同じ如生し立て奉らせ給へる、樣樣に疎かならず、忝く心苦しく思ひ聞えさせ給へるに、御方方に參らせ給へれど、更に御覽じ入れず、物憂しき御氣色にもあらず、外の事に思召して、貴に氣高く、聞し召し入るる御氣色にも有らねば、いとど哀れに有り難く思ひ申させ給ひて、何事も先づと、此御方の御事をば思召したり。皇后宮、然らぬだに殿思召さん所あれば、疎かに持て成し聞えさせ給ふべきに有らぬを、御志淺からず、いとめでたし。御心ばへも飽かぬ所無く、めでたくおはしますべし。女房なども、華華とをかしう、はかなき事も故故しう、女房の中らひにも、をかしき事多かり。女御殿もいと嬪やかに心にくくて侍はせ給ふ。斯く方方に御心の隙無きやうなれど、和らかに持て成しつつおはします。上らせ給へど、頓みにも上らせ給はず。斯く方方に心病ましき世の中を思召し立たせ給ひて、安らかならぬ御持て成し、をかしうなん有りける。右の大殿の大納言は、高松殿の御壻に成らせ給ひしかば、山の井大納言と聞えさす。上は小一條院の姫宮におはします。貴に纖麗に、めでたくおはします。殿の御行方も知らせ給はず。然るべき所歩りかせ給ふにも、露の御氣色も洩らさせ給はずなどぞ物せさせ給へば、御乳母達などは「餘りにおはします」とて聞えさせけれど、掛けても斯く申す人をば物憂しき者に思し述給はす。然りとて疎かなる御心にも有らず、忝く疎かならぬものに思ひ聞えさせ給ひて、然るべき宮仕人などの許におはしませど、夜など留まらせ給ひ、心長閑かに同じ所へなどおはしますこと無し。源大納言殿の姫君を、幼なくおはしましより子にし奉らせ給ひて愛護き奉らせ給ふ。東宮に參らせ奉らんと思召しけれど、齋院やんごとなくておはします。東宮大夫殿の女御殿、御子達數多が御親にて、御志も疎かなら で侍はせ給へば、樣樣隙無き世に、なかなか心盡しに見ゆる事をと思して、殿の大納殿をおはしまさせ給ふ。儀式、有樣、世の常ならず。三月二十日の程なり。濃き淡き二つづつ反對の色なる十二、紅の打ちた

る萌葱の織物の上衣、蘇芳の唐衣などなり。日毎に更へて、三日の程、いとめでたし。四月十日露れさせ給ふ。瞿麥に濃き打ちたる、蘇芳の織物の上衣、青朽葉の唐衣など有れど、心心に、菖蒲、楝など、折に合せたる色色を盡して、二重織物、打物、織物など樣樣に盡したり。祭には引き續き物御覽ずるもいとめでたし。女房車乘りこぼれて、事成りて所も無きに、裝ほしく華やかにて、固より有る車ども押し消ちて立ち並び御覽ずる、清少納言が云ひたるやうに、めでたしと見ゆ。其又の年内大臣に成らせ給ひぬ。殿、太政大臣に成らせ給ひて、右の大殿左に、内の大殿右に、次次成り上がらせ給ふ。御喜びの程など、いみじうめでたし。また五節出ださせ給ふ。此度は唯だいと端麗しくて、一日は紅梅に龍膽の打ちたる、龍膽に紅梅の打ちたるなどなり。殿の御有樣のいと長閑やかに耻かしげに、清げに物せさせ給ふに、御心ばへさへ飽かめ事無く、御才などおはしまし、萬づに優れさせ給へるを、「榮華」の上の卷には、殿の御子はおはしまさずと申したるに、斯く樣樣にめでたく、世の固めと成らせ給ふべき一の人達出でおはしましけるものを、色めかしく浮華におはしますも、若き折に、然物せさせ給はぬ人やは有る。然ればこそ、をかしく艶めかしき事も出で來れ。いと端麗しきは荒涼まじく直よかなりかし。内裏の上も、いと嬌やかに、をかしくおはします。東宮は端麗しく嚴しきやうにおはしませど、才おはしまし、歌の上手におはします。女房なども御覽じ放たず。近江守實經の君の女侍ひけるも、男御子生み奉りたりける、四つ五つにて亡せ給ひにき。伊勢が心地ぞ爲ける。内の大殿に大饗あり。女房色色に、萠葱の二重紋の上衣、櫻襲染の二重紋の唐衣など打出でたり。然らぬ女房も四十人ばかり、心心に裝束き、參り集まれり。内裏には三月に櫻の宴など云ひて過ぎぬ。五月には馬場殿にて駒競せさせ給ふ。東宮渡らせ給ひて御覽じなど、いとめでたし。相撲など騒がしうて過ぎぬ。九月十三日、月の夜の常ならぬに御音樂あり。二位中納言箏の琴、政長の少將笛など、いとをかし。夜更くるままに、月澄み上り、遣水の例よりは廣く流れたる、いとをかし。内の大殿御年の程よりもいと長閑やかに大人しく、耻かしげに物せさせ給ふ。御才などもおはしまし、然るべき折折の公事などにも、年大人び給へる人だに、自ら過まり給ふ事も有るに、事の作法など、めでたく目易く爲させ給ふとて、大人び給へる上達部など愛で申し給ふ。御容貌いと清げに氣高き御有樣なり。俊家の二位中納言いと華やかに清げに、美貌人と見え給へり。堀河の右の大殿こそは、美貌の名取り給へりしかば、此殿ばらも、皆いと好く物し給ふなるべし。内の大殿、

多ならでさやけき月に瀧つ瀨は音はせねども氷しにけり

澄む水にさやけき影の映ればや今宵の月の名に流るらん

千代までに澄むべき水の流れには月も長閑けく宿るなりけり

岩間より流るる水に月影の映れるさへぞさやけかりける

二位中納言俊家

中納言能長

二位中將祐家

例の殘りは止めつ。流れて早き月日にて、過ぎもて行けば、五節に中宮の女房、「梅雜舌を含んで」と云ふ詩を裝束きたり。梅の織物、香染、紅梅の紅に匂ひたるなどなり。「綠の文を帶びたり」とて爲たる、綠

の衣著たり。殿上人誦んじなどして、いとをかし。唐衣の紐などに、やがて此詩を結びたり。八重紅梅の唐衣など、色色にをかし。臨時祭、上らせ給ひて御覽ず。皇后宮は下の御局なるにも御覽ず。清涼殿のやうに近ければ、やがて御前の事も見ゆればなるべし。拜禮は正月には中宮、皇后宮代り代りに、年を更へつつなん大饗は有りける。皇后宮、歌合せさせ給ふ。左春、右秋なり。裝束も、やがて其折に從ひつつぞ爲たりける。正月なり。其日に成りて、左の人人、春の色色を織り盡したり。種種の紅梅どもに、紅の打ちたる、蒲葱の二重紋の〔上衣脫カ〕紅梅の象眼の唐衣、薄色の二重紋〔の裳脫カ〕。伯耆、松の葉襲、青き打ちたる、同じ色の二重紋に、松の枝織りたる、唐衣は地は白くて紋は青き象眼の二重紋の唐衣。淡路、梅の三重織物の上衣、皆打ちたり。紅の打ちたる、梅の二重紋の裳。內侍の女、裏山吹ども三つにて、一重ども皆打ちたり。蒲葱上衣、樺櫻の二重紋の唐衣、梅の二重紋の裳。內侍の女、裏山吹ども三つにて、一重ども皆打ちたり。蒲葱の打ちたる、山吹の二重紋の上衣、同じ色の無紋の唐衣。今五人、南の廂に居分かれたり。式部の命婦、躑躅どもに、蒲葱の浮線綾の唐衣。源式部、藤どもに、紅の打ちたる、二藍の二重紋の上衣、絲遊の裳、唐衣。新少納言、同じ藤の匂ひに、紅の打ちたる、藤の二重紋の上衣、同じ色の無紋の唐衣、池の藤波、唐衣には咲き掛かりたるを、歌繪にいとをかしく書きたり。女、山吹を打ちて、山吹の織物の上衣、絲遊の裳、唐衣。內大臣殿の御乳母、柳どもに、紅の打ちたる、柳の二重紋の上衣、裳、唐衣も同じ事なり。近江の三位、紅梅の淡きを皆打ちて、上衣、裳、唐衣、皆二重紋、御帳の側の方に參りて侍ひ給ふ。內侍、事事しからぬ薄紅梅どもに、赤色の唐衣。小式部、梅の匂ひに、濃き打ちたる、紅梅の上衣、蒲葱の唐衣、薄色の裳なり。右十人は東面に南の戸口に、因幡、色色を皆打ちて、青き織物に、色色の紅葉を皆織り盡したり。蘇芳の二重紋、浮線綾の唐衣。出雲、下衣、同じ紅葉を打ちて、上衣は赤地錦、薄青の二重紋の唐衣、袴も同じ紅葉の打ちたる、上衣も白き。土佐、是れも同じ紅葉の打ちたる、香染の二重紋の上衣、秋の花の色色を盡したり。紅葉の淡き濃き二重紋の唐衣、上衣、大井河の水の流れに、洲濱を鏡にて、花の色色の影見ゆ。袴は戸無瀨の瀧の水上、下、紅葉の散り交ひたる、いとをかし。三日月の形に鏡をして、綠の羅の上衣、浪の形を結び掛けたり。美濃、色色の錦の衣八つ、裏皆打ちたり。象眼の綠の裳、紺瑠璃の唐衣、是れも大井河を移したり。皆置口して、袴同じ。五重の打ちたる、上に二重紋の上衣。筑前、同じ紅葉の打ちたる、上に黃なる二重紋の織物の上衣、無紋の朽葉の唐衣、秋の野を織り盡したり。袴同じ樣なり。今五人は菊の色色なり。遠江、皆上は白き、裏を色色に移ろはして、紅の打ちたるに、白き織物の上衣、女郎花の唐衣、薄の裳。侍從、上は淡き蘇芳、裏は色色移ろはしたり。紅の裏に蘇芳の織物の上衣、女郎花の唐衣、萩の裳、袴、何れも同じ如打ちたり。下野、菊の織物どもに、紅の打ちたる蘇芳の唐衣、紫の末濃の裳、鏡に葦手に玉を貫き掛け、繪書きなど爲たり。袴、二藍の上衣。平少納言、菊の移ろひたるに、二藍の上衣、草子の繪にて、斑濃の絲して、玉を總角に結びて、「後撰」、「古今」と織れり。黑き絲して、左も右も其色の花どもを造りて上に押したり。右は綿入れず。紅葉の人達、瑠璃を延べたる扇どもを差

し隠したり。挿櫛に、物忌、絲して、紅葉、菊にて附けたり。美濃の君、唐衣に黄金を延べて、「霞降るらし」と云ふ歌をも摺りたり。左の人人檜扇どもなり。衣には皆綿入れたれど、上衣、裳、唐衣は多のにてなん有りける。右には櫻人と云ふことを銀の洲濱にて、歌書く者は草子十帖、銀、黄金、浮線綾、象眼を畫して、二つづつ銀、黄金の絲を紋に結びて、玉を紋に居ゑたり。歌書くべき草子どもに、此題の心ばへを、男繪、女繪と書きたるに、兼行ぞ歌は書きたる。歌を旨としたる事に、何ど悪ろき者に書かすべき。繪書きいみじき者に書くべきなりと、左の人人非難きけり。員指は鶴を松に栖ませたり。歌は卷物二つにて、黄金の表紙、玉を貫きて紐にしたり。繪は是れも題に從ひて書きたり。經任の中納言、權大夫の母北の方書き給へり。九十餘の人の、然ばかり塗り固め書きたる繪に、つゆも墨涸れせず書き固め給へる、あさましうめでたし、員指は七月七日の棚機祭の形、細かにいみじう造りたり。左の方人左大臣殿、右の方人にて物し給ふ右の大殿定め給ふ。左の大殿おはします。員指は俊家の二位中納言の子、太郎、二郎二人ながら角髪結ひておはす。殿上の人人、左には源大納言の頭中將、右には、やがて舅の隆俊頭中將。源中將は人に返さるべくもあらず、歌の善さ悪しさを定め、いと美くしうぞ物し給ひし。「故き事には、とこそ有れ、斯くこそ有れ」と、右の頭を能く云ひ追ひ貶し給へば、「あはれ利き給へるロかな」と、上達部、殿上人褒め申し給ふ。左には内裏の御製ありけり。此方、彼方劣らじと定め給ふ。民部卿、右の大殿、中宮亮兼房など云ひ定めさせ給ふ。然れど御製ありと聞きて、何れと知らねば、甚くもえ云ひ返さぬ。諍ひするやうなりしこそをかしかりしか。

左勝　臨時客　内裏の式部命婦

春立てば先づ諸人も引き連れて萬づ代經べき宿にこそ來れ

右　八月十五夜月　伊勢大輔

曇り無き空の鏡と見ゆるかな秋の夜長く照す月影

左勝　春日祭　籠永

今日祭る春日の山の神ませば天の下には君ぞ榮えん

右　七夕祭　土佐

萬づ代に君ぞ見るべき棚機の行き合ひの空を雲の上にて

左勝　櫻　右大臣殿

春雨に濡れて歸らん〔金葉和歌集ニハ尋ねん〕さくら花雲の返しの嵐もぞ吹く

右　駒迎へ　下野

引く駒の數より外に見えつるは關の清水の影にぞ有りける

左　鶯　宮大夫（隆國）

山里の垣根に春や著からん霞まぬ前に鶯の鳴く

右　萩　美濃

折りや爲ん折らでや見まし秋萩に露も心を掛けぬ日ぞ無き

左勝　子日　頭中將

何れをか分きて引かまし春日野のなべて千年の松の緑を

右　雁　伊勢大輔

小夜深く旅のうら〔後拾遺和歌集ニハ空〕にて鳴く雁は己が羽風や夜寒なるらん

左持　梅　相模

岩間洩る水にぞ宿る梅の花木末は風のうしろめたさに

右　小山田　伊勢大輔

秋の夜の山田の庵は稲妻の光のみこそ守〔洩〕り明しけれ

左　青柳　宮内侍

皆人の心に掛けて來る〔繰る〕ものは岸に浪寄る青柳の糸

右勝　紅葉　民部卿

大井河瀧つ瀬も無く秋深み紅葉の淵と成りにけるかな

左　殘雪　但馬

花ならで折らまほしきは難波江の蘆の若葉に降れる白雪

右　菊　民部卿

紫のまだ飽かざりし二葉にも菊に心は染めてしものを

左勝　祝　内の御製（源三位に代らせ給へる）

長濱の眞砂の數も何ならず盡きせず見ゆる君が御代かな

右　宮大夫（隆國）

住の江に生ひ添ふ松の枝毎に君が千年の數ぞ籠れる

などぞ有りける。明け行けば事果てて、大臣、大納言、次次の人人、物被きて退かで給ふ。織物の裳、唐衣、細長、常の御衣どもなど被き給ふ。云ひ盡すべくも有らずなん。世の中の往き換り、人の御幸ひなど昔物語のやうなる事ども有るを、幼なき人などにも、斯かる事こそは有れとも見せんとて書き留むれば、近き程の事は、なかなか忘れ、年月の程も違ひてぞ。殿の大納言、大臣に成らせ給ひにきなど云ひたれど、此歌合には中將にておはしましし程なりけり。人のせよと云ふ事にもあらず、物知らぬにぞ、人の非難き、心病ましくも思しぬべき事なれど、何の書き留めまほしきにか。過ぎにし事も、今の事も、しどけなし。斯く所所に書き留むるは、徒爾なるよりは、人にも非難かれんとなるべし。

煙の後

七月七日、中宮の御前に、前栽に斑濃の絲を引きて、色色の玉を貫きたり。「よし、見ん人は」と帝の詠まひ給ひけんは、斯く思ひ寄り給ふ人の無かりけるにや。女房、

白露も玉を磨きて千代經べき秋の宮には盡きせざりけり

行き合ひの空より置ける露なれば殊に玉をば磨くなりけり

棚機の糸に引かれてたまさかに斯く消え殘る露も有りけり

斯くていと數多ありけれど、餘りは何にかはとて止めつ。是れは此上無き前の事なり。先帝をば後朱雀院とぞ申すめる。其院の高倉殿の女四の宮をこそは齋院とは申すめれ。幼なくおはしませど、歌をめでたく詠ませ給ふ。侍ふ人人も題を出だし歌合をし、朝夕に心を遣りて過ぐさせ給ふ。物語合とて、今新しく作りて、左右方分きて、二十人合せなど爲させ給ひて、いとをかしかりけり、明暮御心地を惱ませ給ひて、果ては御心も違はせ給ひて、いと恐ろしき事を思し歎かせ給ふ。一條院の燒けにし事だに有るに、内裏、大極殿一夜に燒けぬ。いといとあさまし。是れは天喜六年と云ふ。同じ二月二十三日の夜、御堂燒けぬ。然ばかりめでたくおはします百體の釋迦、百體の觀音、阿彌陀、七佛、藥師など、丈六の御佛達、火の中に燦めきて立たせ給へる、あさましく悲し。女院の御佛なども、めでたくいみじかりつるも、夜の烟にて上らせ給ひぬる、猶猶いみじく悲し。誰にか有りけん、斯くぞ云ひける。

分ちけん烟の後の形見だに無き世は況して悲しかりけり

斯くあさましき事のみ多かれば、御心の中に殿もあさましく思召して、齋院下ろし奉らせ給ひて、麗景殿の姫宮居させ給ひぬ。下りさせ給ひても、御心地直らせ給ふこと無し。女御殿も齋院に參り通ひておはします。梅壺の女御殿は、いと尊く行ひておはします。月の傾くを御覽じて、

急がずば光を見てぞ歎かまし半過ぎ行く我身なりとて

御心地惱ましく思召されける頃、蜩の鳴くに、

明日までも聞くべきものと思はねば今日ひぐらしの聲ぞ悲しき

など仰せらるる、いと哀れなり。名殘無き樣に背き果てさせ給ひておはしませば、いと哀れに殿も見奉らせ給ふ。また類ひ無くいみじきものに幼なくより思ひ申させ給ふを、斯くて見奉らせ給ふ、いと哀れに口惜しげなり。御心地もやうやう癒らせ給へば嬉しく思召さる。せめて長くとも、他事よりは思ひ申させ給はざりけり。我れ無からん世に有るよりは衰へ、心細くや思されんと、關心き餘りには、我より後は、おはしますでもありなんと思召しながら、目の前にゆゆしからん事は見じと思右さるるは、如何がはおはしますべからん。理無き御心地にぞ。源大納言の御太郎君は新中納言俊房と聞ゆる。彼の朱雀院の二の宮は前齋院と

て、皇太后宮と一つ所におはしますに、御乳母子を語らひて、忍び忍びに參り給ひけり。然て忍びて迎ひ奉らせ給ひてければ、内裏、東宮いと便無きものに思召したる中にも、東宮は一つ御腹におはしまして、心病ましく目覺ましう思召して、内裏にも、「一人斯くのみ思ひ侍るべき事にもあらず」と、いみじく申させ給へば、畏まりて物し給ふを、猶飽かず、是れより増さりたらん罪にも當りなんと、甚く申させ給へば、如何なる事かと、大納言殿は思し歎かせ給ふ。六條にいとをかしき所、大納言殿の領ぜさせ給ひけるにぞ、おはしまさせ給ひける。大宮をも「すべて御文など通はさせ給ふな」など、東宮のいみじく申させ給へば、いと愛しくし奉らせ給ひしかど、かき絶えてはおはします。大納言殿の上、萬づに扱ひ申させ給ふ。宮の御有樣いとめでたくをかしげにおはします。中納言、物語の男君の心地し給ひて、いと貴やかに艶めかしき御有樣なり。東宮の齋院は、男宮、女宮、生み奉らせ給ひしかど、皆亡せさせ給ひにしかば、あさましき事を思し歎かせ給ふ。東宮大夫殿の女御煩はせ給ひて、やがて宮にて亡くならせ給ひにけり。あさましき事を思し歎かせ給ふ。大夫殿の上、母上など、如何なる御心地かは爲させ給ひけん。東宮の歎かせ給ふ樣限り無し。男宮一所、女宮四所ぞおはしましける。女二の宮は亡せさせ給ひにけり。哀れにいみじき事多かり。櫻のえも云はぬ盛りに、馬場殿に月の明き夜、中宮の女房行きて見るに、幾木とも無く咲き調ほりたるは、雪の降り掛かれるに違ふこと無し。「空に知られぬ」とも見えたり。飽かぬ心地しながら、然て有るべきならねば、歸るとて、

櫻花飽かぬ匂ひを春霞立ちながらのみ見てや歸らん

かき昏らす雪かと見れば皚ろなる月に散りかふ櫻なりけり

月影に散り敷く庭のさくら花かき集めても類ひ無きかな

見る樣どもをかしく見ゆ。また然らぬ人も有りけんかし。内裏の御前にて、殿上人に鞠蹴させて御覽する日の有樣、いみじくめでたし。其頃皇后宮の上の御局の泉に、大きなる櫻を挿させ給ひて、人人詠みける。

〔古本ノ注ニ、此間十行ばかり餘白あり、歌を書き入るべき料なるべしトアリト云フ。〕

中宮、皇后宮と侍はせ給ひて、内裏邊りにも有らず、狹きに、然るべき折折なん代り代りに物御覽じなどに上らせ給ひける。女御殿、里に久しくおはしますを、「參らせ給へ」と常に有れど、頓みにも入らせ給はで、法印の物し給ふ小野のいとをかしかなるも、御覽ぜまほしく思召して渡らせ給ひて、心長閑かに御行など爲させ給ひておはします。山里の秋の氣色、鹿の鳴く音なども哀れに、「秋こそ殊に」などや思召し知らせ給ひけん。内裏より御使の霧を分けて參るも、物語の心地してをかし。殿上人など數多參りて、琴彈き遊びなどしつつ歸りぬる名殘も若き人人はをかしく思ふ。内裏より侍從の内侍とて、やがて兼けて侍ふ人を奉らせ給へり。所の樣、御裝飾もいとをかしく見ゆ。羅の御几帳の裏打掛けて、わざと見えさせ給はねど、透きておはします程など、繪に書きたらん心地にてをかし。女房なども忍びやかに心にくき程なり。やがて二三日ばかり侍ひてぞ退かづる。東宮の齋院尋常ならず成らせ給ひぬ。如何がと思召して、御祈りなど爲さ